

# 山王塚古墳 総括報告書

2019

川越市教育委員会



## 序

川越市は、埼玉県のほぼ中央部に位置し、市域の南、西側は台地が、北から東にかけては沖積低地が広がっています。それら台地の縁辺部や沖積低地に分布する自然堤防上には300を超える埋蔵文化財包蔵地が知られています。

また、史跡、建造物、伝統的建造物群保存地区、無形民俗文化財をはじめとした国、県、市の指定文化財が市域には散在しています。蔵造りの町並みを中心に、国内外から年間700万人超の観光客をお迎えする中、当市の最大の魅力は文化財とそれらを培った歴史にあると言っても過言ではありません。

さて、本書で報告する山王塚古墳は、市役所より南西へ3.5km、大東地区に所在する7世紀後半の終末期古墳です。上円下方墳という墳形をしており、昭和33年に川越市の文化財（史跡）に指定されております。上円下方墳は全国的にも大変珍しく、発掘調査で確認された事例としては当市の山王塚古墳が6例目の成果となりました。

発掘調査は平成24年度から平成29年度にかけて4次にわたり実施し、また併せて地中レーダー探査、地形測量も行いました。それらの結果、墳形や規模、石室の構造の確認など、目覚ましい成果を上げることが出来ました。何よりも特徴的なのは上円部直徑37m、下方部一辺69mという大きさです。これは、上円下方墳としてはもっとも大きな規模を誇ります。

他方、山王塚古墳は江戸時代以降、祈りの場として山頂に山王社や庚申塔などが安置され、現在にいたります。また近年、周囲の宅地化が進む中で残された貴重な雑木林として、地元の方々にも親しまれております。本書では、併せ実施した植生と民俗の調査成果も掲載しました。

“川越にある日本一”山王塚古墳の歴史的価値を、市民をはじめ、多くのみなさまと共に共有し、歴史理解の一助となるよう、また学術調査や研究の資料として、文化財普及、啓発活動の資料としてご活用いただければ幸いです。

むすびに、調査の実施から本書の刊行にいたるまで、つねに御指導、御教示いただいた文化庁、埼玉県教育委員会、川越市山王塚古墳調査検討委員会、川越市文化財保護審議会の関係各位、発掘調査に御協力いただいた地権者、地域のみなさまには、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

平成31年3月31日

川越市教育委員会  
教育長 新保正俊

## 例　言

- 1) 本書は川越市教育委員会により史跡内容確認のために計画された山王塚古墳に関する調査及び測量の報告書である。調査は地権者の同意と協力を得て実施した。
- 2) 山王塚古墳は埼玉県川越市大塚一丁目 21 番 6・11・12・13、豊田町三丁目 21 番 15、同 22 番 2・3 に所在する。敷地全体は「山王塚古墳（埼玉県道跡番号：19-68）」および「山王臨遺跡（埼玉県道跡番号：19-156）」として周知されている。また、昭和 33 年 3 月 6 日に川越市指定文化財（第 32 号）・史跡となっている。
- 3) 史跡確認調査及び本報告書作成に際しては、川越市山王塚古墳調査検討委員会条例（平成二十六年六月二十五日条例第五十六号）に基づき設置した川越市山王塚古墳調査検討委員会および、文化庁文化財第二課（平成 30 年 9 月 31 日以前は文化財部記念物課）、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課（平成 30 年 3 月 31 日以前は生涯学習文化財課）から指導、助言を賜った。
- 4) 本報告では、史跡確認調査に先立つ昭和 59 年実施の範囲確認調査（小泉功 1984「川越市南大塚古墳群の山王塚について」『紀要』21 埼玉県立川越高等学校）の成果についても取り上げ、新たな知見を基に再評価した。
- 5) 川越市山王塚古墳調査検討委員会の構成は以下のとおりである。

川越市山王塚古墳調査検討委員会（平成 26 年 11 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日現在）

広瀬和雄（委員長・国立歴史民俗博物館名誉教授）平成 26 年 11 月 1 日～

塙野博（副委員長・元埼玉県立博物館館長）平成 26 年 11 月 1 日～平成 28 年 10 月 31 日

須田勉（副委員長・元国士館大学文学部教授）平成 26 年 11 月 1 日～（\* 平成 28 年 11 月 1 日より副委員長）

池上悟（委員・立正大学文学部教授）平成 26 年 11 月 1 日～

宮瀧文二（委員・大東文化大学文学部教授）平成 26 年 11 月 1 日～

小久保徹（委員・元埼玉県立さきたま資料館副館長）平成 26 年 11 月 1 日～

- 6) 平成 24 年度以降の発掘調査、整理作業、および山王塚古墳調査検討委員会庶務等の執行組織は以下のとおりである。

川越市教育委員会　教育長

新井孝次（～平成 25 年 3 月 31 日）

伊藤明（平成 25 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日）

新保正俊（平成 28 年 4 月 1 日～）

文化財保護課　課長

田中伸（平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日）

忽滑谷達夫（平成 25 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日）

下　薰（平成 27 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）

田中敦子（平成 30 年 4 月 1 日～）

副課長　　大澤健（平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日）

田中敦子（平成 27 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）

真仁田英彰（平成 30 年 4 月 1 日～）

主担当者　　平野寛之（平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日）

岡田賢治（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

藤田健一（平成 29 年 4 月 1 日～）

- 7) 報告書作成は平成 30 年度に川越市文化財保護課で行った。

文化財保護課　課長　　田中敦子

副課長　　真仁田英彰

調査担当主幹　井口信久

調査担当主査　山田雄正

調査担当主査　藤田健一

8) 発掘調査に従事した方々は以下のとおりである。

浅野百世、東雅子、井上三男、岩本浩一、大矢誠一、岡本信勝、奥泉克美、小此木章一、神山紀子、紀村龍一、澤田洋、

嶋田勝、鈴木秀平、田中美由子、辻村万史、西ノ谷重子、藤井栄二、古川猛、皆川和千、望月文枝、渡邊咲子

9) 整理作業に従事した方々は以下のとおりである。

新井博子、池谷久美、市川邦子、稲村三枝子、大野弘子、思田きみ江、加藤久子、小林直枝、鈴木薫子、高玉さちえ、

宮根博子

10) 平成 24 年度および 27 年度に行った発掘調査基準杭設定、平成 30 年に行った史跡空中写真撮影は株式会社東京航業研究所に委託し実施した。

11) 平成 24 年度の第 1 次発掘調査時に世界潮地系を基に基準杭を打ち、5m メッシュを設定し任意のグリッド名を割り振った。東西軸にアルファベット（A-Z）、南北軸に数字（1-32）を振り、各グリッドの北西隅の杭を基準杭とした。平成 28 年度、29 年度の発掘調査区は、これらの基準杭と地形測量図を基に設定した。

12) 平成 25 年度、29 年度に行った地形測量はホープ測量設計株式会社に委託し実施した。

13) 平成 26 年度、30 年度に行った地中レーダー探査は株式会社中野技術に委託し実施した。

14) 本書の編集は藤田健一（文化財保護課）が行った。執筆者は以下のとおりである。

第Ⅰ章 1 節：藤田、第Ⅰ章 2 節：山田雄正（文化財保護課）、藤田。第Ⅱ章 1・3・5 節：藤田。

第Ⅱ章 2 節は各調査の担当者である平野寛之（平成 28 年度より市立博物館）、岡田賢治（平成 30 年度より市立博物館）、藤田がそれぞれ執筆し、文体等を藤田が統一した。

第Ⅲ章 1 節：平野寛之（川越市立博物館）。

第Ⅳ章 1・2 節：藤田、3 節：田中敦子、井口信久（以上、文化財保護課）。

15) 第Ⅱ章 4 節、第Ⅲ章については以下の方々より玉稿を閲った。

第Ⅱ章 4 節：清水理史、石森光（以上、株式会社中野技術）

第Ⅲ章 1 節：広瀬和雄、池上悟、宮瀧交二、小久保徹（以上、川越市山王塚古墳調査検討委員会）

第Ⅲ章 2 節：大久根茂、牧野彰吾（以上、川越市文化財保護審議会）

16) 発掘調査及び本書の作成に当たり、以下のとおり、機関等からご教示、ご協力を賜った。

赤熊浩一、秋池武、牛窪久明、牛窪基夫、牛窪光江、牛窪雪子、太田博之、大谷徹、岡本健一、加藤恭朗、金子彰男、川畑純、君島勝秀、倉澤麻由子、高麗正、紺野英二、斎藤あや、佐藤康二、末木啓介、杉崎茂樹、開口英之、田中広明、田村朋美、富田和夫、永井智教、西口正純、瀬戸田佳男、土生田純之、坂野千登勢、福田健司、藤野一之、堀口智彦、右鳥和夫、水口由紀子、水ノ江和同、皆川和江、皆川秀敏、皆川みち子、宮原正樹、村田章人、森先一貴、山川守男、山崎武、山田琴子、弓明義（五十音順、敬称略）

文化庁、埼玉県教育委員会

17) 出土遺物の保管先は名細出土品整理室（川越市大字小堤 14-11）である。

18) 例言及び本文において研究者名等の敬称は原則として略して掲載した。

## 凡 例

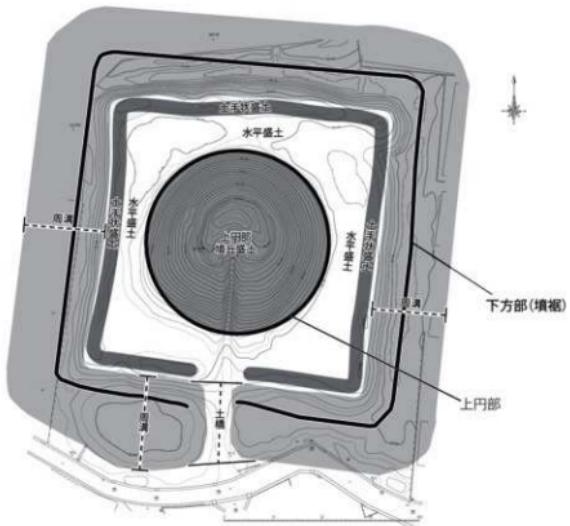
- 1) 遺構平面図および断面図の縮尺は、墳丘および周溝の断ち割りトレントは1/100、主体部は1/50を基本としている。ただし、長大なトレントは適宜縮小し、また土層が込み合う場所については、部分的に拡大して示した。いずれの場合も縮尺はその都度図中に示した。
- 2) 各トレントの遺構平面図は、基本的に調査時の最終掘削面を作図した。築造時の墳丘表面の図面は、現場の記録から復元し作成して、これを基に墳丘の規模を計測した。
- 3) I-2-1図、I-2-2図は国土地理院作成の電子地形図25000オンデマンド版を下図として作成した。スケールは各図に示したとおりである。
- 4) 土層断面図中のアルファベットはセクションポイントないしはエレベーションポイントを表し、平面図と土層図と同じ文字のポイントがそれぞれ対応関係を持つ。また、ポイント横の数値は標高を示す（単位m）。
- 5) 昭和59年調査の報告文（小泉1984）に掲載された図面からは、土層断面図の標高が読み取れないが、現在に至るまで地表面の高さはさほど変化していないものと考えられる。したがって、周囲の地表面の標高を手がかりに、必要に応じて周溝形状などを復元する材料として使用した。
- 6) 山王塚西古墳（山王脇遺跡第2次調査）の調査区の厳密な位置は報告書からは読み取ることが出来ない。ただし、山王脇遺跡第9次調査において、山王塚西古墳の周溝の続きと考えられる溝跡を検出していることからその成果を参照し、山王塚西古墳の調査区の場所を特定して平面図に示した。
- 7) 土層断面図は盛上過程ないしは埋没過程を理解しやすくするために、土層を単位ごとに一つの群で東ね層群とし、土層図の半分の縮尺で土層群模式図を示した。土層断面図は、丸数字（①、②…）で層群を示し、各層群ごとに土層に通じて枝番号（-1、-2…）を充てた。
- 8) 断面図中の斜線は未掘部分の地山（関東ローム層）を表す。
- 9) 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とし、石室石材など大形のものは1/5とした。それと異なる場合もあるが、いずれもその都度図中にスケールを示した。遺物図版では各遺物の図版番号の後に括弧付きで出土トレントを示した（例：(1T)=1号トレント出土）。角閃石安山岩の石材は、縦面および剥離面については実測図、加工面は拓本で示した。
- 10) 写真図版は各調査地点の代表的な遺構・遺物について掲載した。
- 11) 本報告書内では以下の名称、用語について、原則として統一表記する。ただし、第三章については各執筆者の見解によって別表記するものもある。

### [墳丘および周辺部の名称]

山王塚古墳の墳丘は上円部と下方部からなるが、いずれも原則として旧地表面上にローム土を芯材として積み上げている（ただし、石室直下は旧表土が取り除かれていた）。これらの墳丘を構築した盛土を「墳丘盛土」と呼称する。下方部は掘り残した旧地表面とその上に乗る「土手状盛土」、「水平盛土」から構成される。前者は、周縁部を廻る土手状の盛土で、上円部築造の後に旧表土上に積み上げられた。後者は、土手状盛土が廻られたのちに、上円部と土手状盛土の間を埋めるように盛られた。これら墳丘の構築材の大部分は良質なローム土であり、それを採掘したと考えられる土坑（大形土坑）を周溝や下方部の下位で確認している。墳丘を取り囲む幅広の溝は「周溝」、墳丘南側で周溝が一部途切れる部分は「土橋」と呼ぶ。

### [石室各部の名称]

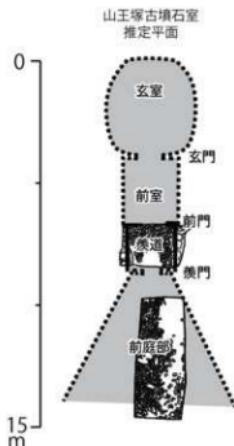
山王塚古墳の主体部は、発掘調査およびレーダー探査から全長15m程度の複室構造の横穴式石室と推定した。想定される石室空間は3つと考えており、奥から「玄室」「前室」「羨道」と呼称する。また、各々の室部の前に立つ門を「玄門」「前門」「羨門」と呼称する。それぞれは門柱石が立てられたと考えており、その石材を指す場合は、「玄門柱石」「前門柱石」「羨門柱石」とする。羨門の手前には閉塞施設が想定され、

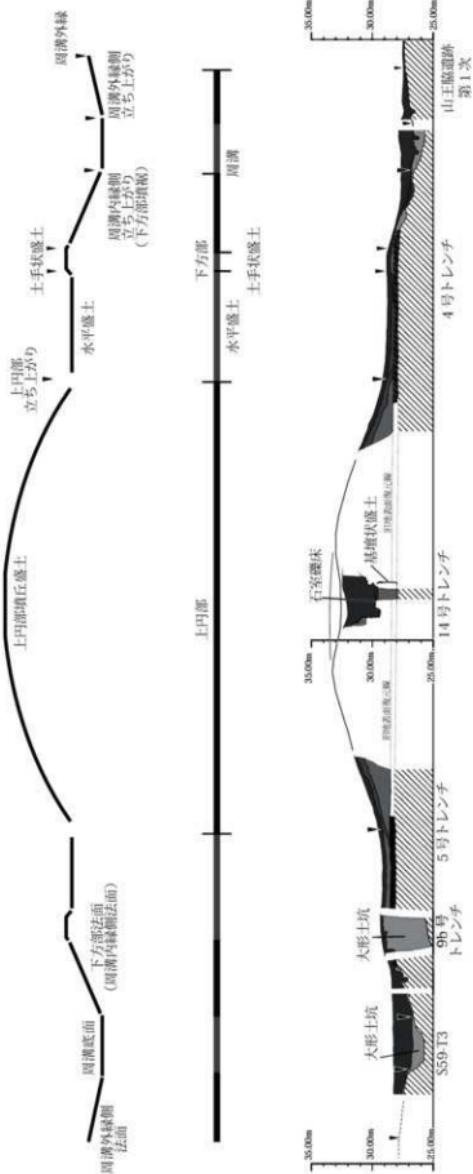


さらにその手前はハの字状に開く墓前域が想定される。この墓前域については「前庭部」と呼称する。石室床面には拳大の礫が敷き詰められていた。これを「礫床」とする。

#### [埴丘構築に関する技術的な名称]

石室直下の旧表土および関東ローム層上面（ソフトローム部分）は取り除かれている。そこへ良質なローム土を突き固めながら旧地表面よりも 130cm 高く基壇状の盛土を行っており、その上に石室を構築している。この石室直下の掘り込みは浅く、また盛土を地表面よりも高く積み上げているため、掘り込み地業とは異なる。これを「基壇状盛土」と呼称する。また、上円部の埴丘盛土はローム土を主体とした土を叩き締めながら固く積み上げており、土層断面は互層状に観察される。しかしながら、古代寺院の基壇や築地などに用いられる版塗ほどは綺麗ではなく、枠板を用いたとも考え難い。このため、版塗に類似する工法として「版塗状」と呼称し、この工法で積み上げられた盛土を「版塗状の盛土」とする。





注 本図は山王塙古墳を東西に断ち割り、南北見通したことを見定めた概念図(縮尺1/400)である。

地形図より作成した山王塙古墳の東西断面に、近接する4、5号トレンチ、S59-T3、山王塙道路第1次調査（土層断面E-E'）の土層断面図を重ねた。

地形図より作成した山王塙古墳の東西断面に、近接する4、5号トレンチ、S59-T3、山王塙道路第1次調査（土層断面E-E'）の土層断面図を重ねた。

石室と直下の地盤、大形土坑の掘削深度を把握する補助とするため、それぞれ14号トレンチ、9号トレンチの断面も適宜、反映したものがある。

いずれも一直線上にある土層断面ではないため、正確な断面図ではないが、旧地表面と填縫土、地盤、大形土坑の比高を把握するための補助となるものである。

## 目 次

序・例言・凡例・目次（本文、図版、表、写真）

### 第I章 山王塚古墳の環境

    第1節 地理的環境 ..... 1

    第2節 歴史的環境 ..... 3

### 第II章 山王塚古墳の調査

    第1節 調査の経緯 ..... 13

    第2節 検出遺構 ..... 16

        (1) 昭和59年調査 ..... 16

        (2) 第1次調査 ..... 20

        (3) 第2次調査 ..... 26

        (4) 第3次調査 ..... 37

        (5) 第4次調査 ..... 45

    第3節 出土遺物 ..... 51

        (1) 古墳にともなう遺物 ..... 51

        (2) その他の時代の遺物 ..... 58

    第4節 地中レーダー探査 ..... 63

    第5節 発掘調査成果のまとめ ..... 68

### 第III章 山王塚古墳をめぐる諸問題

    第1節 古代社会と山王塚古墳 ..... 75

        (1) 山王塚古墳と武藏の終末期古墳 ..... 75

        (2) 山王塚古墳と畿内の終末期古墳—終末後期古墳論に関する素描— ..... 79

        (3) 「東山道武藏路」（入間道）と山王塚古墳 ..... 89

        (4) 各地の上円下方墳と山王塚古墳 ..... 92

        (5) 武藏国の官衙・古代寺院と山王塚古墳 ..... 97

    第2節 現在の山王塚古墳 ..... 101

        (1) 山王塚古墳の植生について ..... 101

        (2) 山王塚の民俗 ..... 103

### 第IV章 総括

    第1節 山王塚古墳の調査成果 ..... 107

        (1) 墳丘と周溝 ..... 107

        (2) 埋葬施設 ..... 108

        (3) 出土遺物 ..... 109

        (4) 築造年代 ..... 109

    第2節 山王塚古墳の歴史的価値 ..... 110

    第3節 山王塚古墳の保存と活用にむけて ..... 113

写真図版

## 図版目次

I -1-1 図	埼玉県の地形分類図	1
I -1-2 図	山王塚古墳と周辺の地形	2
I -2-1 図	山王塚古墳周辺の遺跡分布図	4
I -2-2 図	南大塚古墳群	5
I -2-3 図	山王脇遺跡調査区(S=1/1,200)	8
I -2-4 図	山王脇遺跡第1次調査 平面図	8
I -2-5 図	山王脇遺跡第1次調査 土層断面図と山王塚古墳周溝復元図	9
I -2-7 図	山王塚西古墳 平面・土層断面図	10
I -2-8 図	山王脇遺跡第5次調査平面図	12
I -2-9 図	山王脇遺跡第13次調査 平面図・断面図	12
II -1-1 図	トレンチ配置図	14
II -2-1 図	S59-T 1・2 (昭和59年調査 1号・2号トレンチ) 平面図・土層断面図	17
II -2-2 図	S59-T 3・4 (昭和59年調査 3号・4号トレンチ) 平面図・土層断面図	19
II -2-3 図	1号トレンチ 平面図・土層断面図	21
II -2-4 図	1号トレンチ 土層説明図	22
II -2-5 図	1号トレンチ 土層断面図(拡大)	23
II -2-6 図	2号トレンチ 平面図・土層断面図	24
II -2-7 図	2号トレンチ 土層説明図	25
II -2-8 図	3号トレンチ 平面図・土層断面図	25
II -2-9 図	4号トレンチ 土層断面図(拡大)	26
II -2-10 図	4号トレンチ 平面図・土層断面図	27
II -2-11 図	4号トレンチ 土層説明図	28
II -2-12 図	5号トレンチ 土層断面図(拡大)	29
II -2-13 図	5号トレンチ 平面図・土層断面図	30
II -2-14 図	5号トレンチ 土層説明図	31
II -2-15 図	6号トレンチ 土層説明図	32
II -2-16 図	6号トレンチ 平面図・土層断面図	33
II -2-17 図	7号トレンチ 平面図・土層断面図	34
II -2-18 図	8号トレンチ 平面図・土層断面図	36
II -2-19 図	9号トレンチ 平面図・土層断面図	38
II -2-20 図	9号トレンチ 土層断面図・土層説明図	39
II -2-21 図	10号トレンチ 平面図・土層断面図	40
II -2-22 図	11号トレンチ 平面図・土層断面図	41
II -2-23 図	12号トレンチ 平面図・土層断面図	42
II -2-24 図	12号トレンチ 土層説明図	43
II -2-25 図	13号トレンチ 平面図・土層断面図	44
II -2-26 図	14号トレンチ 平面図	46
II -2-27 図	14号トレンチ 土層断面図	47
II -2-28 図	14号トレンチ 土層断面図	48
II -2-29 図	14号トレンチ 土層断面図	49

II -3-1 図	出土遺物 須恵器	52
II -3-2 図	出土遺物 鉄釘・ガラス小玉	53
II -3-3 図	出土遺物 石材（角閃石安山岩）1	55
II -3-4 図	出土遺物 石材（角閃石安山岩）2	56
II -3-5 図	出土遺物 石材（角閃石安山岩）3	57
II -3-6 図	出土遺物 繩文時代	59
II -3-7 図	出土遺物 繩文時代	60
II -3-8 図	出土遺物 古代・中世	61
II -3-9 図	出土遺物 近世	62
II -4-1 図	レーダー探査実施地点	64
II -4-2 図	T S 平面図・プロファイル図	66
II -5-1 図	大形土坑分布状況 (S=1/1000)	68
II -5-2 図	山王塚古墳墳丘寸法 (S=1/1000)	70
II -5-3 図	主体部検出状況	71
II -5-4 図	側壁石材加工状況模式図	71
II -5-5 図	横穴式石室に用いられた石材の分布図	72
III -1-1 図	山王塚古墳と交通路	91
III -1-2 図	上円下方墳の築造企画	93
III -1-3 図	7世紀後半の武藏國の主な古墳・寺院・評家分布図	100
III -2-1 図	積算胸高断面積 (m <sup>2</sup> )	101
III -2-2 図	山王塚古墳の植生 (樹木配置) 2016年6～8月測量	102
III -2-3 図	山王塚の空中写真・石造物写真	105
IV -1-1 図	山王塚古墳復元図 (S=1/1000)	107
IV -1-2 図	石室復元図と類例比較	108

## 表目次

I -1-1 表	南大塚古墳群の一覧	6
I -1-2 表	山王塚遺跡調査履歴一覧	7
II -1-1 表	山王塚古墳発掘調査履歴	16
II -4-1 表	使用機材	64
III -2-2 表	山王塚の石造物	104
IV -1-1 表	発掘調査された上円下方墳	109
IV -2-1 表	北武藏の終末期古墳	111

## 写真図版目次

### 写真図版 i

山王塚古墳空中写真南から（南から）

### 写真図版 ii

山王塚古墳空中写真俯瞰（上が北）

山王塚古墳現況（南西から）

### 写真図版 iii

昭和 59 年調査風景 墳丘北側（北から）

昭和 59 年調査風景 S59-3T（南から）

S59-1T（北から）

S59-2T（南から）

### 写真図版 iv

1 号トレンチ（南から）

1 号トレンチ 上円部裾部礫検出状況（東から）

2 号トレンチ（南から）

3 号トレンチ（西から）

4 号トレンチ（東から）

### 写真図版 v

4 号トレンチ 上円部埴丘盛土（東から）

4 号トレンチ 墓丘盛土層断面（北東から）

5 号トレンチ（西から）

5 号トレンチ 上円部埴丘盛土（西から）

5 号トレンチ 土層断面（南から）

### 写真図版 vi

6 号トレンチ（南から）

6 号トレンチ 下方部埴丘盛土（南から）

6 号トレンチ 周溝検出状況（北から）

7 号トレンチ（東から）

8 号トレンチ（南から）

### 写真図版 vii

8 号トレンチ 周溝外縁側立ち上がり（北から）

9a 号トレンチ（南から）

9b 号トレンチ 土層断面（東から）

10 号トレンチ（北から）

### 写真図版 viii

11 号トレンチ（北から）

11 号トレンチ 東壁土層断面（西から）

11 号トレンチ 西壁土層断面（東から）

12 号トレンチ（北から）

13 号トレンチ（西から）

### 写真図版 ix

12 号トレンチ 遺物検出状況（西から）

14 号トレンチ 前門柱石検出状況（南から）

14 号トレンチ 羨道西側の側壁検出状況（南東から）

14 号トレンチ 羨道礫床検出状況（南から）

### 写真図版 x

14 号トレンチ 羨道西側の側壁検出状況（南東から）

14 号トレンチ 羨道礫床検出状況（南から）

### 写真図版 xi

14 号トレンチ 磐床および門柱石基礎検出状況（東から）

14 号トレンチ 門柱石東側基礎検出状況（南から）

14 号トレンチ 東側門柱石基礎の緑泥片岩付着状況  
(南から)

14 号トレンチ 門柱石基礎西側検出状況（南から）

14 号トレンチ 西側門柱石基礎の緑泥片岩付着状況  
(南から)

### 写真図版 xii

14 号トレンチ 北壁土層断面（南から）

14 号トレンチ 石室裏込め検出状況（東から）

14 号トレンチ 遺物出土状況（西から）

14 号トレンチ サブトレンチ石室直下の地業（北から）

### 写真図版 xiii

12 号トレンチ出土 須恵器 平瓶

14 号トレンチ出土 須恵器 フラスコ形長頸瓶（1）

14 号トレンチ出土 須恵器 フラスコ形長頸瓶（2）

14 号トレンチ出土 須恵器 フラスコ形長頸瓶（3）

14 号トレンチ出土 須恵器 フラスコ形長頸瓶 破片

### 写真図版 xiv

12・14 号トレンチ出土遺物（鉄釘、ガラス小玉）

14 号トレンチ出土 鉄製品（表・裏）

### 写真図版 xv

14 号トレンチ出土 角閃石安山岩の加工石材（1）

14 号トレンチ出土 角閃石安山岩の加工石材（2）

### 写真図版 xvi

14 号トレンチ出土 角閃石安山岩

（奥=側壁石材、手前左=切石、手前右=剥片）

14 号トレンチ出土 緑泥片岩

14 号トレンチ出土 河原石

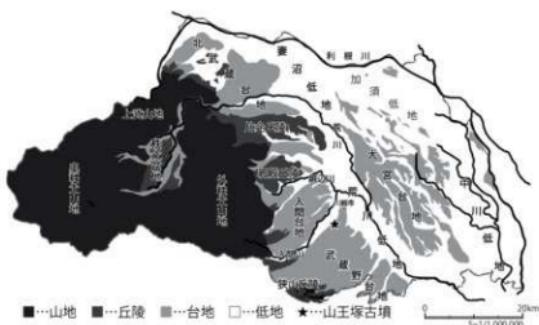
# 第Ⅰ章 山王塚古墳の環境

## 第1節 地理的環境

山王塚古墳は埼玉県川越市大塚一丁目および豊田町三丁目に所在する。JR 川越駅から南西へ約2km、関越自動車道川越インターチェンジから北東へおよそ 0.7km に位置する。

埼玉県は関東地方の中央西側に位置しており、東西に長い台形様を呈する。県土の西側は関東山地の北部にあたり、外秩父山地、奥秩父山地、上武山地と中央の秩父盆地からなる。山地の東縁辺には丘陵地形が分布しており、県土の東側は関東平野の西側にあたる。関東山地が第三紀以前に形成されていたのに対し、関東平野西部は第四紀以降、陸地化が進み、最終的に最終間氷期以降にかなりの部分が形成されたと考えられる。埼玉県域の丘陵および台地の多くは関東山地から下流する河川によって形成された扇状地形に由来するため、西から東へ向かって傾斜する傾向がある。荒川や多摩川は標高 2000m 超の関東山地を流域にもっており、武藏野台地、北武藏台地の南東側など比較的広域な扇状地形を発達させるが、入間川や高麗川、越辺川、都幾川など 1000m 前後の秩父山地から流れれる河川の作り出した扇状地は比較的狭い。これらの台地以東は荒川、中川が流れる。この両河川に挟まれた台地が大宮台地である。大宮台地の中には元荒川や綾瀬川をはじめとして大小の河川があり、それらに開析された大宮台地はとくに東北側では複数の小さな台地の集合と捉えられる。また、中川より東の県境付近には、江戸川の開析によって下総台地から切り離された東部台地が存在する。平野部の河川沿いには沖積低地が発達する。特に荒川や利根川などの主要河川沿いには大きな低地が広がっており、大宮台地以西には北から妻沼低地と荒川低地、以東には加須低地と中川低地がある。

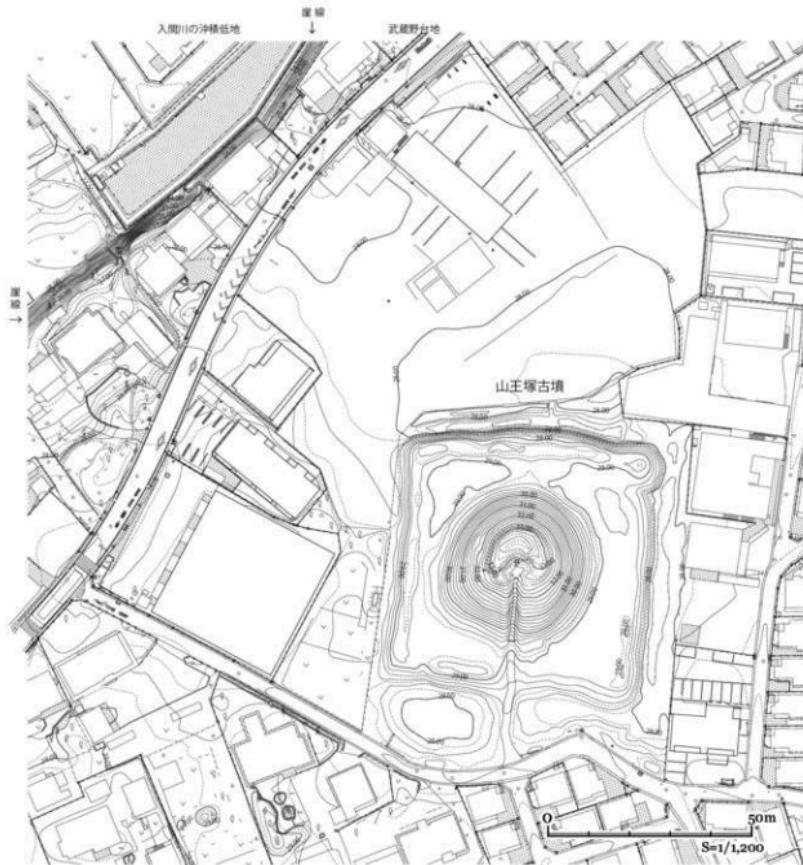
川越市は埼玉県の中央やや南側に位置する。市域は武藏野台地の北部と入間台地の東部にまたがる。また、市域西側から北側にかけて入間川が武藏野台地を回り込むように流れており、市域北側で越辺川が、市域東側で荒川と合流する。武藏野台地は埼玉県南部から東京都にまたがる広い台地であ



I-1-1 図 埼玉県の地形分類図

る。多摩川の扇状地上に風成層が堆積しており、複数の段丘面を形成している。丘陵や低地を除くと、高位のものから、下末吉面、武藏野面、立川面に区分される。武藏野台地の北部、柳瀬川以北の台地は特に川越台地と呼称される。その中でも荒川低地に半島状に突き出る最北端の台地は川越台と呼ばれ、武藏野面に区分されている。台地東端の川越市役所付近では標高19m、西端の付け根部分である狭山市域では標高60mで、一段高い下末吉面である金子台へと接続する。

山王塚古墳は川越台上の西側縁辺部に立地しており、北西に入間川が作り出した沖積低地を臨む。段丘崖からは100mほど内側へ入る。周囲は平坦であるが、扇状地形の影響から南西から北東へ向けてやや下がる。周辺の標高はおおむね28.5m、崖線下は標高23.0mである。台地と低地の比高は5.5mである。



I-1-2 図 山王塚古墳と周辺の地形

## 第2節 歴史的環境

山王塚古墳が立地する赤間川及び入間川右岸の、沖積地を臨む武藏野台地北端部には多くの遺跡が所在している。

それらの中心となるのは古墳や古墳時代後期以降の集落跡である。古墳は、この台地縁辺部に沿つて約2.5kmにわたり分布し、みなみななむか南大塚古墳群を形成している。同古墳群は、高速道路建設等の開発行為により多くの古墳が姿を消したもの、これまで計27基の古墳が確認されている。それらの築造時期は、5世紀前葉を最古とし、6世紀前葉から7世紀前葉の古墳時代後期を中心とすることがこれまでの調査で判明している。このなかで、古墳群の東方に位置する山王塚古墳は、墳形や出土遺物から最終段階に築造されたものと考えられる。

古墳時代以降の集落跡は、古墳時代後期から古代はじめにかけての時期を中心であり、山王塚古墳の東側に位置する山王脇遺跡や北東方向の1km以内には、寿町遺跡、寿町東遺跡、広栄町遺跡等が所在している。これらの集落跡の営まれた時期は、山王塚古墳の築造時期に前後し、また近い距離にあるため、関連が推定される集落跡である。

同じく武藏野台地上でいえば、山王塚古墳の東方約2km、武藏野台地東側縁辺に、7世紀後半の瓦が多数出土することで知られる集落である熊野神社西遺跡がある。そして近接する南側斜面の崖線には岸町横穴墓群が知られる。また、北側へ向かって半島状に突き出す武藏野台地最北端には現在、川越市中心市街地が所在するが、4世紀末の方墳である三変稻荷神社古墳を端緒とする仙波古墳群が展開しており、7世紀前半まで続くと考えられる。仙波古墳群の東端には古墳時代前期に弁天西遺跡、弁天南遺跡など大集落が営まれ、その後ほぼ間断なく古代まで継続する。

他方、山王塚古墳の西方約2.5km付近は、古代の官道である東山道武藏路の推定ルート上に当たっており、対岸の入間台地縁辺には、「驛長」墨書土器（8世紀前半）が出土した八幡前・若宮遺跡が所在する。当遺跡は、この墨書土器の出土によって武藏国府から数えて3番目の駅家跡の一部と推定されている。東山道武藏路の敷設は7世紀後半頃と考えられており、山王塚古墳の築造時期と相前後することから、その関連が考えられている。

八幡前・若宮遺跡が所在する入間川左岸と小畔川右岸に挟まれた台地縁辺部（入間台地東縁部）の遺跡を概観すると、牛塚古墳（6世紀末頃・前方後円墳）を主墳とする的場古墳群（30基以上）や入間郡家の有力地である霞ヶ関遺跡などが所在する。霞ヶ関遺跡は、これまでの調査で8世紀前半の大型掘立柱建物跡が検出され（第7～9次調査）、周辺遺跡では「入厨」墨書土器等が出土するなど郡家に関連する遺構・遺物が見つかっている。

さらに小畔川左岸側には6世紀～7世紀に築造された下小坂古墳群（20基以上）が、同じく小畔川左岸の川越市と鶴ヶ島市の市境には7世紀後半の方墳である鶴ヶ丘稻荷神社古墳を含む鶴ヶ丘古墳群（30基前後）が造営される。

これら古墳群の存在は、流域各所に在地勢力が割拠したことを見ている。

以上のことから、山王塚古墳とその周辺は、古代における交通の要衝であり、的場古墳群、仙波古墳群、下小坂古墳群などの存在により前代からの在地有力勢力が林立していたことが解る。対岸には古代の入間郡家比定地が所在しており、古墳時代終末期から古代はじめにかけて歴史的に重要な遺

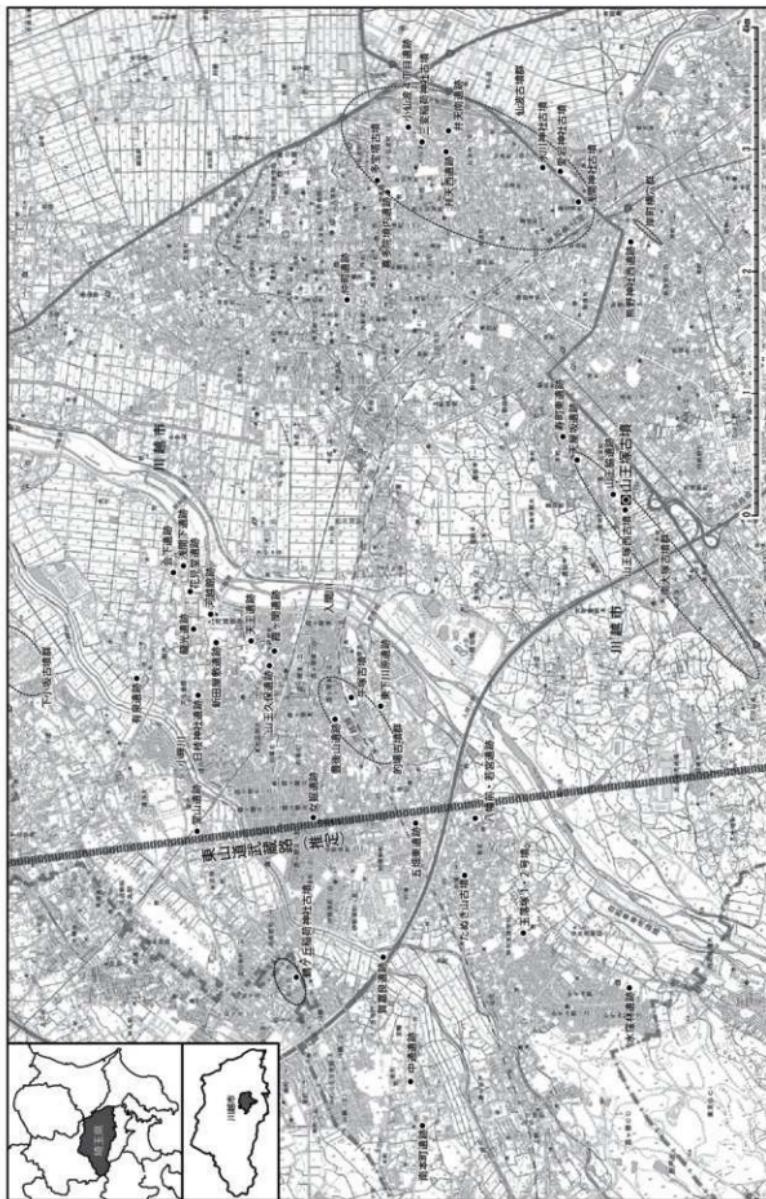


図 1-2-1 山王塚古墳周辺の道路分布図



1-2-2図 南大塚古墳群

跡が密集する地域といえる。

以下では、山王塚古墳の属する南大塚古墳群と、山王塚古墳に隣接し、築造時期に近い集落遺跡である山王脇遺跡の調査成果について記述する。

#### ・南大塚古墳群

今までに確認されている27基の古墳は深い谷筋によって、東方から順に豊田町支群・大塚支群・豊田本支群・大袋新田支群の4つの支群に分けることができる。27基中、16基の調査がなされ、滅失は2基、未掘は9基である。多くの古墳が6世紀前葉から7世紀前葉にかけて築造された。

**豊田町支群（1基）** 平成23年に直径14mの円墳である天屋坂遺跡1号墳の周溝部分のみが検出され、土師器壺の大形破片が出土した。出土遺物から、5世紀前葉の古墳と推定される。南大塚古墳群における最も古い古墳であり、古墳群の範囲も東方に広がることが明らかになった。

**大塚支群（2基）** 山王塚古墳が属する。山王塚西古墳は、山王塚古墳の西側に近接する直径43mの円墳である。平成4年の調査で、墳丘はすでに削られていたものの、横穴式石室（下部が残存）が検出され、耳環や勾玉などの数多くの玉類他が出土した。出土遺物から7世紀前葉と推定され、山王塚古墳に先行する古墳であることが判明している。

**豊田本支群（18基）** 南大塚古墳群の主体をなし、1基のみ前方後円墳で、他は直径20～30mの円墳である。墳長40mの前方後円墳（帆立貝形）である南大塚4号墳は、昭和61～62年に調査され、河原石積の横穴式石室が検出された。土器のほか切子玉が出土している。2条凸帯の円筒埴輪や出土遺物等から6世紀後葉の築造と推定される。近年では、平成26年に西中原5号墳が調査され、2条凸帯の円筒埴輪、直刀が出土している。礫桶を伴う直径31mの円墳であり、築造時期は6世紀

支群	番号	名称	墳形	規模	埋葬施設	副葬品	埴輪	築造年代	備考	調査歴
豊田支群	1	天原坂道路1号墳	円墳	直径14m	不明	不明	なし	5世紀前葉	周囲より土師器遺出土。	H23
大袋支群	2	山王塚古墳	上円下方墳	上円部直径37m 下方部一辺69m	横穴式石室	不明	なし	7世紀後葉3 四半期	横穴式石室の所在を確認	S59, H25, 27-29
	3	山王塚西古墳	円墳	直径43m	横穴式石室	眞理11, 矢玉8, 切子玉2, 丸玉7, ガラス玉2, 17, 直 刀3, 痛頭1, 鐘3, 鞆1, 鉄鎌等	なし	7世紀前葉	墳丘面から銀象嵌六窓透 青銅鏡より土師器遺出土。	H4
	4	南大塚跡1号墳	円墳	直径23m	不明	不明	なし	不明	周囲外埋葬1。	S46
	5	南大塚跡2号墳	円墳	直径23m	横穴式石室	...	なし	6世紀後葉	周囲より土師器遺出土。	S46
	6	南大塚跡3号墳	円墳	直径24m	不明	不明	なし	不明	埴輪埋葬1。	S46
	7	南大塚1号墳	円墳	直径21m	礎床粘土層	なし	なし	6世紀前葉	周囲外埋葬1。	S61
	8	南大塚2号墳	円墳	直径23m	礎床粘土層	刀子1・鉄鎌8	なし	6世紀前葉	周囲外埋葬3。 周囲土埋葬1。須恵器遺 出土。	S61
	9	南大塚4号墳	前方後円墳	墳長40m	横穴式石室	切子玉4	あり (2条 凸帯)	6世紀後葉	周囲外埋葬1。周道部土 被覆1。 埴輪は須恵器高环、周囲 土被覆1。須恵器遺出土。	S61
	10	南大塚5号墳	円墳	直径29m	粘土層	直刀2	あり	6世紀中葉	周囲外埴輪1。	H15
	11	南大塚6号墳	(円墳)	(直径8m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埋滅	未掘
	12	南大塚7号墳	円墳	直径26m	横穴式石室	不明	なし	7世紀前葉	周囲外埴輪1。	H15
	13	南大塚8号墳	円墳	直径27m	横穴式石室	直刀1, 鞍1, 足金物1	なし	7世紀前葉	須恵器高环出士	H15
	14	中道古墳	(円墳)	(直径30m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘、周囲残存	未掘
	15	中原古墳	(円墳)	(直径13m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘残存	未掘
	16	永久保古墳	(円墳)	(直径8m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘残存	未掘
	17	皆原神社東古墳	(円墳)	(直径10m以上)	(不明)	(伝) 直刀	(なし)	(不明)	埴丘残存	未掘
	18	西中原1号墳	円墳	直径35m	不明	不明	なし	不明	周囲外埋葬1	S61
	19	西中原3号墳	(円墳)	(直径24m程度)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘、周囲残存	未掘
	20	西中原4号墳		(直径13m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘残存	未掘
	21	西中原5号墳	円墳	直径31m	礎	直刀1	あり (2条 凸帯)	6世紀中葉		H26
大袋新田支群	22	西中原8号墳	(円墳)	(直径10m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埋滅	未掘
	23	寺ノ側古墳	(円墳)	(直径13m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘部に呼平神社。 埴丘、周囲残存	未掘
	24	千歳塚1号墳	円墳	直径15m	横穴式石室	不明	なし	7世紀前葉		H20.22
	25	千歳塚2号墳	円墳	直径30m	不明	不明	なし	不明	周囲一部のみ調査。	H20
	26	愛宕側古墳	(円墳)		(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘部に愛宕神社。 埴丘残存。	未掘
	27	西中原9号墳	(円墳)	(直径14m以上)	(不明)	(不明)	(なし)	(不明)	埴丘残存。	未掘

I -1-1 表 南大塚古墳群の一覧

前葉と推定される。

大袋新田支群(6基) 墳丘上に神社が所在する2基を含め未掘のものが多い。この中で、平成20、22年に千歳塚古墳1号墳、2号墳が調査されている。それぞれ直径約15m、約30mの円墳である。調査では、古墳に伴う遺物が出土していないため、築造時期は不明である。埴輪樹立の痕跡が認められないことから、7世紀代の古墳と推定される。

#### ・山王脇遺跡

山王塚古墳の周囲に営まれた古墳時代後期から古代にかけての集落跡である。これまで13次にわたり発掘調査が実施されている。この内、山王塚古墳の周溝部分調査(第1、5、13次)、山王塚西古墳及び周溝部分の調査(第2、9次)、時期不明の鍛冶遺構等の調査(第3次)を除くとそのほと

調査次数	調査場所	調査期間	面積	主な様出遺構	時期
1次	川越市南大塚字山王脇914	H 3.7.8. ～8.28.	493m <sup>2</sup>	山王塚古墳周溝 竪穴建物跡 1	古墳時代終末期 ・平安時代
2次	川越市大塚新田字山王前490、191	H 4.3.25. ～6.10.	1,608m <sup>2</sup>	山王塚西古墳	6世紀末～7世紀
3次	川越市南大塚字山王脇919、927、928	H 5.6.1. ～7.15.	915m <sup>2</sup>	鍛冶遺構 1 炉 <sup>3</sup>	時期不明
4次	川越市南大塚字山王脇953-2、3	H 7.1.17. ～3.15.	396m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 8	7世紀後半
5次	川越市南大塚字山王脇921-1他	H 8.7.3. ～H 9.9.27.	637m <sup>2</sup>	山王塚古墳周溝	古墳時代終末期
6次	川越市南大塚字山王脇953-1	H 8.12.3. ～H 9.1.27.	187m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 2	古墳時代終末期 ～奈良時代初期
7次	川越市南大塚948-1	H 11.5.25. ～6.29.	470m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 4	古墳時代後期、 奈良時代
8次	川越市南大塚字山王脇912-1一部	H 13.7.18. ～7.19.	19m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 1	古墳時代後期
9次	川越市豊田町3-22-10一部	H 15.7.8. ～8.11.	293m <sup>2</sup>	山王塚西古墳周溝	6世紀末～7世紀
10次	川越市豊田町3-18-1、2	H 17.1.12. ～2.1.	70m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 1	8世紀中頃
11次	川越市豊田町3-13-10他	H 22.9.6. ～H 23.1.4.	2500m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 19	7世紀末～8世紀前
12次	川越市豊田町3-13-2	H 24.4.4. ～4.26.	72m <sup>2</sup>	竪穴建物跡 1	古墳時代後期
13次	川越市豊田町3-21-14	H 25.8.1. ～8.22.	54m <sup>2</sup>	山王塚古墳周溝	古墳時代終末期

I -1-2 表 山王脇遺跡調査履歴一覧

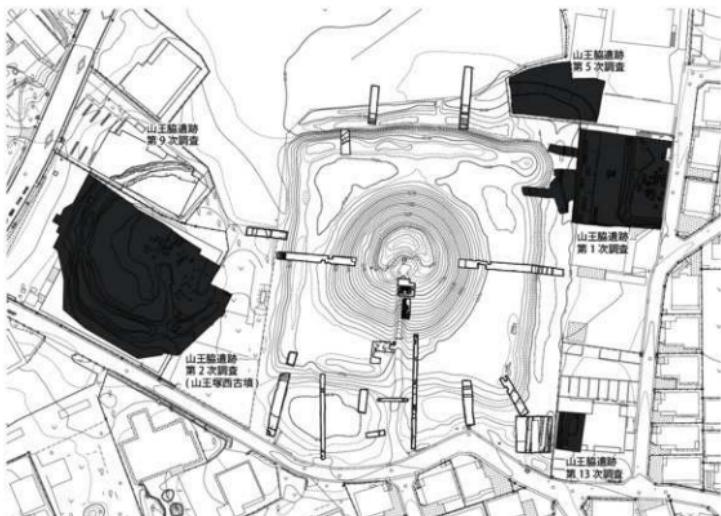
などが山王塚古墳の東側から検出された竪穴建物跡の調査である。これらの竪穴建物跡数は計35軒（第4、6～8、11次）であり、出土遺物から古墳時代終末期から奈良時代初めの時期と考えられる。

第4、6～8次調査において古墳時代終末期から奈良時代初めの竪穴建物跡が計15軒調査されている。重複がほとんどなく、時期差についても明確でない。第11次調査では、竪穴建物跡19軒、溝跡4条、土坑4基が検出され、調査の結果、建物跡は7世紀末葉から8世紀前葉の時期に限られることが判明した。竪穴建物跡19軒はいずれも重複がなく、一部を除き北側にカマドを有するものであった。馬具、湖西産須恵器壺、「大里」墨書き土器など特徴的な遺物が出土している。

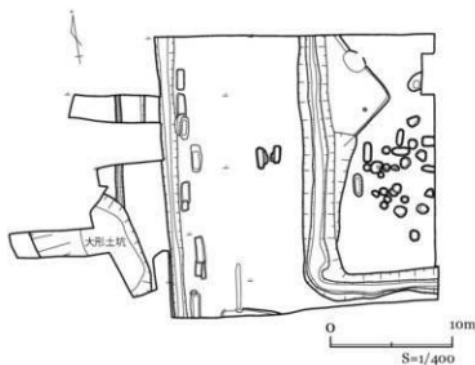
以上のことから、当遺跡の調査の内、山王塚古墳の東側で検出された集落跡は、建物跡の重複がほとんど認められること、時期差があまりないことから、限られた時期・期間に営まれた集落と考えられる。山王塚古墳との関連については不明であるが、出土遺物の年代観から古墳築造直後に営まれた集落跡である。

#### ・山王塚古墳隣接地調査

ここで山王脇遺跡の調査成果については特に、第1、2、5、13次調査に注目したい。これらはいずれも山王塚古墳の周溝を検出しているからである。第1、2次調査については、調査時点では幅広で浅い山王塚古墳の周溝を明確に認識していないが、調査図面を精査すると、周溝と判断される掘り込みを読み取ることが出来る。以下に実測図とともに成果を概観し、続く第II章へ向けて成果をまとめたい。



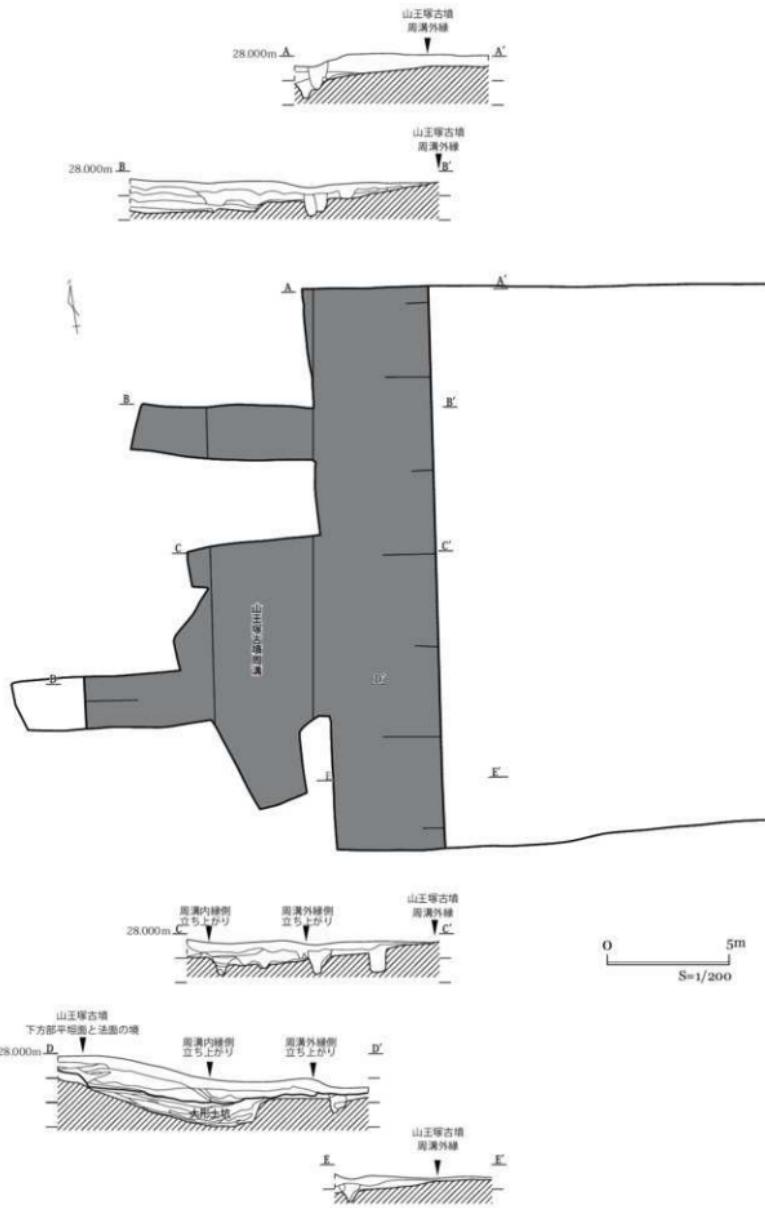
I-2-3図 山王脇遺跡調査区 (S=1/1,200)



I-2-4図 山王脇遺跡第1次調査 平面図

#### 山王脇遺跡第1次調査

調査区は山王塚古墳の東側に接する。隣地の調査と合わせて、調査区の一部を西側へ拡張し山王塚古墳の周溝の確認調査も実施している。報告文によると、調査区拡張の結果、周溝は幅9m程度で、内縁側は傾斜約20°で緩やかに立ち上がる一方、外縁側は70°の急傾斜をもって立ち上がり、地表面から2.3mの深さで周溝の底部を検出した（土層断面D-D'）。



I-2-5図 山王塚遺跡第1次調査 土層断面図と山王塚古墳周溝復元図



土層断面A

△ 29.00m

山王塚西古墳  
周溝（西侧）

A'

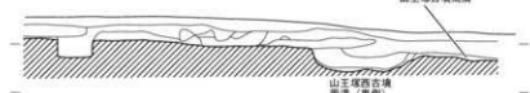


土層断面B

△ 29.00m

山王塚吉墳周溝

B'



土層断面C

△ 29.00m

山王塚西古墳  
周溝（南側）

0

S=1/100

I-2-7図 山王塚西古墳 平面・土層断面図

ただし、土層断面図からは、急斜度に立ち上がった後、再び傾斜は緩やかになり、墳丘側同様にそのまま立ち上るように読み取れる。これは山王塚古墳の昭和 59 年調査 3 号トレンチ (S59-T3) や第 1 次調査の 1 号トレンチで検出した周溝の特徴と同様といえる。すなわち、周溝の底面直下に大形土坑が存在しており、それを埋め戻したのちに深度 1m 程度の周溝底面を形成したと考えられる。したがって山王脇遺跡第 1 次調査からは、山王塚古墳の東側の周溝外縁の範囲と大形土坑の情報を得ることができた。

#### 山王脇遺跡第 2 次調査

山王塚古墳の西側に隣接する山王塚西古墳の調査である。墳丘は開墾のために大正期に削られている。山王塚古墳と近接するため、両古墳の周溝の切り合い関係がかねてより議論になってきたが、報告文（小泉 1997）では山王塚西古墳の東側の周溝が狭いことが指摘されている。報告書の土層断面図を確認すると、墳丘部分の地山のローム層上面は東側でやや傾斜するものの、比較的平坦であることが解る。調査時の現況地表面もおおむね同様である。しかしながら、山王塚西古墳の東側周溝の外側（山王塚古墳側）の現況地表面は明らかに崖んでおり、およそ 35cm も低くなる（土層断面 B）。山王塚古墳南側の現況の窪地状の地形は山王塚古墳の周溝に由来していることが発掘調査の結果で明らかになっていることから、この傾斜も山王塚古墳の周溝に由来するものと考えられる。したがって、山王塚古墳の西側の周溝と、山王塚西古墳の東側の周溝が平面的に重複していたものと解釈される。

#### 山王脇遺跡第 5 次調査

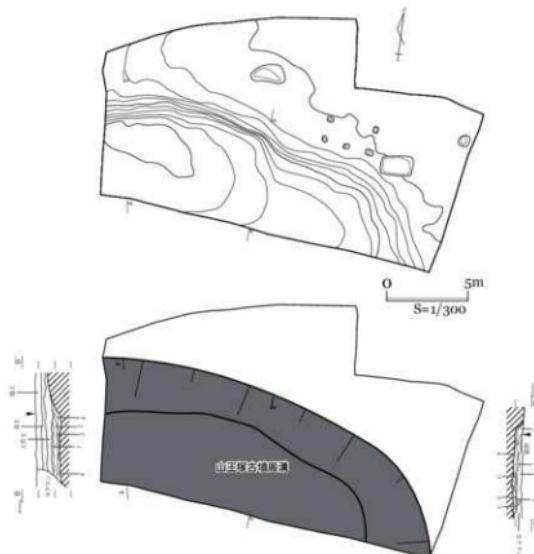
調査区は山王塚古墳の北東角に隣接しており、北東側角の周溝の外側の立ち上がりを検出した。周溝の深さは地表面から 0.7m で、外縁側に向かって緩やかに立ち上がる。これにより、山王塚古墳の北東隅の範囲が判明した。

#### 山王脇遺跡第 13 次調査

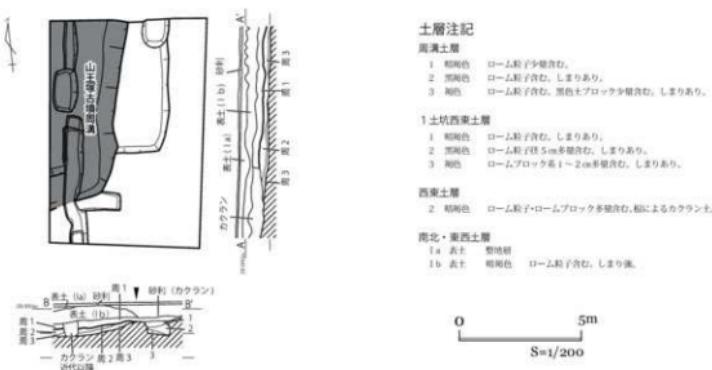
調査区は、山王塚古墳の南東角に隣接しており、南東側角の周溝の外側の立ち上がりを検出した。

#### 主要引用参考文献

- 貝塚爽平、小池一之、遠藤邦彦、山崎春雄、鈴木毅彦編 2000『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会  
川越市教育委員会 2013『市内遺跡Ⅱ』川越市遺跡調査会調査報告書 44 川越市教育委員会・川越市遺跡調査会  
小泉功 1997『山王塚脇遺跡』川越市埋蔵文化財発掘調査報告 20 川越市教育委員会  
堀口萬吉 1980『埼玉県の地形と地質』『埼玉県市町村誌総説編』埼玉県地域総合研究会



I-2-8 図 山王脇遺跡第5次調査平面図



I-2-9 図 山王脇遺跡第13次調査 平面図・断面図

## 第Ⅱ章 山王塚古墳の調査

### 第1節 調査の経緯

山王塚古墳は江戸時代には山王社が設置されており、古くから信仰の場として、また近年は周辺が宅地化する中で残された雑木林としても地元で親しまれてきた。上円下方墳という珍しい墳形と、墳丘の良好な遺存状況から、昭和33年3月6日に川越市の指定文化財（史跡）に指定されている。

以下に時系列に沿って、山王塚古墳の調査の経緯を概述する。

#### ①昭和59年

最初の考古学的な調査は昭和59年である。史跡範囲の考察を目的としてトレンチ調査を実施した。昭和59年3月26日から4月6日にかけて、墳丘の北側に2本、西側と南側に1本ずつの都合4本のトレンチを設定し、いずれも山王塚古墳の周溝を検出した。本報告では昭和59年調査1～4号トレンチをS59-T1～T4と呼称する。また、この調査に合わせて墳丘の地形測量も実施し、上円下方の墳形を改めて確認した。

#### ②平成3年～

昭和59年調査以降、四半世紀以上に渡り山王塚古墳そのものの発掘調査は行っていない。しかしながらこの間、第1章で述べたとおり隣接する山王脇遺跡の調査を複数回行っており、山王塚古墳の情報が蓄積された。

前章で詳しく触れたが、山王脇遺跡第1次調査（平成3年7月8日～8月28日）、山王脇遺跡第2次調査（平成4年3月25日～6月10日）では調査時にははっきりと認識出来ていなかったもの、山王塚古墳の周溝を検出している。また、山王脇遺跡第5次調査（平成9年7月3日～9月27日）では山王塚古墳の北東隅の周溝の外周縁を確認している。

#### ③平成24年度

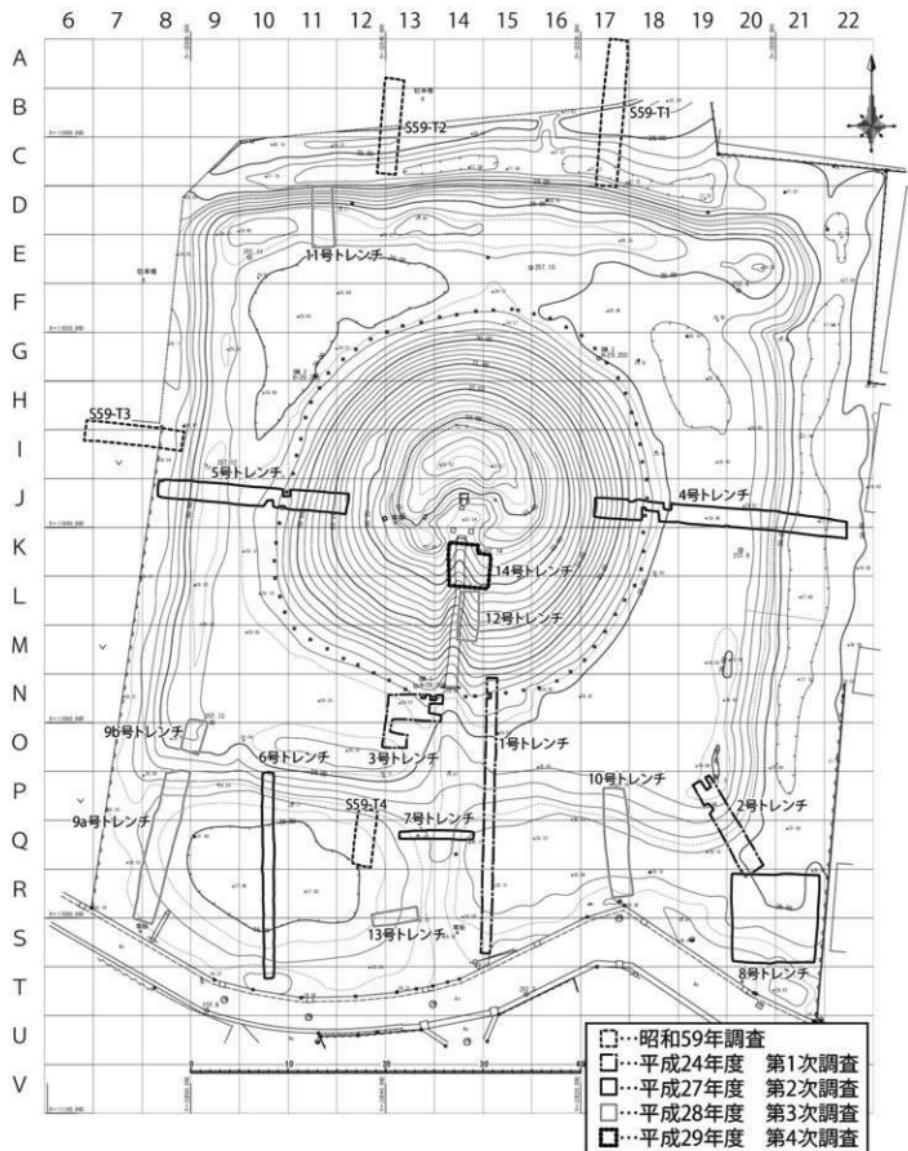
平成24年以降、史跡の価値を明らかにすることを目的として市指定史跡範囲内の発掘調査を開始した。調査主体は川越市教育委員会である。

平成25年2月12日から平成25年3月15日にかけて、墳形を考古学的に証明するために、第1次調査を行った。トレンチは3箇所に設定した。N～S-15 グリッドの1号トレンチ、P・Q-19・20、R-20 グリッドの2号トレンチ、N-13・14、O-12・13 グリッドの3号トレンチである。

この成果により、山王塚古墳が上円下方墳として築造されたことを確認した。また、周溝が浅く幅広い形状であることを把握した。

#### ④平成25年度

平成25年12月4日から平成26年1月31日にかけて、市指定史跡範囲内で地形測量を実施し、



II -1-1 図 トレンチ配置図

墳丘の詳細な地形図を作成した。地形図からは、下方部の縁辺が土手状に高まること（土手状盛土）を読み取ることができた。

また同年8月1日から22日にかけて、山王塚古墳南東隅の隣地にあたる山王脇古墳第13次調査を行い、山王塚古墳の南東角の周溝外周縁を検出した。

#### ⑤平成26年度

川越市山王塚古墳調査検討委員会条例（平成二十六年六月二十五日条例第五十六号）に基づき川越市山王塚古墳調査検討委員会を設置し、平成26年11月1日付けで委員委嘱を行った。

同年11月28日、埋葬施設の所在や規模の把握を目的に、地中レーダー探査を行った。その結果、現在の山王社とその参道の下に南北軸で15m程度の強い反応を確認した。この成果から、山王塚古墳の主体部は複室構造の横穴式石室であると推定した。

平成27年3月26日、川越市山王塚古墳調査検討委員会第1回会議を開催し、これまでの調査成果の報告と合わせ、次年度以降の調査方針について検討した。

#### ⑥平成27年度

平成27年11月25日に川越市山王塚古墳調査検討委員会第2回会議を実施し、第2次調査の方針について検討した。

それを受け、平成28年2月1日から3月31日にかけて、墳丘の構築過程の把握、土橋の場所、周溝規模の確認を目的として、第2次調査を行った。5箇所のトレンチを発掘した。J-17～22グリッド、K-20～22の4号トレンチ、J-8～12グリッドの5号トレンチ、P～T-10グリッドの6号トレンチ、Q-13・14グリッドの7号トレンチ、R・S-20・21の8号トレンチである。その結果、墳丘盛土や土手状盛土の構築過程に関する所見を得た。

#### ⑦平成28年度

平成28年7月11日から10月5日にかけて、周溝範囲と土橋、土手状盛土の補足確認と、主体部の遺存状態の確認のため、第3次調査を行った。5箇所にトレンチを設けた。N～S-7～9グリッドの9号トレンチ、P～R-17グリッドの10号トレンチ、D・E-11グリッドの11号トレンチ、L・M-14グリッドの12号トレンチ、R・S-12・13グリッドの13号トレンチである。

その結果、前部と目される場所で、礫床の広がりを確認した。

調査期間中の8月25日には、川越市山王塚古墳調査検討委員会第3回会議を実施し、現地で調査指導を受けた。

平成29年3月30日には川越市山王塚古墳調査検討委員会第4回会議を実施し、第3次調査の成果報告を行うと共に、次年度の調査と総括報告書へ向けての指導を受けた。

#### ⑧平成29年度

平成29年9月4日から平成30年2月1日にかけて、石室の構造等の把握を目的に第4次調査を行った。K・L-14・15グリッドに14号トレンチを設けた。その結果、羨道の側壁、礫床、前門を確

認した。また、掘削土についてはフリイ掛けを行い微細遺物の検出に努めた。

調査期間中の 10 月 12 日、13 日には川越市山王塚古墳調査検討委員会第 5 回会議を実施し、現地で調査指導を受けた。また、総括報告書へ向けた県内関連遺跡の巡見を行った。

### ⑨平成 30 年度

平成 30 年 6 月 4 日と 7 月 19 日に補足の地中レーダー探査を実施した。

また同年 10 月 16 日には川越市山王塚古墳調査検討委員会第 6 回会議を実施し、第 4 次調査の成果報告と総括報告書へ向けた検討を行った。

	調査主体者	調査期間	通知番号	調査面積	調査場所
昭和 59 年調査	川越市教育委員会	昭和 59 年 3 月 26 日 ～ 4 月 6 日	59 保委第 2-935 号	200m <sup>2</sup>	S59-T1 ～ T4
第 1 次調査	川越市教育委員会	平成 25 年 2 月 12 日 ～ 3 月 15 日	川教文発第 936 号 平成 25 年 1 月 8 日	70m <sup>2</sup>	1 ～ 3 トレンチ
第 2 次調査	川越市教育委員会	平成 28 年 2 月 1 日 ～ 3 月 31 日	川教文発第 1072 号 平成 28 年 1 月 14 日	230m <sup>2</sup>	4 ～ 8 トレンチ
第 3 次調査	川越市教育委員会	平成 28 年 7 月 11 日 ～ 10 月 5 日	川教文発第 337 号 平成 28 年 6 月 23 日	90m <sup>2</sup>	9 ～ 13 トレンチ
第 4 次調査	川越市教育委員会	平成 29 年 9 月 4 日 ～ 平成 30 年 2 月 1 日	川教文発第 418 号 平成 29 年 8 月 1 日	20m <sup>2</sup>	14 トレンチ

II -I-1 表 山王塚古墳発掘調査履歴

## 第 2 節 検出遺構

### (1) 昭和 59 年調査

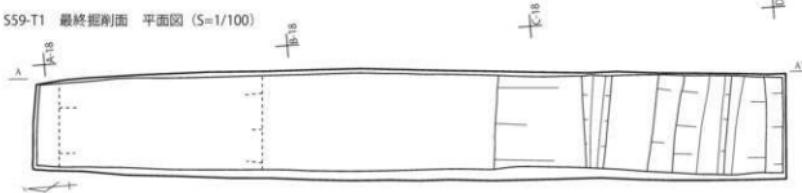
平成 24 年の第 1 次調査で周溝の内外両立ち上がりを確認する以前は、山王塚古墳の周溝は法面が急斜で幅狭である、という認識であった。そのため、現在の視点から見れば、昭和 59 年の調査成果は周溝の範囲内の一部のみを捉えたものと考えられる。したがって、昭和 59 年調査の報告文（小泉 1984）における周溝の幅や形状に関する記述は変更を余儀なくされる。しかしながら土層断面図からは、周溝底面直下に大形土坑が存在する可能性が読み取れるなど、重要な情報を含む。よって以下に、報告文の記述を補足しながら成果を示す。

#### S59-T1（昭和 59 年調査 1 号トレンチ）

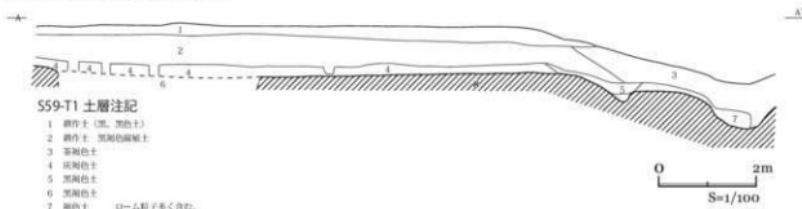
墳丘北側の周溝の中央やや東寄り（A ～ C-17 グリッド）に南北軸で設定した。トレンチ規模は長さ 15 m、幅 2 m、掘削深度は地表面から最大で 2 m である。

トレンチ南側で 2 条の急斜な法面を持つ溝跡を検出した。南側の溝跡は、S59-T2 南側で検出した溝跡と同一のものである。また現況地形図から読み取れる東西に延びる窪地状の地形はこの溝跡の影響によるものと考えられる。なお、S59-T2 で検出の溝は根切り溝と判定されているため、S59-T1 検出の溝跡も同じく後世の擾乱と判断される。したがって山王塚古墳北側の下方部裾部及び周溝の現況

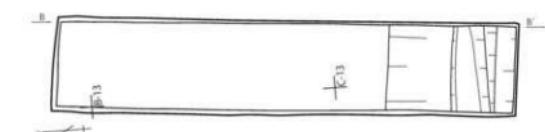
S59-T1 最終掘削面 平面図 (S=1/100)



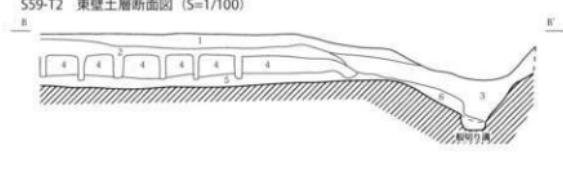
S59-T1 東壁土層断面図 (S=1/100)



S59-T2 最終掘削面 平面図 (S=1/100)



S59-T2 東壁土層断面図 (S=1/100)



S59-T2 土層注記

- 1 稲作土 (黒色)
- 2 稲作土 (黒褐色腐植土)
- 3 茶褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 海色土 □—△粒子多く含む。
- 7 □—△

0 2m  
S=1/100

II-2-1図 S 59-T 1・2 (昭和 59 年調査 1号・2号トレンチ) 平面図・土層断面図

は後世の耕作等による改変の影響を受けていると考えられる。なお、トレンチ北側では地山のローム層が掘り込まれており、土層断面で確認できる上幅は約3.3mとなる。深度等その他の規模は不明であるが、大形土坑の可能性が考えられる。

周溝外縁側の立ち上がりは確認できない。

#### S59-T2（昭和59年調査2号トレンチ）

墳丘北側の周溝の中央やや西寄り（B・C-12・13 グリッド）に南北軸で設定した。トレンチ規模は長さ10m、幅2m、掘削深度は地表面から最大で1.7mである。

トレンチの南側で、S59-T1と同様、V字状の溝跡により下方部裾部は破壊されており、トレンチ北側にかけては、緩やかに落ち込む周溝の底部と推察される。周溝外縁側の立ち上がりは確認できない。

#### S59-T3（昭和59年調査3号トレンチ）

墳丘西側の周溝中央（H-I-7・8 グリッド）に東西軸で設定した。トレンチ規模は長さ10.5m、幅2m、掘削深度は地表面から最大で2.5mである。

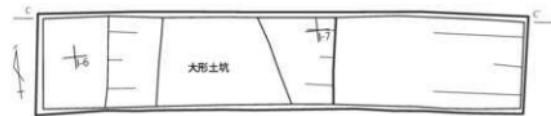
周溝の掘り形は、法面の内外両側が地表面から深度1m程度までは緩やかに落ち込むが、外縁側は深度1mを超えたあたりから角度を急斜度に変じ、深度2m超まで落ち込む。これは後述する山王塚古墳1次調査の1号トレンチと同様の特徴を示している。周溝の下に大形土坑が存在し、それを埋め戻して周溝底面が成形された可能性が考えられる。成形された底面はトレンチの両端で緩やかに立ち上がることから、周溝底面の幅が4.5mであることが推定できる。

#### S59-T4（昭和59年調査4号トレンチ）

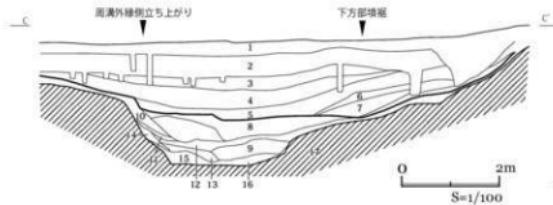
墳丘南側の周溝中央やや西側（P・Q-12 グリッド）に南北軸で設定した。トレンチは長さ10m、幅2m、深度は地表面から最大で1.45mである。緩やかな周溝底面であるが、トレンチ北側は急斜度で落ち込む、幅2.5～2.9mの溝状の掘り込みが読み取れる。

いずれのトレンチも山王塚古墳の周溝幅全体を捉えているとは言い難いが、S59-T3では土層断面から、大形土坑の存在と周溝の底面の幅が推測できる点が大きな成果といえる。また、完掘していないが、S59-T1の北側の掘り込みも大形土坑の存在が想起される。

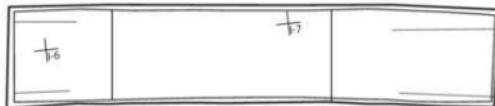
S59-T3 最終掘削面 平面図 (S=1/100)



S59-T3 北壁土層断面図 (S=1/100)



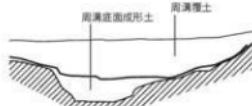
S59-T3 周溝底面復元 平面図 (S=1/100)



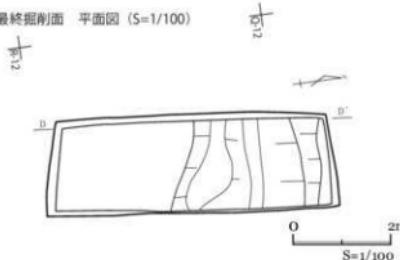
S59-T3 土層注記

- 1 黒色土
- 2 ローム土 (耕作土)
- 3 黒褐色土、4～6の混合層
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土、ロームブロックを含む、表面には土塊となる。
- 6 黒褐色土、ロームブロックを含む、7 こぶし大のロームブロック層
- 8 黒褐色土、ローム土を含む
- 9 黑色土、4cmより大きい、褐色性が強い。
- 10 やわらかくローム粒子の流れ
- 11 ロームブロック
- 12 黒褐色土を含むロームブロック
- 13 明褐色ロームブロック (粘性が強い。)
- 14 ロームブロックを含まないローム層
- 15 5～10cm位のロームブロックを含むロームの流れ
- 16 黑褐色土、ロームを含む。
- 17 砂。

セクション図 土層区分 (S=1/200)



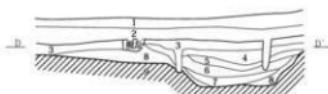
S59-T4 最終掘削面 平面図 (S=1/100)



S59-T4 土層注記

- 1 白色土 黑色土
- 2 褐色土 黑褐色腐解土
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黑褐色土 有機質 (コーンシナ黒色土)
- 6 黑褐色土 ローム粒子を含む。
- 7 黑褐色土 ロームブロック (5～6cm) を含む。
- 8 黑色土 ローム質、5層よりローム質が多い。
- 9 ローム。

S59-T4 西壁土層断面図 (S=1/100)



II -2-2 図 S 59-T 3・4 (昭和 59 年調査 3 号・4 号トレンチ) 平面図・土層断面図

## (2) 第1次調査

### 1号トレンチ

山王塚古墳の現況形状が後世の改変によるものではなく、上円下方墳として構築されたことの証明を目的に、上円部の裾から下方部、周溝にかけて土層断面を確認するための南北軸のトレンチを設定した。トレンチ規模は長さ 28.0 m、幅約 1.1 m、掘削深度は上円部で約 1.3 ~ 1.6 m、下方部で約 0.5 ~ 0.9 m、周溝部で約 1.7 ~ 2.1 m である。周溝底面は標高 26.7 m である。

調査の結果、一連の旧表土の直上に上円部の墳丘盛土を行った後、下方部の墳丘盛土を行っていることが解った。これにより、山王塚古墳が上円下方墳として築造されたことが明らかになった。また周溝は、大形土坑を掘削したのちに一度埋め戻して底部を成形しており、下方部から周溝底面にかけての法面は盛土によって成形されていることが解った。

トレンチ北側では上円部の裾を断ち割る。上円部墳丘盛土は、まず、固くしまった旧地表面の上にハードロームを主体とした暗黄褐色土を積み上げる。いわば上円部墳丘の「芯材」としてハードロームが意識的に使用されたと考えられる。その「芯材」を、黒みの強い旧地表面由来と想定される暗黒褐色土で被覆し、さらに暗褐色土を積み上げている。いずれの土層中にも小礫を包含しており、石室使用石材に由来すると思われる緑泥片岩の小片も含む。

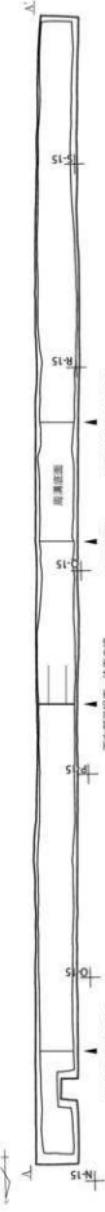
トレンチ中央部では下方部を断ち割る。下方部の墳丘盛土は上円部の盛土の後に、上円部墳裾に被せるように行われており、比較的水平である。下方部の墳丘盛土は上円部の薄く水平に突き固めた版築状の盛土と比較すると一層ごとが概して厚い。全体的に固くしまり、ローム粒子やローム小ブロックに加え、緑泥片岩の小片が混入する。旧表土の黒色土は全体が固くしまっており、古墳築造に先立ち叩き締めや整地作業が行われたと考えられる。2・4 ~ 6・9・11号トレンチで検出した下方部外縁を廻る上手状盛土は、ここでは不明瞭である。

トレンチ中央部から南側にかけては周溝を断ち割る。トレンチ南側では、旧表土からローム層上面はほぼ平坦に削平されており、したがって周溝外周縁は明確ではない。周溝の内外の立ち上がりはいずれも緩傾斜で、断面は皿状を呈する。下方部上面と周溝底面の比高差は約 1.4 m、幅は不明確であるが、下方部の傾斜起点から確認できるまでを計測すると約 9 m となる。

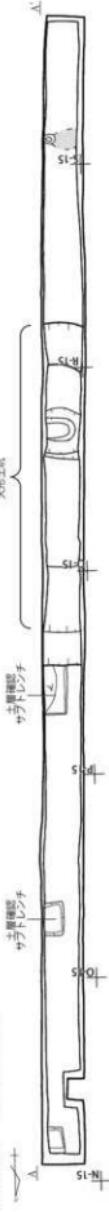
なお、周溝底面の下に南北幅約 8.3 m、現況地表面からの深さが約 1.9 m の大形土坑を検出した。トレンチ調査のため平面形態は不明であるが、断面形状は北側の傾斜が緩く、南側が急角度に立ち上がり、底部は凹凸がある。周溝の成形に先立ちロームブロックを主体とする土で埋め戻されているが、版築状の水平の土層断面ではない。底部から約 0.6 m 程度の高さで覆土に強い硬化が認められる。硬化面が形成される程度の作業、期間を挟んで埋め戻された可能性がある。大形土坑底部で上部口径 1.3 m、深さ 0.45 m の掘り込みを 1 基検出した。大形土坑と同種の覆土であるため、同時に埋め戻されたと考えられる。

1号トレンチからは、須恵器長頸壺と思われる胴下部片 1 点がトレンチ覆土中から出土した。また下方部の表土上で古瀬戸灰釉皿の底部片 1 点を採取した。また、上円部・下方部・周溝を問わず緑泥片岩の小片が多数出土することから、構築中の墳丘で搬入された緑泥片岩製の石材加工が行われたものと考えられる。

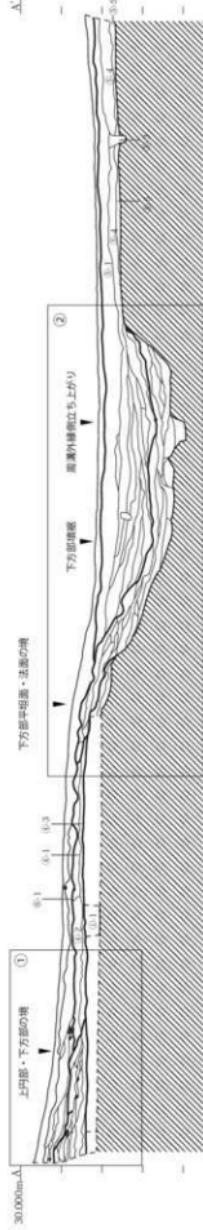
堆丘表面～周溝底面復元図 ( $S=1/120$ )



最終掘削面 平面図 ( $S=1/120$ )

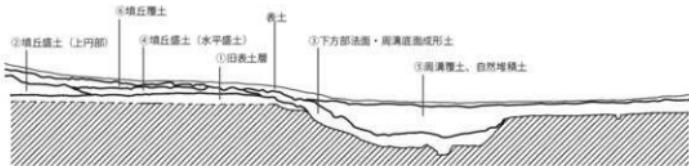


東壁土層断面 ( $S=1/120$ )



II-2-3図 1号トレンチ 平面図・土層断面図

## 土層群模式図 (S=1/200)



### 1号トレンチ土層記述

#### ① 旧表面

- ① 1 黒黙褐色土 細くしまる。  
② 2 相間褐土色 ローム粒子をやや多く含む。

#### ② 塗付土 (上円部)

- ③ 1 褐褐色土 ローム粒子を多く含む。2~3cmのロームブロック(小)を少額含む。

径 5cm の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

- ④ 2 褐褐色土 ローム粒子を少し複数含む。径 3cm のロームブロック(小)を少額含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑤ 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりあり。

- ⑥ 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑦ 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑧ 3 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑨ 4 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりあり。

- ⑩ 5 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。2cm 大の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑪ 6 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑫ 7 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑬ 8 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm の縫隙片割石(小)を少額含む。

- 2cm 大の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑭ 9 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりあり。

- ⑮ 10 黒黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 5cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑯ 11 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 1cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりややあり。

- ⑰ 12 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑱ 13 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑲ 14 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 4~5cm のロームブロック(小)を多く含む。

- 径 2~3cm の縫隙(縫)(小)、2cm 大の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

#### ③ 1 下方部法面・周溝底面成形土

- ① 1 黒黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ② 2 黒黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 1cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりややあり。

- ③ 3 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ④ 4 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑤ 5 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 4~5cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑥ 6 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 5cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

#### ④ 塗付土 (水平部)

- ① 21 黒黙褐土色 ローム粒子やや多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ② 22 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 1cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ③ 23 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 1cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ④ 24 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりあり。

- ⑤ 25 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 1cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりあり。

- ⑥ 26 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑦ 27 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりあり。

- ⑧ 28 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 3~5cm のロームブロック(小)を多く含む。

- ⑨ 29 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりややあり。

- ⑩ 30 黑黙褐土色 ローム粒子。径 3~5cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりあり。

#### ⑤ 周溝覆土・自然堆積土

- ① 1 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ② 2 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ③ 3 黑黙褐土色 ローム粒子大の縫隙片割石(小)を少額含む。しまりあり。

- ④ 4 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 5cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑤ 5 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 3cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑥ 6 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 1cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑦ 7 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 1cm のロームブロック(小)を多く含む。しまりややあり。

- ⑧ 8 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。

- ⑨ 9 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 5cm のロームブロック(小)をやや多く含む。しまりややあり。

- ⑩ 10 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。径 1cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりややあり。

- ⑪ 11 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 3cm のロームブロック(小)を少額含む。しまりややあり。

- ⑫ 12 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 1cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑬ 13 黑黙褐土色 ローム粒子を多く含む。径 2~3cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑭ 14 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。しまりややあり。

- ⑮ 15 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 1cm のロームブロック(小)を少額含む。

- ⑯ 16 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。しまりややあり。

#### ⑥ 底面土

- ① 1 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。しまりなし。

- ② 2 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 2~3cm の縫隙(縫)(小)をやや多く含む。

- ③ 3 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 2~3cm の縫隙(縫)(小)を少額含む。

- ④ 4 黑黙褐土色 径 10~15cm の縫隙(縫)(小)を少額含む。しまりややあり。

- ⑤ 5 黑黙褐土色 径 0.5~2cm の縫隙(縫)(小)をやや多く含む。2cm 大の縫隙片割石(小)を少額含む。

- ⑥ 6 黑黙褐土色 ローム粒子をやや多く含む。しまりややあり。

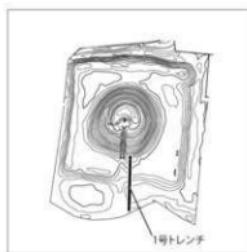
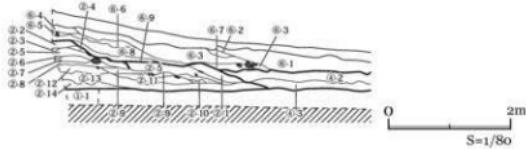
- ⑦ 7 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 2~3cm の縫隙(縫)(小)をやや多く含む。

- ⑧ 8 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 0.5~2cm の縫隙(縫)(小)をやや多く含む。

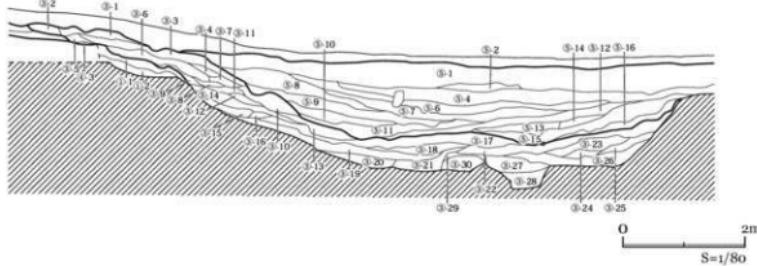
- ⑨ 9 黑黙褐土色 ローム粒子を少額含む。径 5cm の縫隙(縫)(小)を少額含む。

II-24 図 1号トレンチ 土層説明図

① 塙丘裾部セクション拡大図 ( $S=1/80$ )



② 周溝部分・大型土坑セクション拡大図 ( $S=1/80$ )



II -2-5 図 1号トレンチ 土層断面図(拡大)

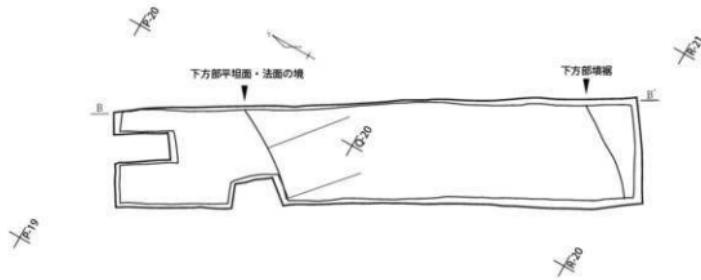
## 2号トレンチ

下方部南東角の塙丘盛土の土層断面と、周溝の形状を確認することを目的に、南北軸に対し約30°西側に傾けて設定した。トレンチの規模は長さ8.6m、幅2.0mで、掘削深度は周溝部で現況地表面から約1.2m、下方部で約1.2~1.4mである。

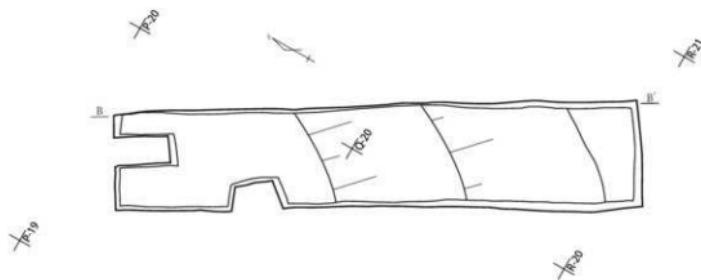
トレンチ北側は下方部の裾部を斬ち割る。旧地表面の暗黒褐色土の上に暗褐色土とロームを互層に積み上げた、土手状盛土を確認した。土手状盛土は旧地表面から0.3~0.4mの高さで、いずれの層も締まりが強い。地山のロームは、塙丘側では現況地表面から約1.1m、周溝側では約1.3mの深さで検出されている。下方部からの周溝底面にかけての傾斜は緩く、土手状盛土の頂点と周溝底部の比高差は約2.1mである。またトレンチ北端で、旧地表面の暗黒褐色土及び地山のローム面が北西方向に落ち込む状況を確認した。埋没谷のような自然地形の一部の可能性を排除できないが、周囲は台地上の平坦地であることを考慮すると、下方部の下にも1号トレンチで確認したような大型土坑が存在し、この土坑を埋め戻す際に周囲の旧表土が流れ込んだものとも考えられる。

2号トレンチからは、表土中より銅製煙管の雁首が1点出土している。

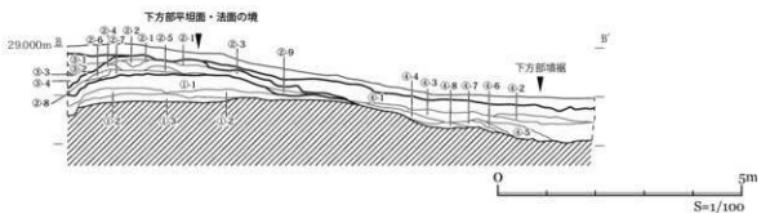
墳丘表面～周溝底面復元図 (S=1/100)



最終掘削面 平面図 (S=1/100)



東壁土層断面 (S=1/100)



II-2-6 図 2号トレンチ 平面図・土層断面図

## 2号トレントチ層記

### ①旧表土層

- ① 塗膜地土层 しまりあ。
- ② 塗膜地土层 ローム粒子をやや多く含む。しまりあ。
- ③ 海底土层 ローム粒子をやや多く含む。しまりあ。

### ②填土層（土手状盛土）

- ① 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む。径1～2cmのロームブロック（小）を少額含む。しまりあ。
- ② 暗褐色土 ローム粒子を含む。径1～2cmのロームブロック（小）を多く含む。しまりあ。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。径5cmのロームブロック（中）をやや多く含む。しまりあ。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。径1cmのロームブロック（小）を少額含む。しまりあ。
- ⑤ 暗褐色土 ローム粒子を含む。径1～2cmのロームブロック（小）を多く含む。しまりあ。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒子を含む。径1cmのロームブロック（小）を少額含む。しまりあ。
- ⑦ 暗褐色土 ローム粒子を含む。径3～5cmのロームブロック（中）をやや多く含む。しまりあ。
- ⑧ 暗褐色土 ローム粒子を含む。径3～5cmのロームブロック（中）をやや多く含む。しまりあ。
- ⑨ 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む。しまりあ。

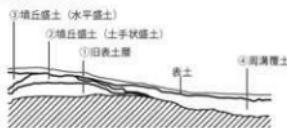
### ③填土層（水平盛土）

- ① 地色土 ローム粒子を含む。径1～2cmのロームブロック（小）をやや多く含む。しまりやあ。
- ② 暗褐色土 ローム粒子を含む。径5cmのロームブロック（中）を少額含む。しまりあ。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む。しまりやあ。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子を含む。径1～2cmのロームブロック（小）をやや多く含む。しまりあ。

### ④圓溝層土

- ① 地色土 ローム粒子を少額含む。しまりなし。
- ② 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。しまりやあ。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子、径0.5～1cmのロームブロック（小）を少額含む。しまりやあ。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む。径1～2cmのロームブロック（小）をやや多く含む。
- ⑤ 地色土 ローム粒子を少額含む。径1cmのロームブロック（小）をやや多く含む。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。径1cmのロームブロック（小）を少額含む。
- ⑦ 地色土 ローム粒子やや多く含む。径2～3cmのロームブロック（小）をやや多く含む。
- ⑧ 暗褐色土 ローム粒子少額含む。径1cmのロームブロック（小）を少額含む。

土層構造図 (S=1/200)



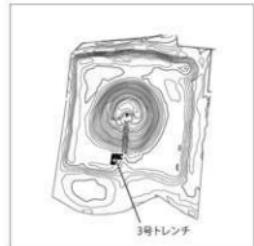
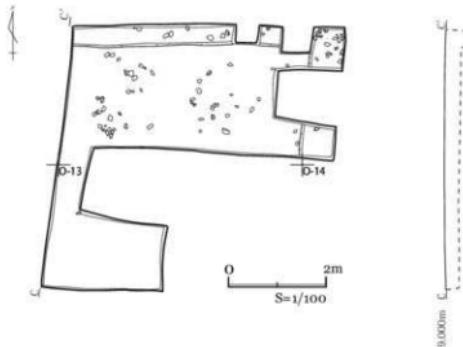
II-2-7 図 2号トレントチ 土層説明図

## 3号トレントチ

石室の前部が上円部南側の裾部へ伸びることを想定し、その状況を検出するために設定した。樹木や土地境界杭を避けながら、南北約5.4m、東西約5.6mの範囲を調査した。表土層から地山まで検出する予定だったが、調査期間の制約から表土を0.3m、北側に設けたサブトレントチを0.4～0.5m程度掘削した段階で調査を終えた。表土層の掘削ではトレントチのほぼ全面に大きさ3～15cm程度の円窪を多数、緑泥片岩の小片を数点検出した。

3号トレントチからは、表土層中より須恵器皿の小片1点、古代の平瓦1点、縄文時代中期の深鉢形土器の破片1点が出土した。

平面図・土層断面図 (S=1/100)



II-2-8 図 3号トレントチ 平面図・土層断面図

### (3) 第2次調査

#### 4号トレンチ

上円部東側の墳丘盛土と下方部外縁の土手状盛土、東側周溝の範囲、形状、土層断面の確認を目的に東西軸で設定した。トレンチ規模は長さ約26.0m、幅約2.0m、掘削深度は上円部で約2.8m、下方部で約1.0m、周溝部で約2.1mである。周溝底面の標高は26.6mである。トレンチ南壁面沿いに設定したサブトレンチでは、1号トレンチ同様に一連の地山ロームと、整地により硬化したと思われる旧地表面の上に墳丘盛土が構築されたことを確認した。

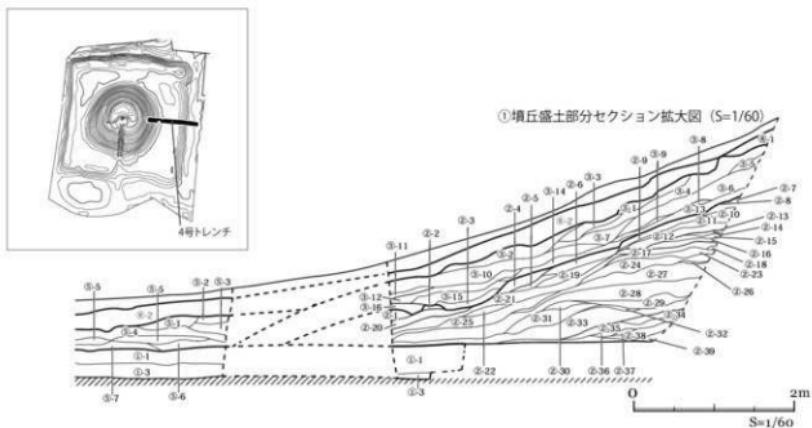
上円部は、旧地表面から約2.2mの高さまでの墳丘盛土の断面を確認した。版築状の墳丘盛土は、旧地表面の上に各層2.0cm～20.0cm程度の厚さでブロック交じりのローム土を水平に積み上げており、堅くする。版築状の土層の上には黒色土・暗褐色土・小礫が混入する土層が墳丘斜面を覆うように盛土され、その上に腐植土が被覆する。

下方部は、墳丘縁辺部の旧地表面直上にローム土で土手状盛土を構築し、その後、上円部裾部と土手状盛土の間を埋めるように下方部平坦面の水平盛土が行われている。土手状盛土は旧地表面からの高さが約0.35mだが、上部は削平されていると考えられる。そのため、現況では下方部水平盛土と土手状盛土の比高は最大で0.1m程度である。また、下方部の盛土中からは緑泥片岩の小片が出土しているが、1号トレンチに比較すると量は少ない。

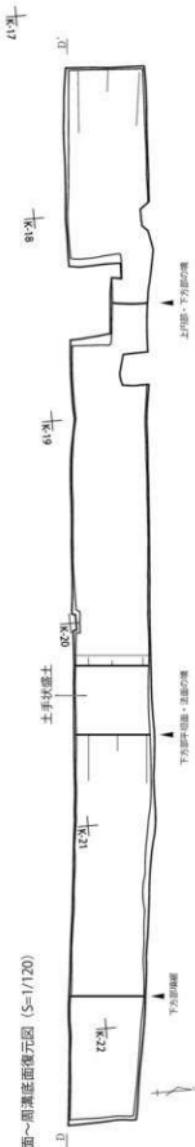
周溝は、墳丘側の底面の一部を検出し、ローム層を掘り込む緩傾斜の法面を確認した。周溝東側は近世の溝及び現代の耕作痕によって壊されているが、周溝の外周縁は敷地外まで及ぶと考えられる。

近世の溝及び現代の耕作痕の下には、大形土坑と想定される底面の不整形な掘り込みを検出した。関東ローム層を深く掘削しており、掘り込みを埋めた覆土は黒褐色土を主体とする。覆土の違いを除けば、1号トレンチ検出の大形土坑と断面形状や掘削深度も類似する。

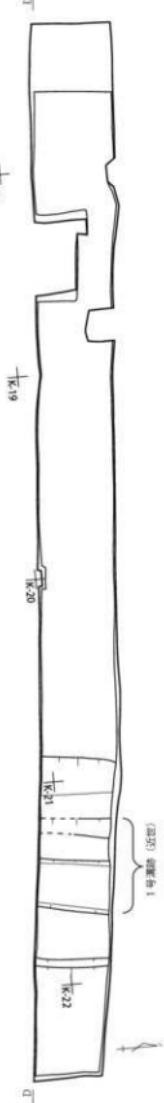
4号トレンチからは縄文時代中期の深鉢形土器の破片が3点出土している。



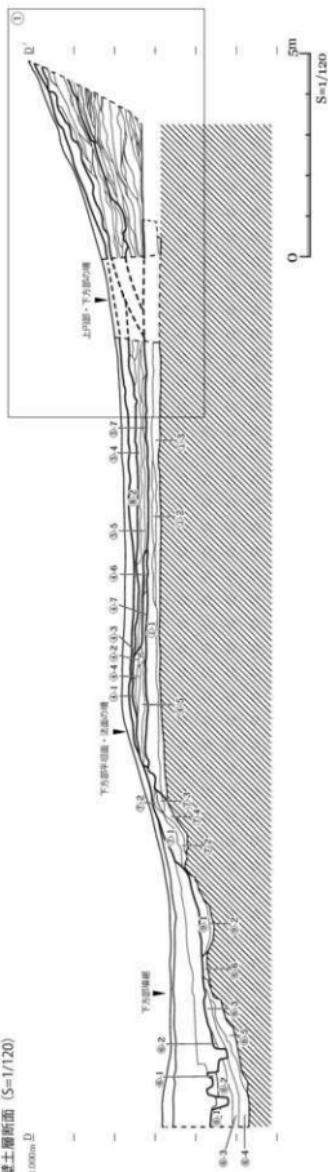
II-2-9 図 4号トレンチ 土層断面図(拡大)



トレンチ最終掘削面 平面図 (5=1/120)

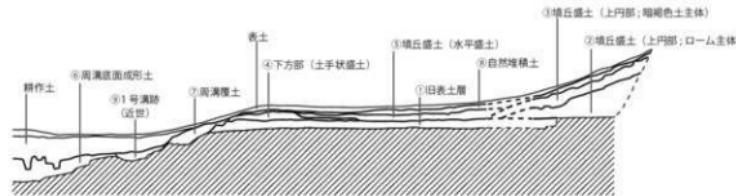


南壁土肩断面 (5=1/120)  
31000m D



II -2-10 図 4号トレンチ 平面図・土肩断面図

土層群模式図 (S=1/200)



4号トレンチ土層注記

#### ① 旧表土層

- ①-1 暗黒褐色土 ローム粒子を微細含む。しまり強。固土。  
 ①-2 明黒褐色土 ローム粒子を少含む。しまりややあり。  
 ①-3 褐色土 ローム粒子をやや多量含む。しまりややあり。

### ② 埋丘盛土（上円部：ローム主体）



③填丘盛土（上内部：暗褐色土主体

- ①-9 暗褐色毛 ロードマーブル、ロードマーブル（小）を少奨む。しまりがあり。  
② 暗褐色毛 ロードマーブル（少奨む程度）、ロードマーブル（小）や少奨む程度。しまりがあり。  
③ 暗褐色毛 ロードマーブル（少奨む）。しまりあり。  
④ 暗褐色毛 ロードマーブル、ロードマーブル（小）をや少奨む程度。しまりやりあり。  
⑤ 暗褐色毛 ロードマーブル（少奨む程度）。しまりあり。  
⑥ 暗褐色地毛 ロードマーブルを少奨む程度。ロードマーブル（小）をや少奨む程度。しまりあり。  
⑦ 暗褐色毛 ロードマーブル、ロードマーブル（小）をや少奨む程度。しまりやり。  
⑧ 暗褐色毛 ロードマーブル、ロードマーブル（小）をや少奨む程度。しまりあり。  
⑨ 喜山黒毛 ロードマーブルを少奨む。ロードマーブル（小）をや少奨む程度。しまりあり。  
⑩ 暗褐色毛 ロードマーブル（少奨む程度）。ロードマーブル（小）を少奨む程度。  
    （確） 小をや少奨む程度。しまりあり。  
⑪ 暗褐色毛 ロードマーブル（少奨む程度）。しまりあり。  
⑫ 暗褐色毛 ロードマーブルを少奨む。確、ロードマーブル（小）を少奨む。しまりあり。  
⑬ 暗褐色毛 ロードマーブルを少奨む。しまりあり。  
⑭ 暗褐色地毛 ロードマーブルをや少奨む程度。ロードマーブル（小）を少奨む程度。しまりあり。  
⑮ 暗褐色毛 ロードマーブル、ロードマーブル（小）を少奨む。  
    （確） 小をや少奨む程度。しまりあり。  
⑯ 相模原毛 ロードマーブルを少奨む。しまりあり。

#### ④下方面（土手林盛土）

- ① 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック（小）を少額含む。しまりあり。
  - ② 暗黒褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（中）を少額含む。しまりあり。
  - ③ 明暗褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（小）を少額含む。しまりあり。
  - ④ 黑褐色土 ローム粒子を多額含む。しまりあり。
  - ⑤ 斜面褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（中）をやや多額含む。しまりあり。
  - ⑥ 岩黒褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（小）を少額含む。しまりあり。
  - ⑦ 黑褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（中）を多額含む。しまりあり。

### ③填丘盛土（水平盛土）

- ④-1 咽喉触毛 ローム粒子を少額貪む。しまりあり。
  - ④-2 咽喉触毛 ローム粒子を多額貪む。ロームブロック（小）を微量貪む。しまりあり。
  - ④-3 咽喉触毛 ローム粒子を中や多額貪む。ロームブロック（小）を微量貪む。しまりあり。
  - ④-4 咽喉触毛 ローム粒子を微量貪む。ロームブロック（小）を微量貪む。しまりあり。
  - ⑤ 咽喉触毛 ローム粒子を少額貪む。しまりあり。
  - ⑥-1 咽喉触毛 ローム粒子を貪む。ロームブロック（小）を少額貪む。しまりあり。
  - ⑥-2 咽喉触毛 ローム粒子を多額貪む。しまりあり。しまりやあり。

◎ 關漢卿而元曲

- (b) 1 暗黒褐色 ローム粒子を少量含む。しまりややあり。  
 (b) 2 暗黄褐色 ローム粒子を少量含む。幾々を微量含む。  
 (b) 3 暗褐褐色 ローム粒子を少量含む。  
 (b) 4 暗黒褐色 ローム粒子をやや多く含む。  
 (b) 5 暗黄褐色 ローム粒子主体。ロームブロック（小）を多量含む。  
 (b) 6 褐色土 ローム粒子を多量含む。ロームブロック（小）をやや多量含む。

◎ 潤濕肥土

- ⑦-1 暗褐色子 ローム粒子を少量含む。  
 ⑦-2 暗褐色子 ローム粒子を微量含む。しまりややあり。  
 ⑦-3 暗褐色子 ローム粒子を少量含む。ロームブロック（小）を微量含む。  
 ⑦-4 明褐色子 ローム粒子をやや多量含む。ロームブロック（小）をやや多量含む。

### ④ 自然堆积土

- ⑧-1 明褐色土 ローム粒子を微量含む。  
⑧-2 明褐色土 ローム粒子を少額含む。ローム、ブロック（小）を微量含む。

#### ④-1 雷氏漏斗

- ### ⑧-2 畑状褐色土 ローム粒子をやや多量含む。ロームブロック（小）を少量

II-2-11 図 4号トレンチ 土層説明図

## 5号トレンチ

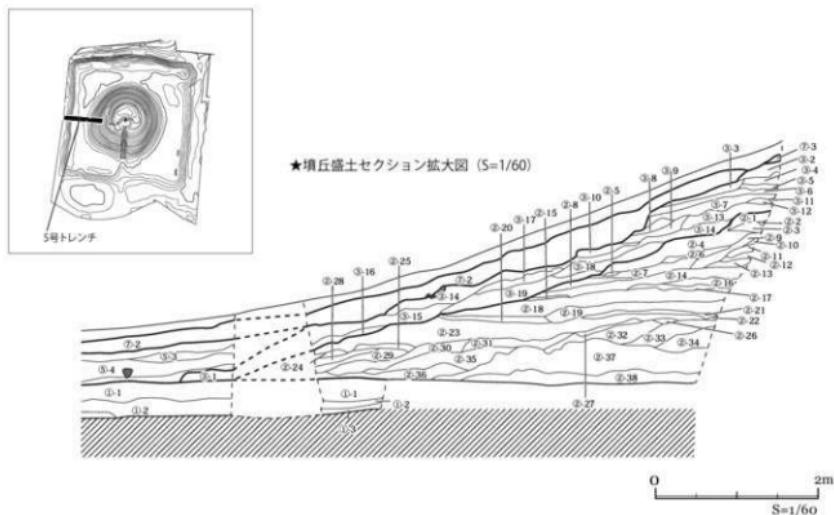
上円部西側の墳丘盛土と下方部外縁の土手状盛土、西側周溝の範囲、形状、土層断面の確認を目的に東西軸で設定した。トレンチ規模は東西約19.4m、南北約2.0m、掘削深度は上円部で約2.9m、下方部で約1.1m、周溝部で約1.2mである。1・4号トレンチ同様に一連の地山ロームと、整地により硬化したと思われる旧地表面の上に墳丘盛土が構築されたことを確認した。

上円部は、旧地表面から約2.7mの高さまでの墳丘盛土の断面を確認した。版築状の墳丘盛土は、旧地表面の上に各層4.0cm～40.0cm程度の厚さでブロック交じりのローム土を水平に積み上げており、堅くしまる。4号トレンチ同様、版築状の土層の上には黒色土・暗褐色土・小礫が混入する土層が墳丘斜面を覆うように盛土され、その上に腐植土が被覆する。墳丘盛土の中からは、旧地表面付近の高さで30cm超のチャート系の円礫が1点出土している。

下方部は、墳丘縁辺部の旧地表面上にローム土で土手状盛土を構築し、その後、上円部裾部と土手状盛土の間を埋めるように下方部平坦面の水平盛土が行われている。土手状盛土は旧地表面からの高さが約0.6mである。現況では下方部の墳丘盛土との土手状盛土の比高差は最大で0.2m程度であり、東側の4号トレンチよりも遺存状況は良い。また、4号トレンチ同様に下方部の盛土中からは縫泥片岩の小片が出土している。

周溝は、ローム層を掘り込む緩傾斜の法面の一部を確認した。トレンチ西側は近世の溝跡（1号溝跡）や時期不明の根切り溝と思われる擾乱が重複しており、詳細は不明であるが、東側と同じ規模の周溝幅と仮定すると周溝の底部は調査区外のさらに西側と考えられる。

5号トレンチからは縄文時代中期の深鉢形土器の破片が13点出土している。



II-2-12図 5号トレンチ 土層断面図（拡大）

堆丘表面～周溝底面復元図 (S=1/120)

$+P_{12}$

$+P_{11}$

$+P_{10}$

土手砂盛土



トレンチ最終掘削面 平面図 (S=1/120)

$+P_{12}$

$+P_{11}$

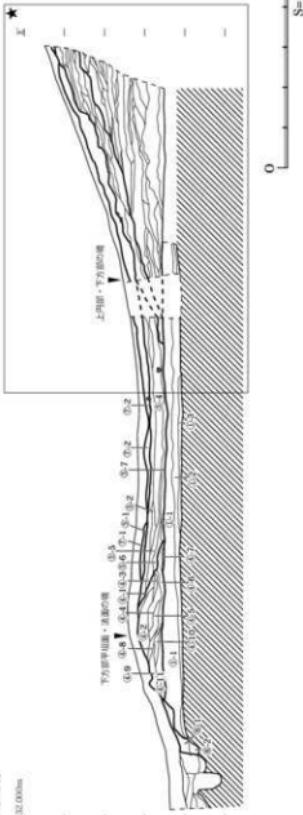
$+P_{10}$

土手砂盛土



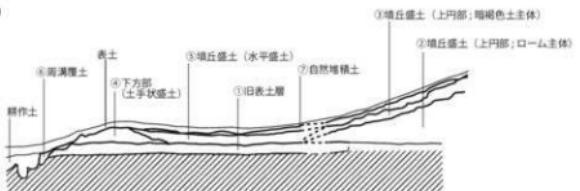
北壁土層断面 (S=1/120)

E\_30.0000m



II-2-13図 5号トレンチ 平面図・上層断面図

土層群模式図 (S=1/200)



## 5号トレンチ土層注記

◎旧唐书

- ①-1 明黒褐色土 ローム和子を少數含む。しまり強。(日土士)  
①-2 明黒褐色土 ローム和子をやや多量含む。しまりややあり。  
①-3 明黒褐色土 ローム和子をやや多量含む。

②埴丘盛土（上円錐；ローム主体）



### ◎蝶丘盛土（上田郎：鶴齋角土名体）

- ① 暗褐色土 ロードマット・ロードブロック（小）を多量散布。しまりあり。
  - ② 暗褐色土 ロードマット・ロードブロック（大）を多量散布。しまりあり。
  - ③ 暗褐色土 ロードマットを撒き含む。しまりあり。
  - ④ 暗褐色土 ロードマット・ロードブロック（小）を多量散布。砸（小）を多量散布。しまりあり。
  - ⑤ 暗褐色土 ロードマット・ロードブロック（大）を撒き含む。しまりあり。
  - ⑥ 暗褐色土 ロードマット・ロードブロック（小）を多量散布。しまりあり。
  - ⑦ 暗褐色土 ロードマットを撒き含む。しまりあり。
  - ⑧ 暗褐色土 ロードマットを撒き含む。しまりあり。

③-9 明暗色土 ローム粒子半や多量含む。ロームブロック(少)多量含む。しまりあり。

- ③-10 鮎掛毛土: ローム土子や多量含む。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑪ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（小）や多量含む。しまりあり。  
⑫ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑬ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑭ 鮎掛毛土: ローム土子や多量含む。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑮ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑯ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑰ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑱ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。  
⑲ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。

④下方部（土手状盛土）

  - ① 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（大）や少量含む。しまりあり。
  - ② 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（大）や少量含む。しまりあり。
  - ③ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）多量含む。しまりあり。
  - ④ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（大）や少量含む。しまりあり。
  - ⑤ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（大）や少量含む。しまりあり。
  - ⑥ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（大）や少量含む。しまりあり。
  - 黒苔土ブロック（小）少量含む。しまりあり。
  - ⑦ 地脚土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。
  - ⑧ 鮎掛毛土: ローム土子や多量含む。しまりあり。
  - ⑨ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。しまりあり。
  - ⑩ 鮎掛毛土: ローム土子体。ロームブロック（小）やや多量含む。しまりあり。
  - ⑪ 鮎掛毛土: ローム土子頗る。ロームブロック（小）や少量含む。しまりあり。

#### ④下方部（土手状盛土）

- ④ 1 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (大) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑤ 2 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (小) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑥ 3 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (小) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑦ 4 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (小) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑧ 5 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (中) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑨ 6 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (中) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑩ 7 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (中) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑪ 8 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (中) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑫ 9 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (中) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑬ 10 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (小) 夏や冬を想ひ、しまあり。  
⑭ 11 地圖 ローム×1倍子。ローム×プロック (小) 夏や冬を想ひ、しまあり。

**③ 塵土堆 (水平巣)**

  - ① 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ② 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ③ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ④ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑤ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑥ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑦ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑧ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑨ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑩ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑪ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑫ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑬ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。
  - ⑭ 明暗地圖 ローム×1倍子。ローム×1倍子。しまあり。

### ③增压螺土(水平螺土)

- ① 剛柔色土 ローブルク少種含む。しまりあり。  
 ② 剛柔色土 ローブルク少種含む。しまりあり。  
 ③ 剛柔色土 ローブルク少種含む。ロームブロック（小）少種含む。しまりあり。  
 ④ 剛柔色土 ローブルク少種含む。しまりあり。  
 ⑤ 剛柔色土 ローブルク少種含む。ロームブロック（小）少種含む。しまりあり。  
 ⑥ 剛柔色土 ローブルク少種含む。ロームブロック（小）少種含む。しまりあり。  
 ⑦ 剛柔色土 ローブルク少種含む。ロームブロック（中）少種含む。しまりあり。

◎ 满目

- ④-1 明暗色土 ローム粒子少混合む。  
 ④-2 明暗色土 ローム粒子や少多混合む。ロームブロック（小）少混合む。

**⑤自然堆積土**

⑤-1 明暗色土 ローム粒子混合む。しまりなし。  
 ⑤-2 黑暗色土 ローム粒子混合む。健（少）少混合む。  
 ⑤-3 黑暗色土 ローム粒子少混合む。健（少）多混合む。しまりなし。

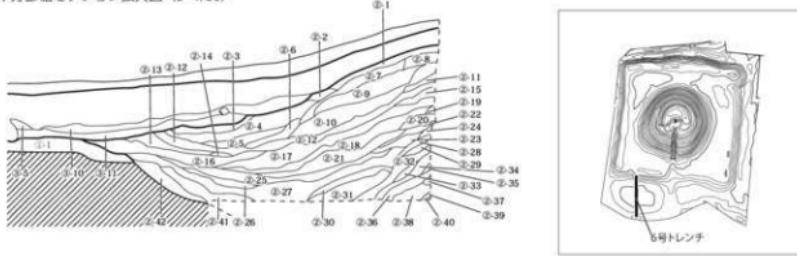
II-2-14 図 5号トレンチ 土層説明図

## 6号トレンチ

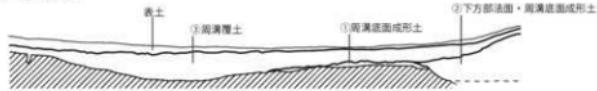
墳丘南側周溝のうち西側の周溝幅を確認することを目的として、下方部法面から周溝にかけて南北軸にトレンチを設定した。トレンチ規模は長さ約 21.0 m、幅約 1.1 m、掘削深度は地山が検出された地点では現況地表面から約 1.4 m、地山が確認できない箇所は最深部で約 1.9 mまで掘削した。周溝底面は標高 26.4m である。

下方部南端の法面は、ローム土と暗褐色土による盛土で構築されている。各層は 5.0cm ~ 20cm

①下方部据セクション拡大図 (S=1/60)



土層群模式図 (S=1/200)



6号トレンチ土層注記

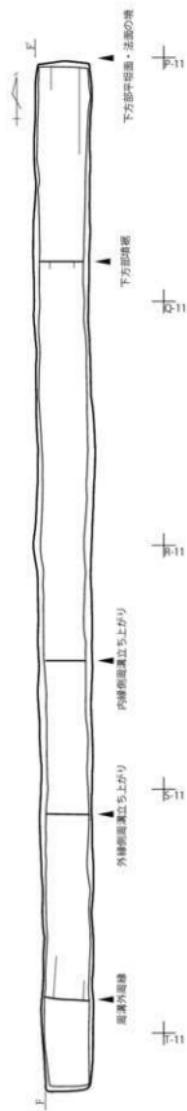
- ①周溝底面成形土
- ②1 暗褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり無。
- ③2 褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり無。
- ④3 黒褐色土 ローム粒子を中程度含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ⑤4 暗褐色土 ローム粒子を多量含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまりやや有る。
- ⑥5 暗褐色土 ローム粒子を全く含む。ロームブロック（中）を多く含む。しまりやや有る。
- ⑦6 褐色土 ローム粒子を全く含む。ロームブロック（小）を少く含む。しまりやや有る。
- ⑧7 黒褐色土 ローム粒子を中程度含む。ロームブロック（大）をやや多く含む。しまり有り。
- ⑨8 黑褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）を全く含む。しまり無。
- ⑩9 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（中）を多く含む。しまり有り。
- ⑪10 黒褐色土 ローム粒子を全く含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ⑫11 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ⑬12 暗褐色土 ローム粒子を中程度含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ⑭13 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ⑮14 褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり有り。
- ⑯15 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ⑰16 黑褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ⑱17 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ⑲18 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）をやや多く含む。しまり有り。
- ⑳19 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（中）を多く含む。しまり有り。
- ㉑20 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）を多く含む。しまり有り。
- ㉒21 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（中）を多く含む。しまり有り。
- ㉓22 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり有り。
- ㉔23 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり有り。
- ㉕24 黑褐色土 ローム粒子を少く含む。しまり有り。
- ㉖25 暗褐色土 ローム粒子を少く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり有り。
- ㉗26 褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）を多く含む。しまり有り。
- ㉘27 暗褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（中）をやや多く含む。しまり無。
- ㉙28 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉚29 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまり有り。
- ㉛30 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉜31 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉝32 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞33 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。しまり有り。
- ㉟34 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞35 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（中）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉟36 明褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞37 明褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（大）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞38 明褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（大）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞39 明褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞40 明褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（小）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞41 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック（中）をやや多く含む。しまり有り。
- ㉞42 暗褐色土 ローム粒子主体。ロームブロック（中）を多く含む。しまり有り。

### ②周溝底面成形土

- ① 1 暗褐色土 ローム粒子を微細含む。
- ② 2 暗褐色土 ローム粒子を微細含む。しまりやや有り。
- ③ 3 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。耕土を微細含む。
- ④ 4 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。
- ⑤ 5 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。
- ⑥ 6 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む。ロームブロック（小）を少額含む。
- ⑦ 7 褐色土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック（中）をやや多く含む。しまりやや有り。
- ⑧ 8 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。
- ⑨ 9 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。周溝底面土ブロック（小）をやや多く含む。
- ⑩ 10 暗褐色土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック（小）を微積含む。
- ⑪ 11 褐色土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック（中）を少額含む。

II -2-15 図 6号トレンチ 土層説明図

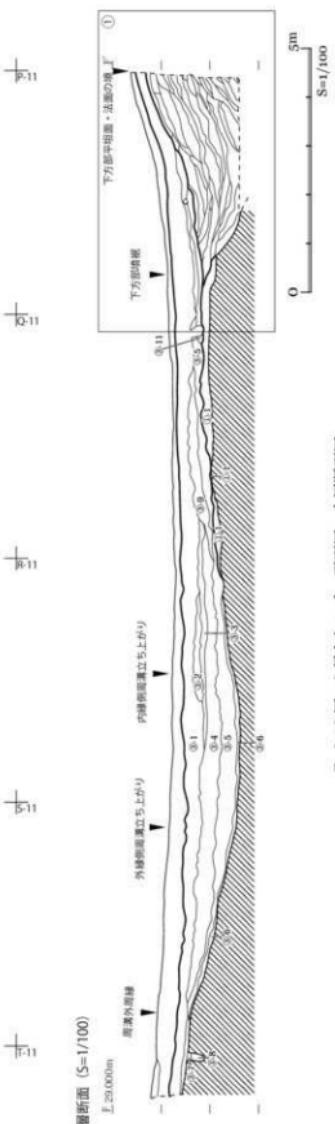
堆丘表面～周溝底面復元図 ( $S=1/100$ )



トレンチ最終掘削面 平面図 ( $S=1/100$ )



西壁土層断面 ( $S=1/100$ )



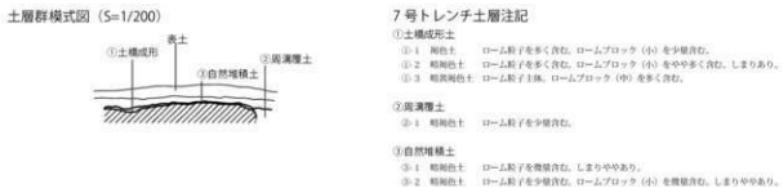
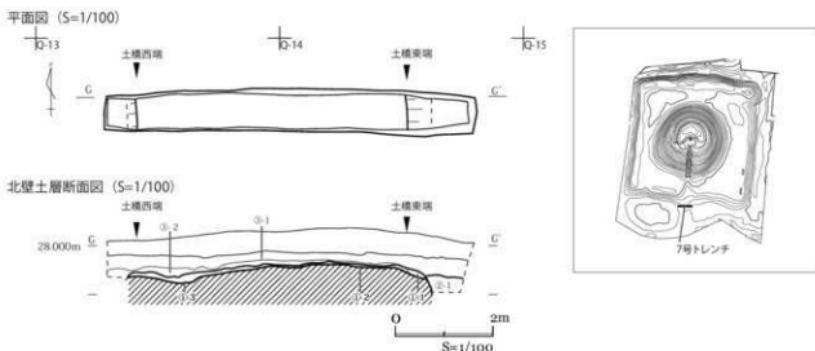
程度の厚さで法面と同じ傾斜で積み上げられている。この部分の下に旧地表面はないため、大形土坑の存在が予想されるが、底面までは検出できなかった。下方部の墳丘盛土はいずれも堅くしまり、強固な法面を形成していた。下方部外周の土手状盛土は、大形土坑を埋戻したのちに周溝法面の構築作業と一連の盛土で積み上げたと考えられる。

周溝は、南側の外周線まで検出した。これにより周溝は、断面が鍋底状を呈し、上幅が 19.5 m の浅く幅広の形状であることを確認した。現況の窪地状の地形は周溝の形状を反映していると考えられる。トレーニングの土層断面では土手状盛土の頂点までは確認できなかったが、地形測量図を参照すると、下方部と周溝底部の比高差は約 2.1 m である。

## 7号トレーニング

墳頂の山王社から南へまっすぐ続く参道は、現況で周溝部分よりも高く盛り上がる。また、平成 26 年度実施のレーダー探査により主体部の中心軸が参道とほぼ重なると推測された。そのため南側が山王塚古墳の正面と考え、高く盛り上がった参道は、墓域の内外を結ぶために周溝を掘り残した土橋に由来すると考え、土橋の存在とその規模を確認するために東西軸で設定した。トレーニングの規模は長さ約 7.6 m、幅約 0.9 m、掘削深度は約 0.8m である。

現況地表面より約 0.8m 下で地山のハードロームを検出した。トレーニングの東西両端は掘り込まれていたため、この掘り込みが周溝の立ち上がりで、掘り残された部分を土橋と判断した。土橋の幅は



II-2-17 図 7号トレーニング 平面図・土層断面図

5.6 mである。検出された地山のハードロームは完全な平坦ではなく、特に西側周溝先端に向けて波打つような傾斜を確認した。地山の上にはロームブロックを主体とした土を敷き均した痕跡が認められたため、土橋上面は平坦な通路を意識した造成が行われたと推察される。ロームブロックの敷き均し面は強いしまりが認められるものの、明確な硬化面は検出できなかった。

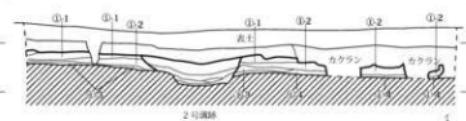
#### 8号トレンチ

周溝南東隅を確認し、周溝外周縁を検出する目的で設定した。トレンチの規模は東西約 9.0 m、南北約 8.9 m、掘削深度は現況地表面から約 0.8 ~ 1.2 mである。トレンチ南端で周溝底部の外縁側法面を検出することができたが、調査期間の制約からトレンチを拡張して周溝の外周縁を確認することはできなかった。

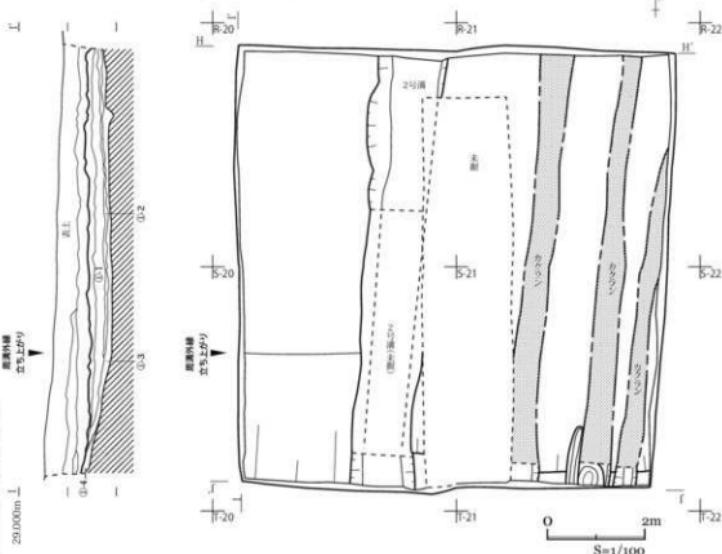
トレンチ東半分では耕作によると考えられる南北軸の溝状の攪乱が入る。トレンチ中央やや西寄りでは、南北軸に延びる上幅約 2.1 m、下幅約 1.0 m の溝跡（2号溝跡）を検出した。覆土中からは鉄釉壺の底部破片が出土しており、近世の溝跡の可能性が高い。

8号トレンチからは、近世遺物の染付鉢 1点、染付碗 7点、瓦質焰烙 1点、焼締擂鉢 1点、鉄釉灯明皿 1点、鉄釉壺 1点、中世の板碑片 1点が出土している。

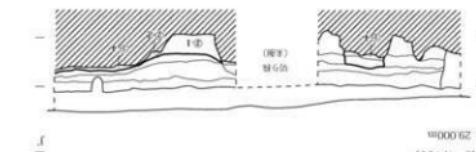
北壁土層断面図 (S=1/100) 29.000m H



平面図 (S=1/100)

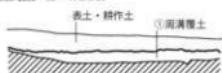


西壁土層断面図 (S=1/100)



西壁土層断面図  
(001/1=S) 図四堆積土層圖

土層群模式図 (S=1/200)



8号トレンチ土層注記

①周溝覆土

- ①-1 粘土質土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック(小)を少額含む。
- ①-2 粘土質土 ローム粒子や少しロームブロック(小)を少額含む。
- ①-3 明褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック(小)を少額含む。
- ①-4 明褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロック(小)をやや多く含む。

②③周溝

- ②-1 明灰褐色土 ローム粒子を少額含む。ロームブロック(小)をやや多く含む。
- ②-2 明灰褐色土 ローム粒子をやや多く含む。



II -2-18 図 8号トレンチ 平面図・土層断面図

#### (4) 第3次調査

##### 9号トレンチ

周溝幅と下方部南西角の土手状盛土の確認を目的に南北軸に対し約15°東側に傾けて設定した。

下方部縁辺に樹木があり、トレンチが南北に分かれたため、南側を9a号トレンチ、北側を9b号トレンチと呼称する。

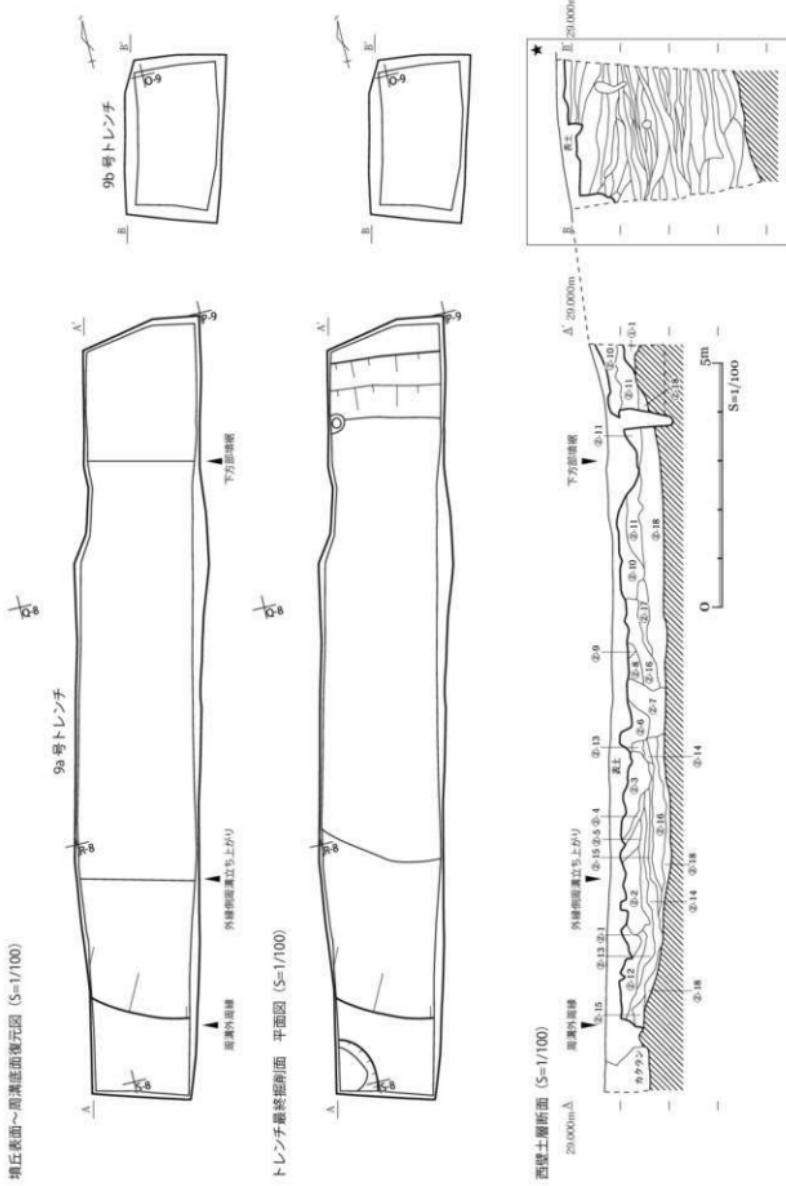
トレンチの規模は9a号トレンチで長さ16.0m、幅2.0m、掘削深度は周溝部で現況地表面から約1.2m、9b号トレンチで長さ3.5m、幅2.0m、掘削深度は現況地表面から約4mである。

9a号トレンチでは、下方部南西の法面の裾部から一連の周溝の底面の形状、周溝外周縁を確認した。周溝底面の標高は27.0mである。周溝底面はローム層を掘り残し、比較的平坦な面を作り出している。

9b号トレンチでは、ローム土と黒色土を用いた墳丘盛土を確認した。墳丘盛土は固く締まることから、構築に当たっては締め固めが行われたものと思われる。また、墳丘盛土の直下に旧地表面は無く、現況の下方部上面から約4m下で、南側へ傾斜する地山のローム層を確認した。これは、1号トレンチ同様に大形土坑が存在し、下方部を築造するに際して黒色土・茶褐色土を主体とした土で埋め戻されたものと考えられる。

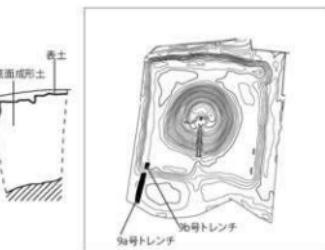
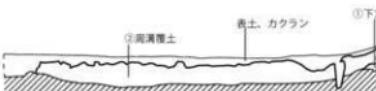
9b号トレンチからは、大形土坑の覆土中で縄文時代中期の深鉢形土器の破片が出土した。

埠丘表面～開溝底面復元図 ( $S=1/100$ )



II-2-19 図 9号トレンチ 平面図・土層断面図

土層群模式図 (S=1/200)



9号トレンチ土層記

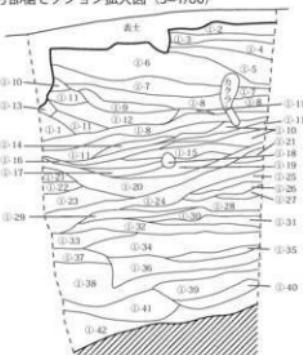
①下方部法面・周溝底面成形土

- ① 黒色土 しまり悪く粘性大。
- ② 明茶褐色土 木根・赤色粒を多く含む。しまり悪くけさばしている。
- ③ 明茶褐色土 ローム・赤色粒を多く含む。
- ④ 明茶褐色土 ローム・赤色粒を多く含む。
- ⑤ 明茶褐色土 赤色粒を含む。しまり悪い。
- ⑥ 明茶褐色土 ローム・ロックを多く含む。しまり悪い。
- ⑦ 黒褐色土 ローム・ロックを多く含む。
- ⑧ 明茶褐色土 ローム・ロックを主体とする。ボソボソしている。
- ⑨ 黑褐色土 粘性大・ローム・ロックを含む。
- ⑩ 明茶褐色土 ハードルームを主体とする。
- ⑪ 黑色土 しまりやや粘性大。
- ⑫ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ⑬ 明茶褐色土 赤色粒を多く含む。しまり良く粘性大。
- ⑭ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ⑮ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ⑯ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ⑰ 明茶褐色土 ローム・赤色粒を含む。粘性大。
- ⑱ 黑色土 木根を多く含む。
- ⑲ 明茶褐色土 ローム・赤色粒を含む。
- ⑳ 明茶褐色土 ローム・ロックを多く含む。
- ㉑ 明茶褐色土 ローム・ロックを主体とする。
- ㉒ 黑褐色土 しまりやや悪く粘性大。
- ㉓ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ㉔ 黑褐色土 しまり悪く粘性大。
- ㉕ 明茶褐色土 ローム・ロックを主体とする。
- ㉖ 黑色土 しまり悪く粘性大。
- ㉗ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ㉘ 黑褐色土 ローム・赤色粒を含む。
- ㉙ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ㉚ 黑褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ㉛ 明茶褐色土 ローム・赤色粒を含む。粘性大。
- ㉜ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ㉝ 黑褐色土 赤色粒を含む。粘性大。
- ㉞ 明茶褐色土 赤色粒・ローム・ロックを含む。
- ㉟ 黑褐色土 赤色粒・ローム・ロックをわずかに含む。
- ㉟ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。

②周溝覆土

- ㉑ 明茶褐色土 ソフトロームを主体とする。しまり悪くぐる。
- ㉒ 黑褐色土 小石・ローム粒を多く含む。しまりよく粘性がある。

★下方部据セクション拡大図 (S=1/60)



II-2-20図 9号トレンチ 土層断面図・土層説明図

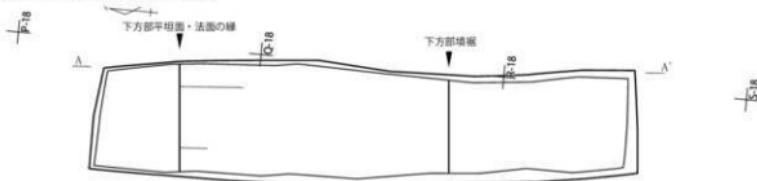
## 10号トレーンチ

墳丘南側周溝のうち東寄りの周溝幅を確認することを目的として、下方部法面から周溝にかけて南北軸にトレーンチを設定した。トレーンチ規模は南北11.0m、東西2.5m、掘削深度は最大で1.3mである。

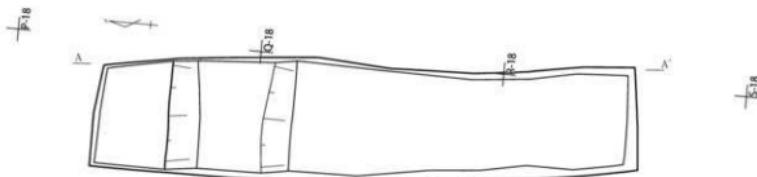
緩やかに傾斜する下方部法面には樹木等の攪乱が多く入るが、周溝の底面を確認した。周溝はさらに現道の下まで続くことが明らかになった。

遺物は出土していない。

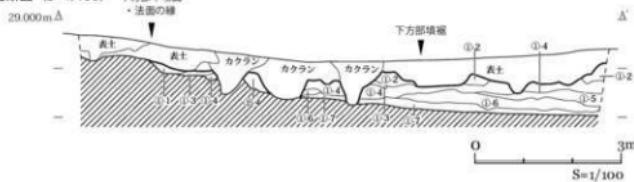
墳丘表面～周溝底面復元図 (S=1/100)



トレーンチ最終掘削面 平面図 (S=1/100)



東壁土層断面 (S=1/100)



土層群模式図 (S=1/200)



11号トレーンチ土層注記

①周溝土

- ①-1 周溝褐色土 ソフトロームを主体とする。木根を多く含む。
- ①-2 周溝褐色土 ロードダム・赤色粘子を多く含む。
- ①-3 周溝褐色土 ソフトロームを主体とする。
- ①-4 黒褐色土 油色粘子を含む。しまりやや悪く粘性大。
- ①-5 周溝褐色土 ロードダム・赤色粘子を含む。
- ①-6 黒褐色土 ロードダム・赤色粘子を含む。
- ①-7 周溝褐色土 ソフトロームを主体とする。



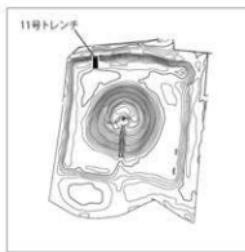
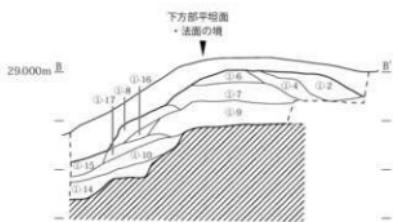
II-2-21 図 10号トレーンチ 平面図・土層断面図

## 11号トレンチ

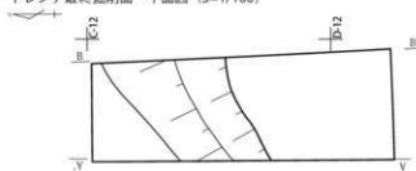
填丘北側の土手状盛土の構築状況を確認する目的で、下方部縁辺の土手状盛土から周溝法面にかけて南北軸にトレンチを設定した。トレンチ規模は長さ 6.2 m、幅 2.2 m、掘削深度は現況の下方部表面から最大で 3.0m である。

土手状盛土は、ほぼ水平にロームブロック交じりの土を旧表土の上に積み上げ築造されている。た

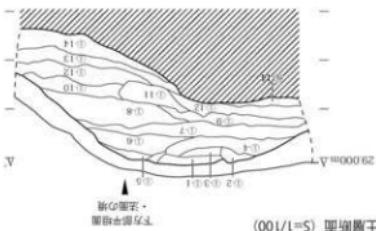
東壁土層断面 ( $S=1/100$ )



トレンチ最終掘削面 平面図 ( $S=1/100$ )



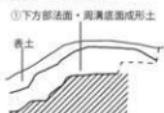
填丘表面復元図 ( $S=1/100$ )



0  
S=1/100  
5m

(S=1/100) 11号トレンチ

土層群模式図 ( $S=1/200$ )



11号トレンチ土層注記

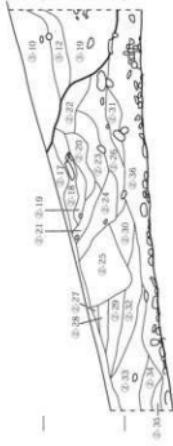
- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| ① 下方部法面・周溝底面成形土 | ⑩ 埋黒褐色土                |
| ② 黄褐褐色土         | 赤色粘子を含む。しまり悪く粒性大。      |
| ③ 黄褐色土          | ロームブロックを多く含む。          |
| ④ 黑褐色土          | 木組・ソフトロームを主体とする。       |
| ⑤ 黄褐褐色土         | ローム・ソフトロームを含む。         |
| ⑥ 黄褐褐色土         | 木組・黒色粘子・赤色粘子を含む。       |
| ⑦ 黄褐褐色土         | ローム・ソフトロームを含む。         |
| ⑧ 黄褐褐色土         | ローム・ロックを主体とする。下方部の成形土。 |
| ⑨ 黑褐色土          | 黒色粘子を含む。               |

- |         |               |
|---------|---------------|
| ⑪ 黄褐褐色土 | ロームブロックを少額含む。 |
| ⑫ 黄褐色土  | 赤色粘子・黒色粘子を含む。 |
| ⑬ 黑褐色土  | 黒色土を含む。       |
| ⑭ 黄褐褐色土 | ソフトロームを主体とする。 |
| ⑮ 黑褐色土  | ローム粘を多く含む。    |
| ⑯ 黄褐褐色土 | ソフトロームを多く含む。  |
| ⑰ 黄褐褐色土 | ソフトロームを主体とする。 |

II-2-22 図 11号トレンチ 平面図・土層断面図

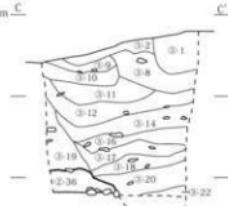
西壁土層断面 (S=1/60)

北



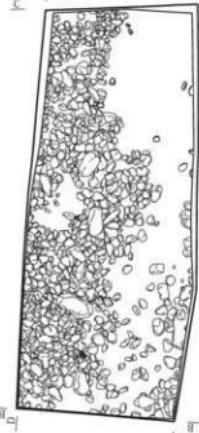
北壁土層断面 (S=1/60)

32.000m C

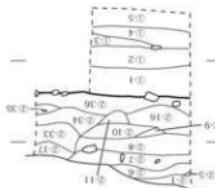


礫床検出状況 平面図 (S=1/60)

C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M  
N  
O  
P  
Q  
R  
S  
T  
U  
V  
W  
X  
Y  
Z



M-15



32.000m B

東壁土層断面 (S=1/60)

北



東壁土層断面 (S=1/60)

南



12号トレンチ

O 2m  
S=1/60

II-2-23 図 12号トレンチ 平面図・土層断面図

だし、地山はトレント北側で掘り込みにより切られている。この掘り込みの全貌はトレント北側に広がるため不明であるが、1・2・4・6号トレント同様の大形土坑の存在が想起される。この掘り込みを黒色土とローム土で埋戻した後に、周溝法面の構築作業と一連で土手状盛土を積み上げたと考えられる。

11号トレントからは縄文時代中期の深鉢形土器の破片が出土している。

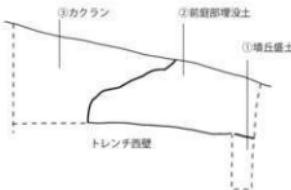
## 12号トレント

主体部の遺存状態を把握するためにレーダー探査の成果を参照し、南北軸でトレントを設定した。

トレント規模は長さ 5.0m、幅 2.0m で、掘削深度はトレント北側で 2 ~ 2.5m、南側で 1 ~ 1.5m である。南側はサブトレントを設定してさらに 1.1m 掘り下げた。

標高 27.8 ~ 29.5m で、河原石敷きの礫床の広がりを確認した。礫床はトレント北側から南側に向かって 3.5° の傾斜で下がる。全体に長径 10 ~ 20cm 程度の河原石が敷かれていた。この礫床は、平成 26 年度実施の地中レーダー探査の成果を参照すると、横穴式石室の前庭部と推定される。前庭部は墳丘上面より大規模な掘削を受けており、トレント北東隅では床面にまで擾乱が及ぶ。長径 30cm 超の円礫も数点混在している。14号トレントの礫床と比較すると大きさの齊一性が低いように見て取れる。

土層群模式図 東壁 (S=1/200)



12号トレント土層注記

### ①埴丘盛土

- ①-1 明黄褐色土 ロームブロックを土体とする。
- ①-2 黒褐色土 ローム粘を多く含む。
- ①-3 相模褐色土 砂利を多く含む。
- ①-4 相模褐色土 しまりよく粒状。
- ①-5 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。

### ②前庭部埋土

- ②-1 明黄褐色土 木板・木の茎を多く含む。鉢道表土。
- ②-2 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。
- ②-3 黒褐色土 ローム粘・小石・砂利を多く含む。
- ②-4 相模褐色土 石材・砂利を多く含む。
- ②-5 黑褐色土 ローム・砂利・小石を多く含む。
- ②-6 黑褐色土 木板・木の茎を多く含む。
- ②-7 黑褐色土 ソフトロームを土体とする。
- ②-8 黑褐色土 ローム・砂利・小石を多く含む。
- ②-9 黑褐色土 ローム粘・粘土・砂利を多く含む。
- ②-10 黑褐色土 ローム・砂利・小石を多く含む。
- ②-11 明黄褐色土 黏土・ローム粘を土体とする。
- ②-12 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。
- ②-13 明黄褐色土 ソフトロームを土体とし、礫を多く含む。
- ②-14 黑褐色土 鉢・縦筋柱・縦筋柱を多く含む。
- ②-15 明黄褐色土 ローム・砂利・砂利柱を多く含む。
- ②-16 明黄褐色土 鉢・縦筋柱を多く含む。
- ②-17 明黄褐色土 木板・木の茎を多く含む。
- ②-18 明黄褐色土 砂利・柱・礫を多く含む。黑色土を含む。
- ②-19 黑褐色土 黒色土を含む。
- ②-20 黑褐色土 土面粘土を土体とする。
- ②-21 明黄褐色土 ブロックを土体とする。
- ②-22 明黄褐色土 ローム粘・小石・礫を多く含む。
- ②-23 明黄褐色土 土面粘土を土体とする。
- ②-24 黑褐色土 土面粘土を土体とする。
- ②-25 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。
- ②-26 黑褐色土 ローム粘・小石・礫を多く含む。
- ②-27 明黄褐色土 木板を含む。
- ②-28 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。礫を含む。
- ②-29 明黄褐色土 ローム・ブロックを土体とする。
- ②-30 明黄褐色土 ローム・ブロックを土体とする。
- ②-31 明黄褐色土 ローム・ブロックを土体とする。
- ②-32 黑褐色土 土面粘土を土体とする。
- ②-33 明黄褐色土 ローム粘・粘土を含む。
- ②-34 明黄褐色土 ローム粘・粘土粘を多く含む。
- ②-35 明黄褐色土 黏土を含む。
- ②-36 黑褐色土 磚・ロームブロックを含む。

### ③カクラン

- ③-1 明黄褐色土 小石・ロームブロック・粘土を含む。
- ③-2 明黄褐色土 木板・木の茎を含む。
- ③-3 明黄褐色土 木板・縦筋柱・礫を多く含む。
- ③-4 明黄褐色土 鉢・木の茎子を含む。
- ③-5 明黄褐色土 ローム粘・粘土・礫を多く含む。
- ③-6 明黄褐色土 木板・縦筋柱・礫を多く含む。
- ③-7 明黄褐色土 鉢・木の茎子を含む。
- ③-8 明黄褐色土 ローム粘・粘土・礫を多く含む。
- ③-9 明黄褐色土 ローム粘・粘土・砂利を含む。
- ③-10 明黄褐色土 ローム粘・小石を含む。
- ③-11 明黄褐色土 黏土・ローム粘を土体とする。
- ③-12 明黄褐色土 ソフトロームを土体とする。
- ③-13 明黄褐色土 ソフトロームを土体とし、礫を多く含む。
- ③-14 黑褐色土 鉢・縦筋柱・縦筋柱を多く含む。
- ③-15 明黄褐色土 ローム・ブロックを多く含む。
- ③-16 明黄褐色土 鉢・縦筋柱・縦筋柱を含む。
- ③-17 黑褐色土 鉢・縦筋柱・縦筋柱を含む。
- ③-18 黑褐色土 鉢・縦筋柱・縦筋柱を多く含む。
- ③-19 明黄褐色土 鉢・粘土粘を含む。ソフトロームを土体とする。
- ③-20 明黄褐色土 ソフトロームを土体とし、粘土粘を含む。
- ③-21 黑褐色土 ソフトロームを土体とし、粘土粘を含む。
- ③-22 明黄褐色土 砂質土・礫を多く含む。

II-2-24 図 12号トレント 土層説明図

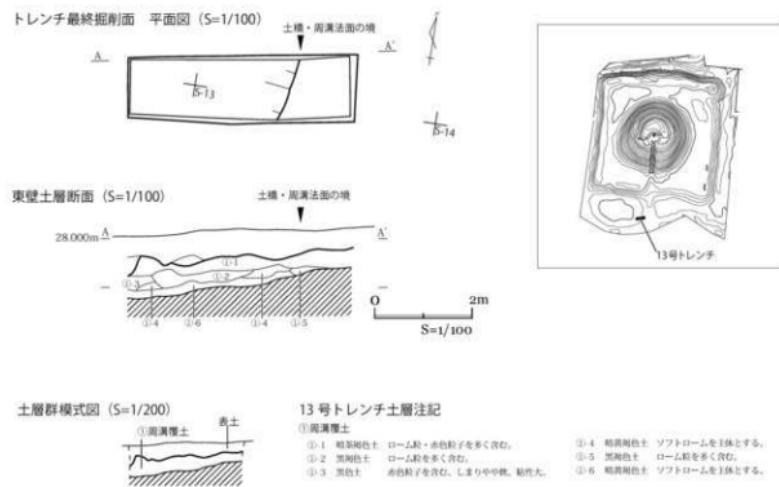
さらに礫床直下の地業を確認する目的で、トレンチ南東隅にサブトレンチを設けて床面下1.1mまで掘り下げた。礫床直下に厚さ60cmのローム土を主体とした土層、その下で黒色土層を確認したが、地山までは確認していない。

12号トレンチからは鉄釘、須恵器平瓶、須恵器長頸瓶の破片などが出土している。

### 13号トレンチ

土橋の範囲を確認するために東西軸で設定した。トレンチ規模は長さ4.5m、幅1.3m、掘削深度は現地表面から1.3mである。7号トレンチで確認した土橋の形状の補足情報を得た。土層断面の観察からは緩やかに傾斜する周溝の法面が確認された。

遺物は出土していない。



II-2-25図 13号トレンチ 平面図・土層断面図

## (5) 第4次調査

### 14号トレンチ

石室の構造、幅、素材の把握を目的として、12トレンチよりもさらに玄室側に設定した。トレンチ規模はおよそ東西4.0m、南北4.5m、掘削深度は最大で約2.5mである。安全を考慮し、トレンチ北側は掘り残した。調査の結果、トレンチ平面よりも広大な、後世の掘り込みが石室上部を壊していくことが明らかになった。石材の多くは抜き取られていたものの、礫床と側壁の一部、門柱とその基礎を検出した。また、石室直下の地業を確認するためにトレンチ南東角にサブトレンチを設定し、床面から地山まで更におよそ1.8m掘り下げた。

また14号トレンチでは、側壁の根石を据えた溝に落ち込んだ土と、礫床直上から1m上層までの掘削土約4.5m<sup>3</sup>について、7mm、3mm、1mmの3種類の網目のフライかけを行い、微細遺物の検出に努めた。その結果、礫床付近の堆積土から、須恵器片、鉄釘、ガラス小玉を検出した。須恵器片は、接合作業の結果、少なくとも3個体が存在していたことが解った。

#### ・礫床

標高29.75m付近に15～20cm程度の扁平な河原石を敷き詰めた礫床を検出した。南側の一部に欠落があるが、攪乱によるものと考えられる。12号トレンチの礫床と異なり、大きさのそろった礫を丁寧に敷き詰めたように看取される。

#### ・側壁

角閃石安山岩の転礫を素材とする積み石の側壁を検出した。長径30cm程度の転礫を扁平に加工し、小口積みにしたものである。西側は最大で3段残存していた。基礎部分は床面よりも低いため側面から正確な点数が数えられないが、根石は5点残存しているものと考えられる。2段目は4点、3段目は1点残存している。

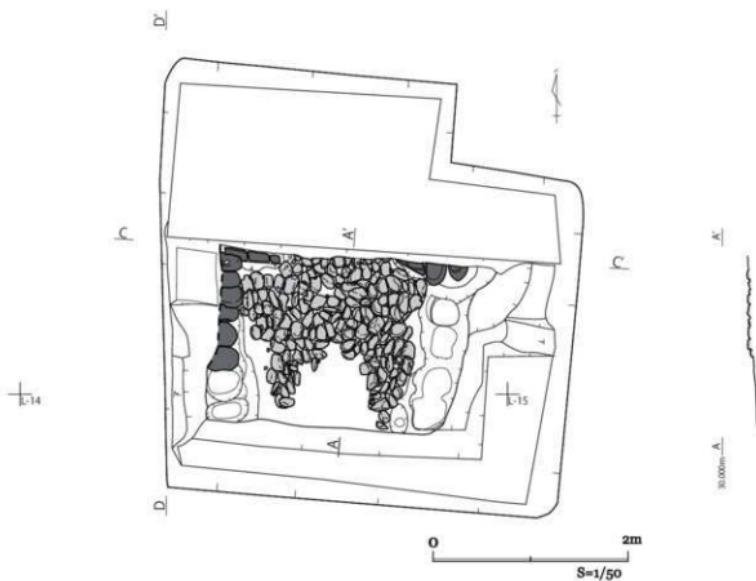
東側の側壁は残存していないが、根石を設置した溝状の痕跡を確認しており、両壁ともに直線的で石室の軸と平行する。石室の幅はおよそ1.9mと復元される。

#### ・門柱

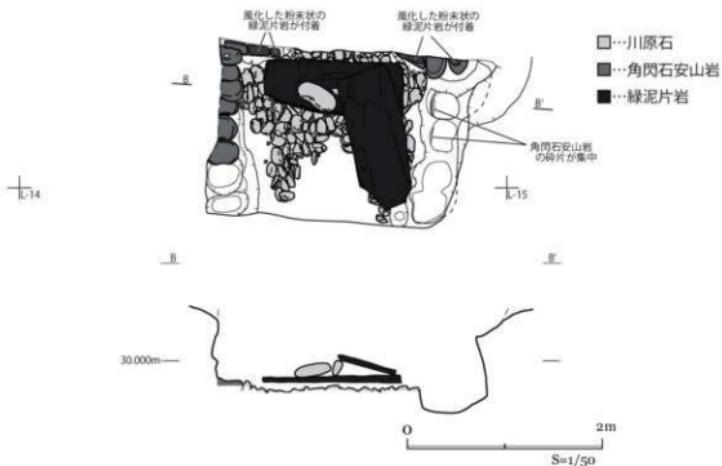
礫床より3cm程度の僅かな間層を挟んで緑泥片岩の板材2枚が重なるように出土した。この板材はいずれも長さ140cm、幅60cm、厚さ10cmを測る。板材が石室に利用されたものと考えられるが、どこに用いられたかについては、以下を根拠により推定した。

石室西側の礫床および側壁が途切れる部分に東西0.7m、南北0.2mの細長い掘り込みを検出した。この掘り込みを床面より0.3m程度掘り下げたところ、角閃石安山岩の石材を少なくとも3点据え置いた構造物を検出した。後世の掘り込みが深く入っていた東側にも、対になるように設置された少なくとも3点の角閃石安山岩を確認した。これらの石材上面には溝状の加工が施されたものもあり、風化した粉状の緑泥片岩が付着していた。

14号トレンチ平面図 (1/50)

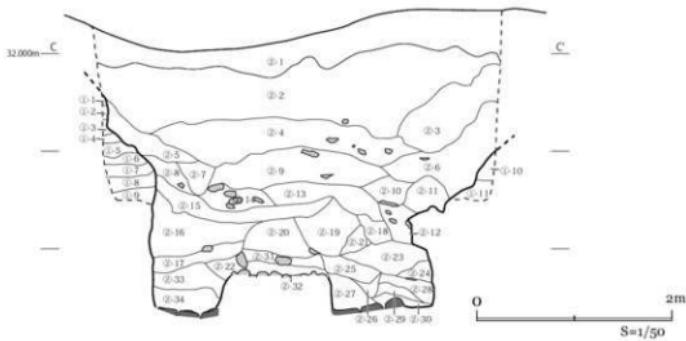


14号トレンチ門柱石出土状況 (1/50)



II -2-26 図 14号トレンチ 平面図

北壁セクション図 (S=1/50)



14号トレンチ北壁土層記述

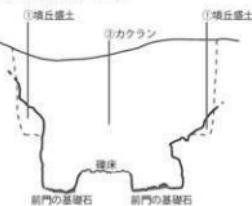
① 塗瓦土

- ①-1 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったロームがブロック状に混入。白色粘土含む。
- ①-2 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったローム土が主。
- ①-3 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったローム土が主。黑色土中混含む。
- ①-4 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったロームがブロック状に混入。
- ①-5 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったローム土が主。黒色土を含む。
- ①-6 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったロームがブロック状に混入。
- ①-7 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったローム土が主。白色粘土を含む。
- ①-8 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったロームがブロック状に混入。黒色土を含む。
- ①-9 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや荒みがかったローム土が主。白色粘土を含む。
- ①-10 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや明るいローム土が主。
- ①-11 明期色土 しまりやや青・粘性中、やや明るいローム土が主。白色粘土含む。

② カクラン

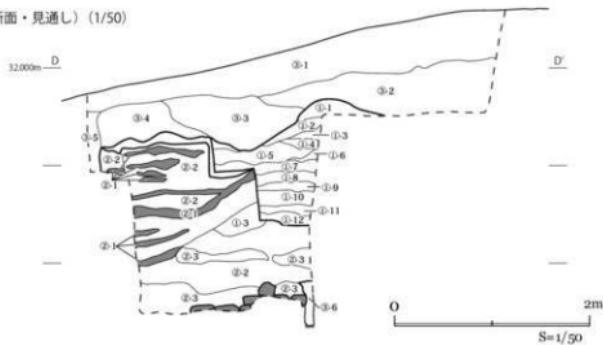
- ②-1 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、径 50mmの円陣を少量含む。
- ②-2 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、径 5～10mmの円陣、径 30～50mmの縦横川筋を少量含む。
- ②-3 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、径 50～500mmの円陣を少量含む。13世紀の青磁片が出土。
- ②-4 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、径 50～100mmの円陣、径 50～300mmの縦横川筋、径 100mmの内門右山筋を少量含む。
- ②-5 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmの円陣を少量含む。
- ②-6 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、
- ②-7 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、ロームが少量。
- ②-8 棕褐色土 しまりやや青・粘性中、ロームが少量。
- ②-9 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmの円陣を少量含む。100mmの縦横川筋を少量含む。  
径 100～150mmの縦横川筋を少量。径 5～10mmのロームブロック、径 5～10mmの白粘土ブロックを少量含む。
- ②-10 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmの円陣を少量含む。フラスコ形複屈曲の窓片が出土。
- ②-11 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmのロームブロック、径 5mmの白粘土ブロックを少量含む。
- ②-12 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 50mmの内門右山筋を微量含む。
- ②-13 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームが少量。
- ②-14 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームが少量。
- ②-15 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームの白粘土ブロック、風化した縦横川筋を多量含む。風化物を中混含む。
- ②-16 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5～10mmのロームブロックを微量含む。
- ②-17 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmの白粘土ブロックを微量含む。径 5mmの内陣を中混含む。
- ②-18 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmのロームが微量含む。
- ②-19 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmのロームブロック、径 5mmの白粘土ブロック、径 5mmの内陣を中混含む。
- ②-20 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームが微量含む。白粘土と粘土、径 5mmのロームが微量含む。
- ②-21 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームのロームブロック、白粘土と粘土を少量含む。径 5mmのロームが微量含む。
- ②-22 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームのロームブロックを微量含む。
- ②-23 明期色土 しまりやや青・粘性中、ロームのロームブロックを中混含む。径 5～20mmの内陣を多量含む。
- ②-24 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5～10mmの内陣を少量含む。
- ②-25 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmのロームを少量含む。
- ②-26 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmのロームブロックを少量。径 10mmの内陣を中混含む。
- ②-27 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 1～10mmの白粘土ブロック多量。径 5mmの内陣を多量含む。
- ②-28 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 50mmの内門右山筋を中混含む。径 50mmの内門右山筋を中混含む。
- ②-29 明期色土 しまりやや青・粘性中、内門右山筋。挖入幅のロームブロックか?
- ②-30 明期色土 しまりやや青・粘性中、内門右山筋。
- ②-31 明期色土 しまりやや青・粘性中、200mmの内門右山筋の石材を多量含む。砂利を多量含む。
- ②-32 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 50～100mmの内陣。径 5～20mmの内陣多量。砂利を多量含む。
- ②-33 明期色土 しまりやや青・粘性中、径 5mmの白粘土ブロックを中混含む。径 5～10mmの内陣を多量含む。
- ②-34 明期色土 しまりやや青・粘性中、白粘土を少量含む。門門の基礎柱跡を示す。

土層群模式図 (S=1/100)



II-2-27図 14号トレンチ 土層断面図

## 西壁 観察図（断面・見通し）(1/50)



### 14号トレンチ西壁土層注記

#### ① 塗丘盛土（断面）

- ①-1 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったロームがブロック状に混入。
- ①-2 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-3 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-4 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったロームがブロック状に混入。
- ①-5 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-6 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-7 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-8 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-9 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-10 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-11 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったローム土が土体。
- ①-12 明褐色土 しまり土・粘性土 中、やや塊みがかったロームがブロック状に混入。

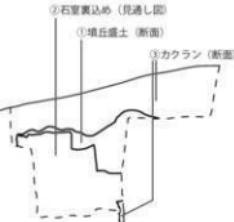
#### ② 石室裏込め（表面観察による所見）

- ②-1 黄褐色の砂土 径5～20mmの円礫と砂の砂。
- ②-2 明褐色土 径5～50mmの白色黏土ブロックを多く含むローム土。
- ②-3 明褐色土 黄褐色土を中骨含むローム土。

#### ③ カクラン（土層断面）

- ③-1 明褐色土 しまり土・粘性土 中、ローム土を少量含む。
- ③-2 砂土 しまり土・粘性土 中、ローム土を少量含む。
- ③-3 明褐色土 しまり土・粘性土 中、径5～10mmの円礫を中骨含む。径50～100mmの円礫を少量含む。
- ③-4 明褐色土 しまり土・粘性土 中、5mmの円礫を少骨含む。
- ③-5 明褐色土 しまり土・粘性土 中、5mmの白い粘土ブロックを少量含む。
- ③-6 明褐色土 しまり土・粘性土 中、5mmの白い粘土ブロック、砂を中骨含む。門柱石の抜取り跡。

土層群模式図 (S=1/100)



II-2-28 図 14号トレンチ 土層断面図

緑泥片岩の板材と床下の角閃石安山岩の構造物の検出状況を合わせて考え、前者は門柱石で後者はそれを受ける基礎と判断した。礫床から天井の高さは100cm程度と推察される。

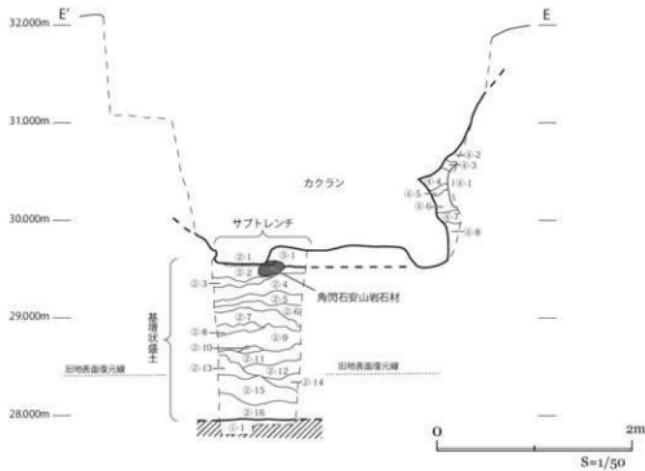
なお、門柱基礎は内側に傾くように設置されており、門柱石も内側に傾くように立てられたものと考えられる。残存した側壁とその控え積みのローム壁が石室中心軸へ迫り出すことから、石室の側壁は持ち送り構造であったと推測される。

後述するレーダー探査の結果と、12号トレンチの成果を合わせると、石室は複室構造で3つの空間（玄室・前室・羨道）があることが想定される。14号トレンチは前庭部から羨道を経て一番手前の空間である羨道と考えられる。門柱石は羨道と前室の間に立てられた前門柱石に用いられたものとしておきたい。

サブトレーンチ 位置図 (1/50)



サブトレーンチ 南壁セクション図 (1/50)



14号トレンチ サブトレーンチ土層注記

① 開発ローム層

① 明褐色土 しまり強・粘性中。 地山のロームドローム。

② 敷葉状盛土

② 1 明褐色土 しまり強。 粘性中。 斜面中。 斜面本状の斜面石安山岩を多量に含む。

② 2 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

② 3 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

② 4 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土が主体。

② 5 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

② 6 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土が主体。

② 7 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土が主体。

② 8 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

② 9 明褐色土 しまり強・粘性中。 小や黒みがかったローム土が主体。

② 10 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や明るいローム土が主体。

② 11 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

② 12 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や明るいローム土が主体。

② 13 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

② 14 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

② 15 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や明るいローム土が主体。

② 16 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土がロック状に凝る。

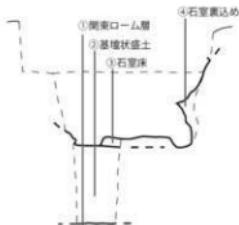
③ 石室床

③ 1 明褐色土 しまり中。 粘性中。 φ5 ~ 20mm の円礫を多量。 5mm の白色粘土ブロックを中量含む。

④ 石室裏込め

④ 1 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

サブトレーンチ 土層区分 (S=1/100)



②-2 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

②-3 从陶色砂礫 しまり弱・粘性弱。 径3~20mmの円礫と砂を多量に含む。

③-4 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

③-5 从陶色砂礫 しまり弱・粘性弱。 径3~20mmの円礫と砂を多量に含む。

③-6 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

③-7 从陶色砂礫 しまり弱・粘性弱。 径3~20mmの円礫と砂を多量に含む。

③-8 明褐色土 しまり強・粘性中。 中や黒みがかったローム土が主体。

II-2-29 図 14号トレンチ 土層断面図

#### ・側壁の裏込め

トレンチ西壁では、ローム土を積み上げた墳丘盛土の中に互層状に挟みこまれるように灰褐色の砂礫層を複数枚検出した。上円部墳丘盛土を断ち割った4・5号トレンチではこのような互層状の砂礫層は確認していないことから、石室の側壁周囲に施されたものと考えられる。どのような効果があるのかは測りかねるが、石室の強化を目的としたものと考えて間違いない。

#### ・礫床の直下の地業

トレンチ南東角に東西1.0m、南北0.5mのサブトレンチを設定し、礫床の下を掘り下げ土層を確認した。

礫床より下層20cmは暗褐色土が敷かれ、礫床を支える。その下層に粉末状に碎かれた角閃石安山岩片を多量に含むローム土の層が2cm程挟まる。石材加工に伴う碎片の混入と考えられる。更に下層は、突き固めたローム土が180cm続く。若干の色調の差異から互層状に分層したが、ほぼ等質なローム土であり、混入遺物や砂礫などの夾雑物は無かった。その下に地山のハードロームを確認した。地山を検出した標高は27.95mである。墳丘東西に設定した4・5号トレンチ（第2次調査）の成果も踏まえると、以下の通りである。

・14号トレンチ	礫敷き床	= 29.75m
(4・5号トレンチ)	旧地表面：黒色土	= 28.5m ~ 28.3m)
・14号トレンチ	地山のハードローム	= 27.95m
・14号トレンチ	最終掘削面	= 27.8m

このことから石室の下は、旧地表面より下に0.3~0.5m程度、黒色土から関東ローム層上層のソフトロームが取り除かれていることが解った。取り除いた後に1.8mの高さまでローム土を基壇状に積み上げ、その上に石室が構築されている。

なお、サブトレンチ南壁では、角閃石安山岩の石材が、石室床面より15cm低い場所に設置されていることが解った。側壁の根石よりもやや低いことから、門柱石を支える基礎等の玄門に関係する構造物の可能性を指摘できる。

## 第3節 出土遺物

### (1) 古墳にともなう遺物

山王塚古墳の築造及び葬送儀礼に伴うと考えられる遺物は主体部周辺の 12号トレンチ、14号トレンチに限られ、須恵器、鉄釘、ガラス小玉および石室に用いられた石材が出土した。

#### ・須恵器（II -3-1 図）

II -3-1 図 1 は須恵器の平瓶である。口縁部から肩部、胴部の一部を残すが、底部は欠損する。残存率は 4 割程度である。現況の器高は 7.5cm であるが、もともとは 10cm 弱であったと推定される。口頸部高 3.5cm、口頸部径 4.5cm。12号トレンチの南西側、前庭部礫床の直上から出土した。

II -3-1 図 2 はフ拉斯コ形長頸瓶である。5 点の破片が接合した。胴部中央より下位は全て欠く。口頸部高 7.2cm、口頸部径 8.4cm、胴部径 16.2cm（推定）である。胎土は灰白色で黒色粒子が少量見られる。残存率は 4 割程度とみられる。14号トレンチの礫床付近から出土した。頸部に 2 条の沈線が配されており、口縁部直下に段を有する。自然軸が頸部内外面と、胴部上半に見られる。自然軸は暗緑灰色で、艶はあるが透明感はない。頸部から胴部にかけて灰褐色の粘土が付着しており、窯壁の一部が融着したものと考えられる。

II -3-1 図 3 は口縁部から頸部にかけての破片である。他の器種の可能性もあるが、ここで図示したものに他に出土した破片はいずれもフ拉斯コ形長頸瓶の胴部と考えられることから、3 もフ拉斯コ形提瓶の可能性が高い。14号トレンチの礫床付近から出土した。口縁部直下に段を有する。頸部外面に自然軸が見られる。

II -3-1 図 4 はフ拉斯コ形長頸瓶である。9点の破片が接合した。口縁部のすべてと胴部の半分程度、底部を欠いている。器高は 18.5cm（現況）、口頸部高 5.9cm（現況）である。胴部高は 12.5cm（推定）、胴部径 14.9cm（推定）。残存率は 5 割程度である。頸部に 2 条の沈線が配されており、口縁部直下に段を有する。胎土は灰白色で黒色粒子が少量見られる。頸部外面と、胴部上半に自然軸が見られる。自然軸は暗緑灰色で、艶はあるが透明感はない。14号トレンチの礫床付近から出土した。

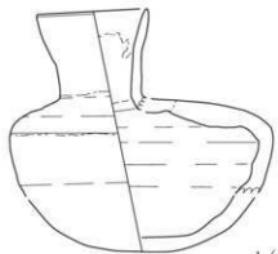
これら須恵器は、7世紀中頃の所産と考えられる。なお、産地について、肉眼観察では湖西産や猿投産と意見が割れたため、ここでは東海産としておく。細別は今後、胎土分析等の子細な分析に委ねる。

#### ・鉄釘（II -3-2 図 1～15）

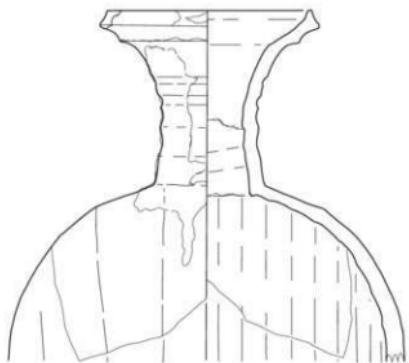
12号トレンチおよび 14号トレンチの礫床付近から鉄釘が 15 点出土した。断面は四角で 1 辺は 0.5cm 前後である。皿部は端部を折り曲げて作出されている。いずれも一端ないしは両端を欠いており、皿部が残るもののが 5 点（II -3-2 図 1～5）、先端部（13～15）が 3 点である。接合する可能性もあるため元々の数量、および完形時の大きさは不明である。現状の最大長は 5cm（1）である。本質の付着は確認出来なかった。

#### ・ガラス小玉（II -3-2 図 16, 17）

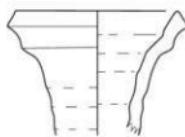
フルイ掛けした 14号トレンチの標高 29.75m（礫床）付近の土から、2 点検出した。いずれも濃紺色である。II -3-2 図 16 は径 1.15cm、高さ 0.8cm、穴径 0.35cm、II -3-2 図 17 は径 1.15cm、高さ 0.85cm、穴径 0.3cm。



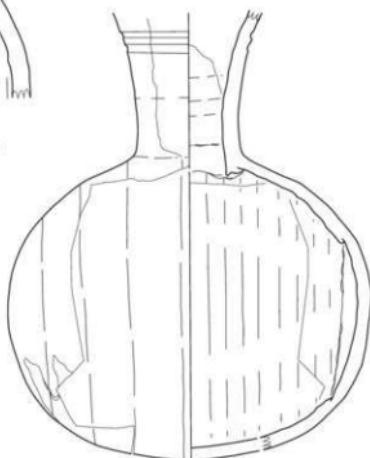
1 (14T)



2 (14T)



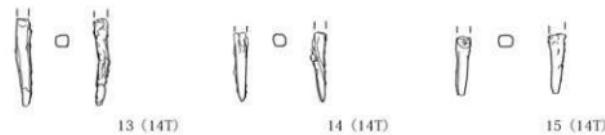
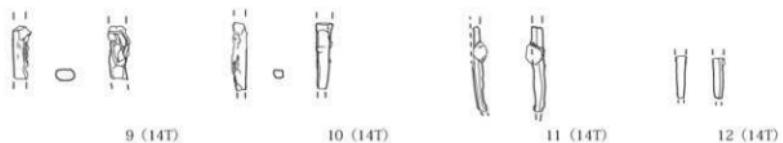
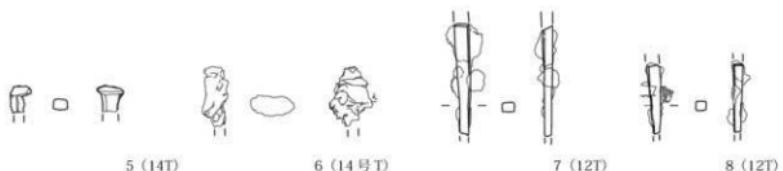
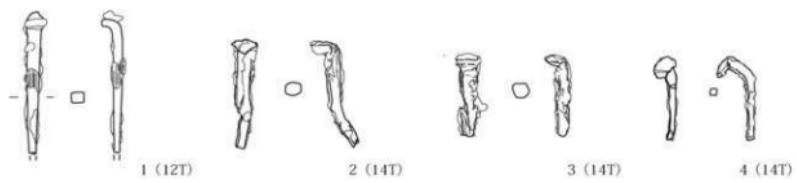
3 (14T)



4 (14T)

0 5cm  
S=1/2

II -3-1 図 出土遺物 須恵器



0                  5cm  
S=1/2

II-3-2図 出土遺物 鉄釘・ガラス小玉

#### ・石室石材

大量の河原石、角閃石安山岩、緑泥片岩の破片が出土した。いずれも主体部構築のための素材として搬入されたと考えられる。

#### 角閃石安山岩（II -3-3 図～5 図）

II -3-3 図 1～4 図 8 は角閃石安山岩の石室石材である。一部を図化した。14 号トレンチの礫床付近で出土した。これらは側壁に積まれた加工石材であるが、後世の擾乱により原位置を失ったものである。おおむね長径 20～30cm の転躰を素材に用いていると考えられる。上下は平坦に削るように加工されており、厚さが減じられている。厚さはおおむね 10～13cm である。また、側面の一辺を抉るような加工が見られる。いずれの加工にも盤状の工具が使用されており、痕跡が顕著に観察できるものがある。加工具の刃部の痕跡は幅約 5cm である。14 号トレンチ検出の側壁からは、抉った部分に隣の石材の礫面を嵌め込むようにして小口で積んでいき、側壁を組み上げたことが解る。

II -3-3 図 1 は完形である。長径 30.5cm、短径 25cm、厚さは 11cm である。

II -3-3 図 2・3、II -3-4 図 4～8 は一部を欠損する石材である。石材加工時には、石材の一端を打ち欠き荒削成形がなされたと考えられるが、石材中央で折断するほど加撃したとは考えづらい。これらは後世の石材の抜き取り時に破壊されたものと推察しておく。

II -3-5 図 9 と 10 はブロック状を呈し、平滑な面加工が施された石材の断片である。これらは、側壁に平積みされた扁平な石材と異なり転躰面が残されておらず、破損時の剥離面を除く全周に平坦な加工面が施されている。9 はとくに一端が L 字状に突起するように成形されている。漢道より奥に切石切組の壁があったと考えられる。

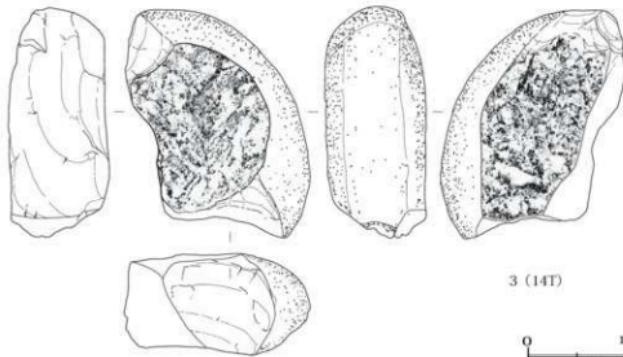
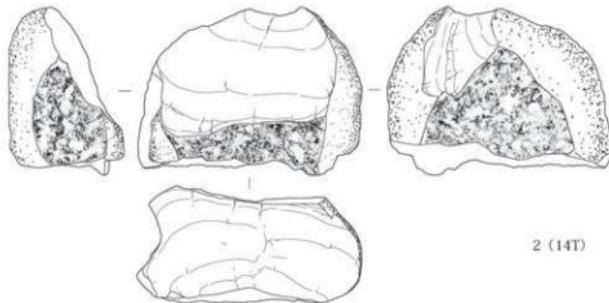
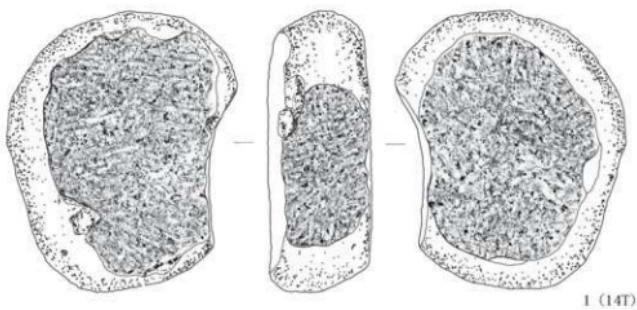
II -3-5 図 11～14 は角閃石安山岩の剥片である。14 号トレンチの上層から礫床付近にかけて多数出土した。剥片は長さ、幅ともに 10cm 前後のものが多く、いずれも表面に礫面を有する。側壁素材の石材を墳丘に持ち込み、加撃による成形加工をした際に剥離された調整剥片と判断される。14 号トレンチのサブトレンチにおいて、礫床下で確認した、角閃石安山岩の剥片を大量に含む層の存在も考慮すると、石室直下の基壇状盛土を築造した後に、石室石材の加工を行ったものと考えられる。

#### 緑泥片岩

ここでは図示しないが（一部を写真図版掲載）、少なくとも厚さ 5cm 超える厚手の板材から剥がされた剥片が多数、出土している。14 号トレンチの成果から、前門柱石には緑泥片岩が用いられたと判断され、他の門柱石、あるいは天井石にも大形で板状の緑泥片岩が搬入されたと推測される。そして素材を成形加工した際に発生した残滓が、大量に出土した緑泥片岩の剥片と考えられる。

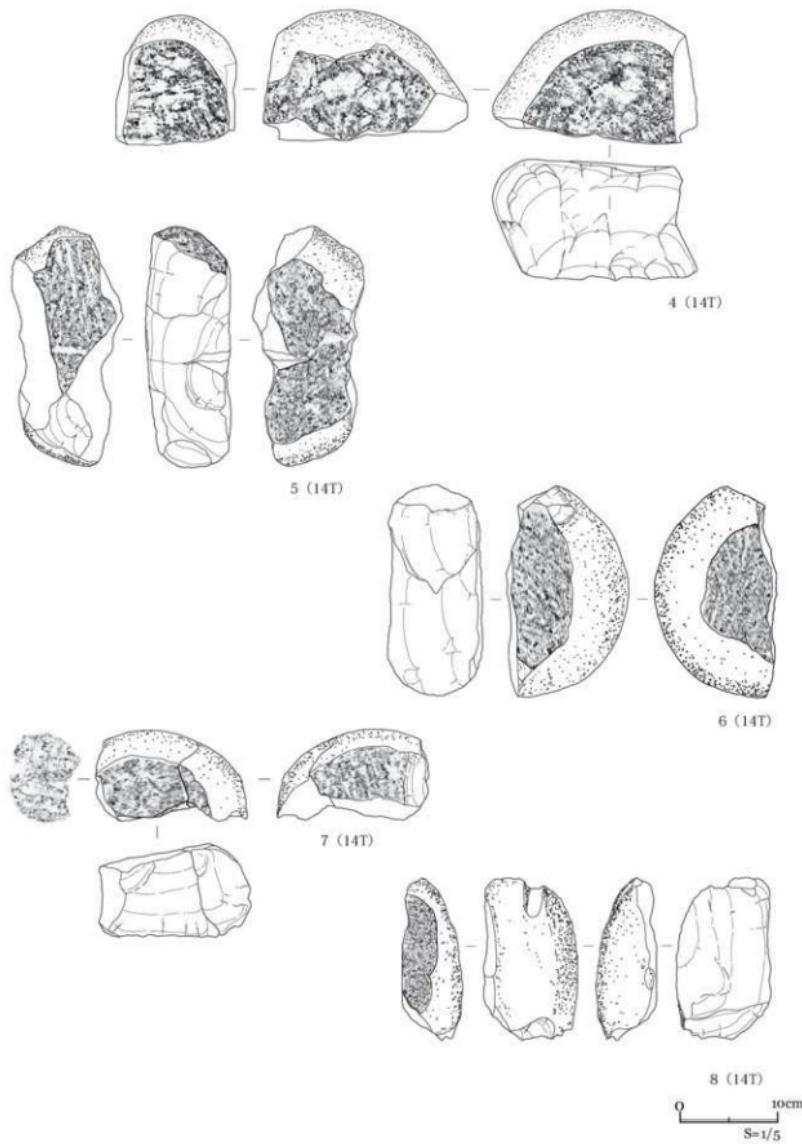
#### 河原石

河原石のうち、10～15cm の扁平なものは、礫床に用いられたものと考えられる。その他に、明らかに大きさの異なる長径 30cm、短径 15cm のものも出土した（一部を写真図版掲載）。前庭部の側壁ないしは閉塞に伴うものと推察される。

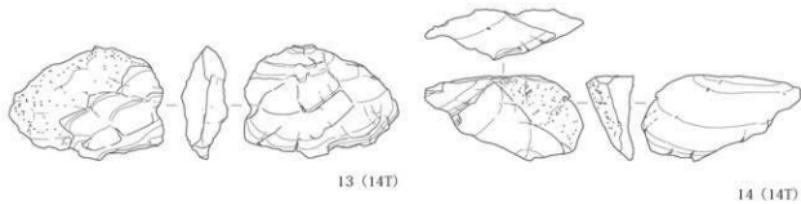
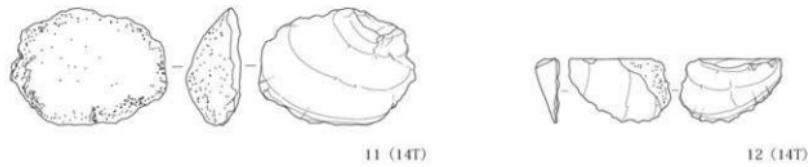
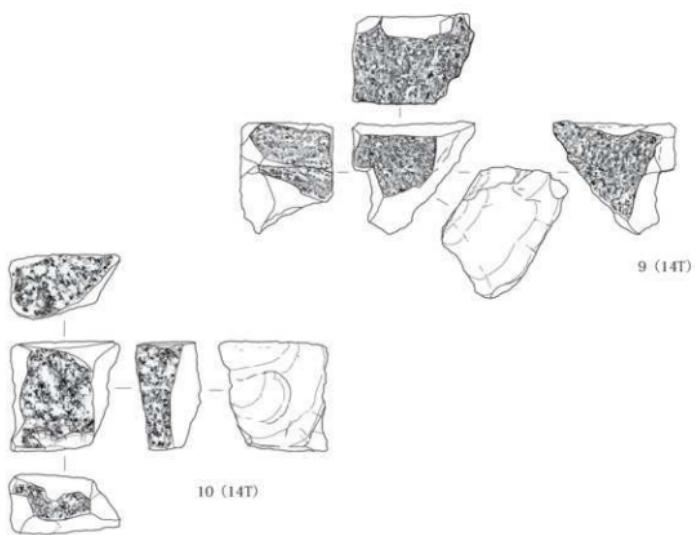


0                    10cm  
S=1/5

II -3-3 図 出土遺物 石材（角閃石安山岩）1



II-3-4 図 出土遺物 石材（角閃石安山岩）2



0 10cm  
S=1/5

II-3-5 図 出土遺物 石材（角閃石安山岩）3

## (2) その他の時代の遺物

主体部のトレンチの上層、およびその他のトレンチでは、縄文土器片や中近世の遺物が出土している。周辺遺跡の調査では集落の確認はされていないものの、他の時代の遺構確認面で縄文土器が出土することもある。山王塚西古墳では玄室の北側 2m の場所に加曾利 E III 式の竪穴建物跡を 1 軒検出しており、山王塚古墳では縄文土器の細片が多数出土している。このことから山王塚古墳周辺では、高密度ではないもののかつては縄文時代中期の集落が存在したものと考えられる。

また、遅くとも江戸時代には墳丘は信仰の場として、周辺は畠地として使われたと考えられることから、それらに伴う中近世の遺物が混入したと考えられる。

### 縄文時代（II -3-6 図、-7 図）

II -3-6 図 1 は 3 号トレンチ、2 ~ 4 は 4 号トレンチ、5 ~ 17 は 5 号トレンチ、II -3-6 図 18 ~ 28 は 9b トレンチ、29 ~ 34 は 11 号トレンチから出土した縄文土器の深鉢形土器の破片である。いずれも縄文時代中期後半で加曾利 E II ~ III 式である。

### 古代（II -3-8 図 1 ~ 4）

II -3-8 図 1 は須恵器片である。長頸壺と考えられる。1 号トレンチ覆土中から出土した。

II -3-8 図 2 は古瀬戸灰釉皿の底部片である。1 号トレンチの下方部表土上で採取した。

II -3-8 図 3 は平瓦である。3 号トレンチの表土層中から出土した。

II -3-8 図 4 は須恵器皿の小片である。3 号トレンチの表土層中から出土した。

### 中世（II -3-8 図 5 ~ 8）

II -3-8 図 5 は緑泥片岩製の板碑片である。8 号トレンチで出土した。

II -3-8 図 6 は青磁片である。13 世紀の所産であると考えられる。14 号トレンチ上層から出土した。

II -3-8 図 7 は宋銭「至道元寶」である。初鑄は西暦 995 年。14 号トレンチ上層から出土した。

II -3-8 図 8 は宋銭「聖宋元寶」である。初鑄は西暦 1101 年。14 号トレンチ上層から出土した。

### 近世（II -3-9 図 1 ~ 13）

II -3-9 図 1 は銅製煙管の雁首である。2 号トレンチの表土中から出土した。

II -3-9 図 2 は染付鉢である。8 号トレンチ 2 号溝跡から出土した。19 世紀前半の所産と考えられる。

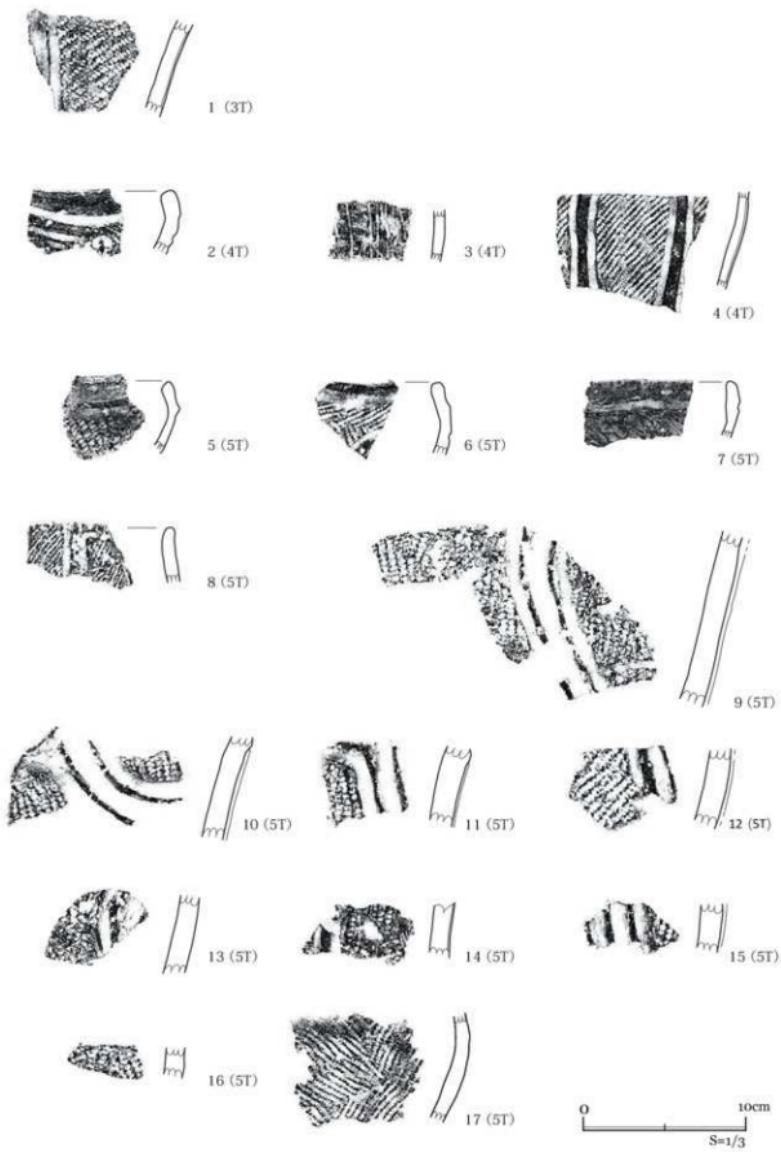
II -3-9 図 3 ~ 9 は染付碗である。3 ~ 8 は 8 号トレンチ、9 は 8 号トレンチ検出の 2 号溝跡から出土した。18 世紀後半～19 世紀前半の所産である。

II -3-9 図 10 は瓦質焙烙である。8 号トレンチ表土から出土した。

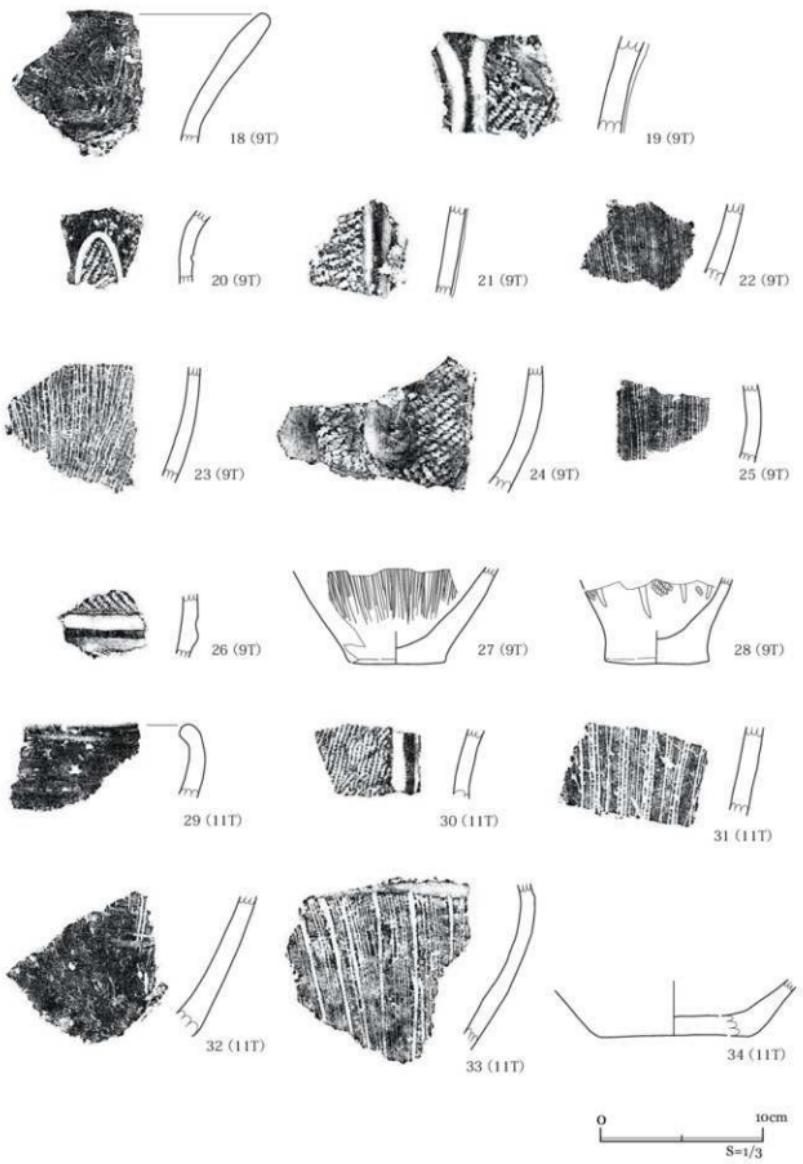
II -3-9 図 11 は鉄軸灯明皿である。8 号トレンチ覆土から出土した。18 世紀後半の所産と考えられる。

II -3-9 図 12 は焼締描鉢である。8 号トレンチ覆土から出土した。19 世紀前半の所産と考えられる。

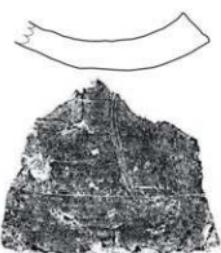
II -3-9 図 13 は鉄軸壺である。8 号トレンチ 2 号溝跡から出土した。18 世紀前半の所産と考えられる。



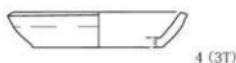
II -3-6 図 出土遺物 繩文時代



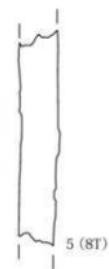
II-3-7図 出土遺物 繩文時代



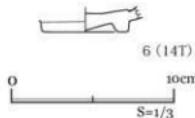
3 (3T)



4 (3T)



5 (8T)



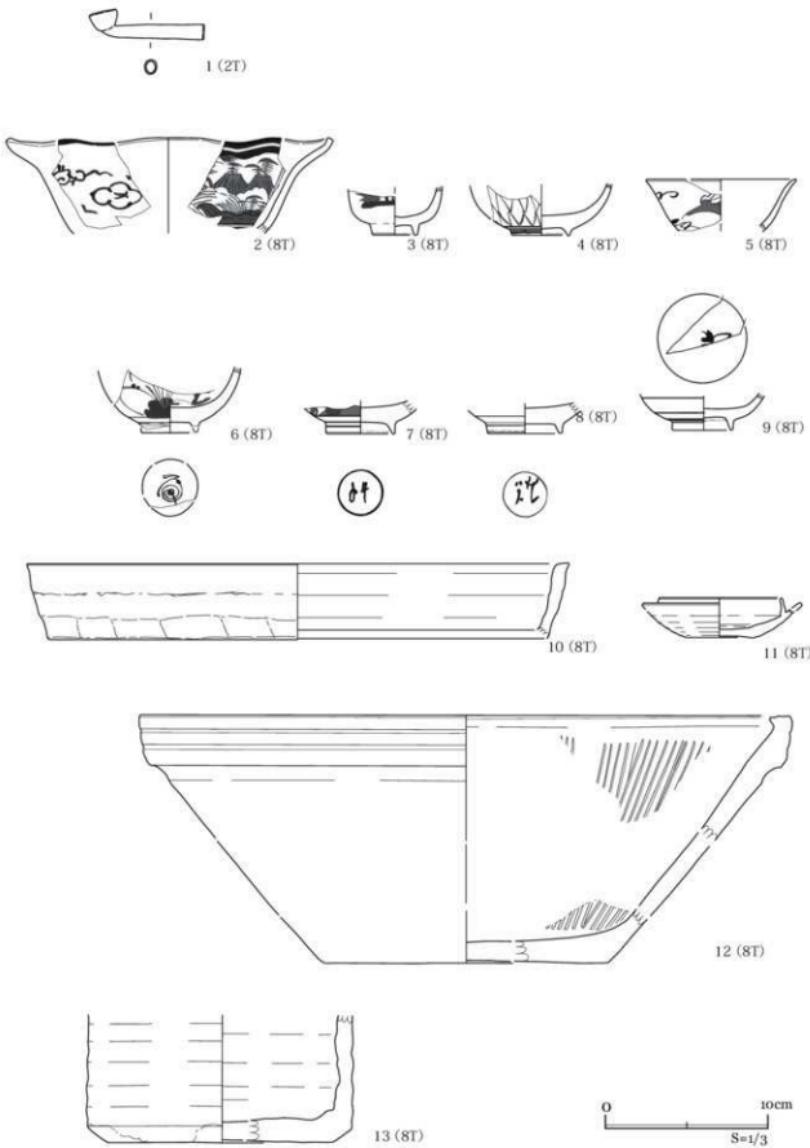
7 (14T)



8 (14T)



II -3-8 図 出土遺物 古代・中世



II -3-9 図 出土遺物 近世

## 第4節 地中レーダー探査

清水理史\* 石森光\* (\* 株式会社中野技術)

### 地中レーダー探査の概要

地中レーダー探査（Ground Penetrating Radar = GPR 探査）にあたり、これまでの発掘調査により遺構が確認される深度が約 2.0m 前後と推察されることから、比較的深い深度まで探査が可能な 270MHz アンテナを使用した。測線はすべて 0.5m 間隔で設定し、測定位置がわかるように 1 m 毎にマークを入れ観測している。

1 回目（①）の GPR 探査は平成 26 年 11 月 28 日に実施した。2 回目の GPR 探査は 1 区（②-1）として平成 30 年 6 月 4 日に、2 区（②-2）として 7 月 19 日に実施した。天候はいずれも晴れであり、低木、雑草、落ち葉を取り除くと地面が乾燥しており、気候条件は適している。しかし、切り株や根が表出していることも多く、アンテナを走査するには比較的厳しい条件であった。使用した機器の仕様は II -4-1 表のとおりである。

II -4-1 図は計 3 回の GPR 探査地点と発掘調査地点を平面図に落とした図である。①の探査範囲は山王社へ向かう幅 1m 程の参道を中心とし墳丘手前の鳥居を越えた付近から山王社周辺の墳頂まで 25 × 10m の範囲を対象とした。測線は基点から北方向（X 軸）へ 25m、21 本、東方向（Y 軸）へ 10m、37 本設定し、すべての範囲ではないが縦横断の探査を実施した。当初から参道部分が古墳の前庭部および石室の崩落による窪みを利用している可能性があり、前庭部から墳頂の主体部にかけて探査を行い、地中の様子を探ることにした。

②-1 の探査範囲は墳頂部で①の探査範囲内、14 号トレンチと一部重複する地点である。測線は基点から北方向（X 軸）へ 7m、15 本、東方向（Y 軸）へ 6m、13 本設定し、縦横断の探査を実施した。14 号トレンチの発掘調査の結果を受け、前室、玄室に絞り探査を行うことで、新たな発見があることを予想するとともに、トレンチがどのような反射を示すかを検証するために再探査を行うこととした。

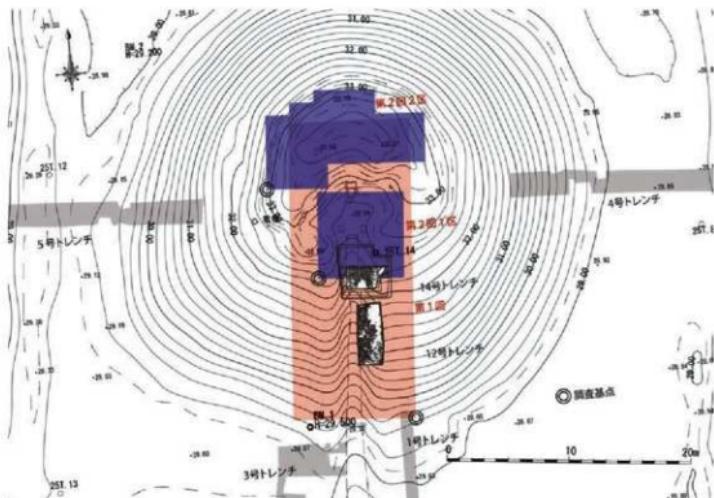
②-2 の探査範囲は山王社北側の埋葬施設の北から西側の範囲を中心とした地点である。測線は山王社と樹木、切り株を避ける形で設定し、基点より北方向（X 軸）へ 6 m を 4 本と 7 m を 7 本、西方向（Y 軸）へ 9 m を 4 本と 13m を 13 本設定し、縦横断の探査を実施した。この範囲は第 1 回の調査では南北方向での探査しか行っておらず、今回は縦横断の探査を行うことで埋葬施設がこの位置においても確認されるか、また盗掘坑など、埋葬施設とは異なる反射が確認されるのかを検証した。

GPR 探査の解析は、探査により得られたプロファイル図、及び、プロファイル図を基に作られた簡易的な平面図であるタイムスライス平面図（T S 平面図）を基にして地中の遺物の存在について判断する。なお、図中において強い反射ほど赤く表示されるように設定している。

①の探査地点は距離 25m に対して約 4 m の比高差がある斜面地である。GPR 探査は性質上、地面上に密着するアンテナから垂直方向にレーダーが照射されるため、角度が大きいほどプロファイル図、T S 平面図ともにイメージされる反射のずれも大きくなるため注意が必要となる。

名 称	仕 样
コントロールユニット SIR 3000 (アメリカ・G.SSL 社製)	プロセッサ: 32 ビット チャネル: 1ch 送受信 時間レンジ: 0 ~ 8.000ns スキャンレート: 150 スキャン / 秒 A/D 分解能: 8 ビット / 16 ビット データ保存: 内蔵ハードディスクまたはフラッシュメモリ (CF) モニター: 8.4 インチ TFT800 × 600 液晶カラーディスプレイ 電源: 内蔵 DC10.8V バッテリー 外形寸法・重量: 31.5 × 22.0 × 10.5cm・約 4.1kg (バッテリー含む)
アンテナ Model 50270S (アメリカ・G.SSL 社製)	中心周波数: 270MHz アンテナ形式: 2 アンテナ一体型 電磁シールドタイプ 電源: コントロールユニットからの供給による 外形寸法・重量: 45 × 45 × 17cm・約 9.6kg

II -4-1 表 使用機材



II -4-1 図 レーダー探査実施地点

## GPR 探査の結果

①の探査において前庭部から埋葬施設にかけて反射を確認することができた。II -4-2 図は測量平面図に T S 平面図を重ね、測量断面図にプロファイル図を重ねた図である。この図に見られる反射と、発掘調査によって予測される埋葬施設について記載している。

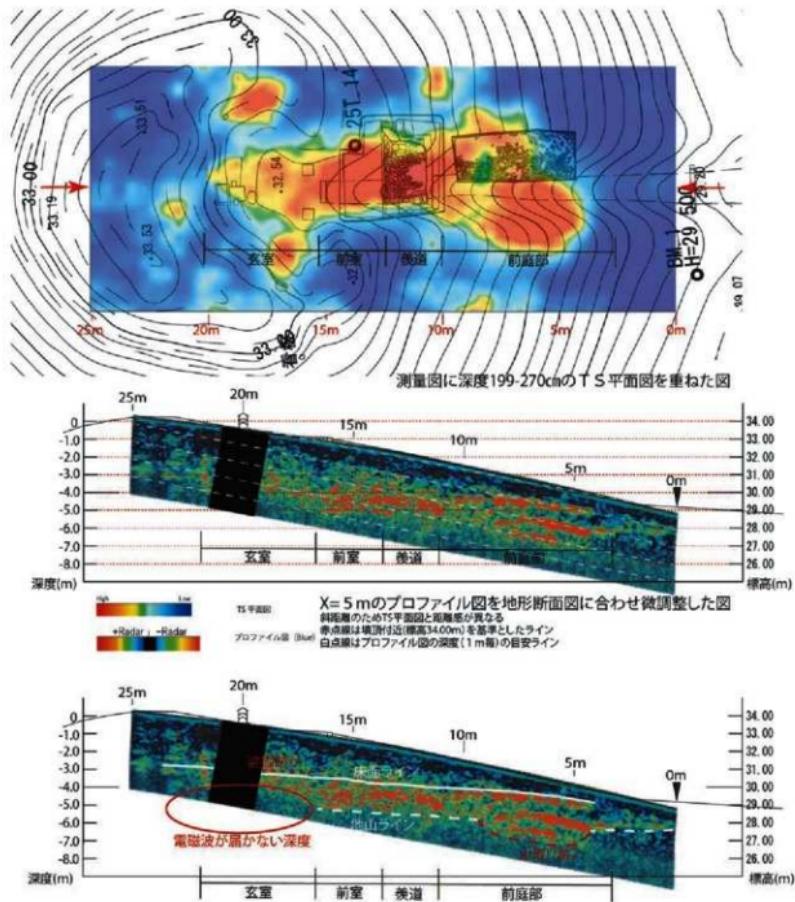
$Y = 5.0\text{m}$  のプロファイル図は参道から山王社へほぼ探査範囲の中央を南北に走査している。墳丘の中心線であり、埋葬施設が予想される地点である。プロファイル図を見ると距離約  $3.0 \sim 16.0\text{m}$ (右→左、南→北) の範囲で非常に強い反射が確認されていることがわかり、T S 平面図においてもほぼ同様の結果を示す。なお、地形断面図に沿うようにプロファイル図を傾けているため、斜距離で長さは異なっている。深度は墳頂(標高  $34.00\text{m}$ ) を  $0\text{m}$  として深度を測っている。文中での深度はプロファイル上の白線を目安にしている。

### ④前庭部

プロファイル図の距離  $3.0\text{m}$ 、深度  $1.3\text{m}$  付近で強い反射が確認され、距離  $4.0\text{m}$  付近から深度  $0.6\text{m}$ 、 $1.4\text{m}$  と上下 2 段の強い反射が距離  $8.0\text{m}$  付近まで確認される。この 2 段に分かれた反射については漢道の天井部と床面であると想定していた。しかし、発掘調査 12 号トレンチでは南側約  $0.8\text{m}$ 、北側約  $1.6\text{m}$  の深度で前庭部の床面が確認され、墳丘の斜面角度に合わせ深度が深くなっている。プロファイル図では 12 号トレンチ南側に相当する  $4.0\text{m}$  付近での深度  $0.6 \sim 0.7\text{m}$ 、北側  $10\text{m}$  手前付近で深度約  $1.3\text{m}$  であり近似値を示している。このようなことから上段に見られる強い反射を前庭部の床面と捉え、深度  $1.4\text{m}$  で確認された下段の強い反射は古墳築造時の版築等の反射と捉えるのが妥当であろう。また、発掘調査では床面から立ち上がるような壁面は確認されず、GPR 探査の短軸  $X = 7.0\text{m}$  付近のプロファイル図を見ると両袖の壁が存在していないことからも前庭部であることを示しているといえる。前庭部の位置から距離  $0 \sim 2.0\text{m}$ 、深度  $0.8\text{m}$  に見られる平坦面を持つやや強い反射も前庭へとつながる埋葬施設の一部である可能性も考慮される。

### ⑤漢道

プロファイル図の距離  $9.0 \sim 13.0\text{m}$  にかけての部分で漢道に相当すると推察される。周間に比べやや反射が弱いが、横断面の  $Y$  方向のプロファイル図をみると限り比較的強い反射を示している。T S 平面図では  $9.0\text{m}$  付近から幅が狭まっており 12 号トレンチと 14 号トレンチの間に前庭部との境があると予想される。この地点は 14 号トレンチとの重複地点となり発掘調査の結果、漢道と考えられている。発掘調査では天井石は残存しておらず、河原石を敷き詰めた床面に側壁をわずかに残すのみであった。 $Y = 9.5\text{m}$  付近のプロファイル図では深度  $1.2 \sim 1.7\text{m}$  にかけて平坦な床面と思われる反射が見られるが、全体的には平坦面は少なくややレンズ状の反射を示しており、発掘調査においても覆土中に多くの石が混入していたことから側壁、天井部の崩落の影響を受けている可能性も考慮される。また、 $Y = 8.0 \sim 8.5\text{m}$  のプロファイル図では床面上にも石材と思われる反射があることから閉塞の状況が残されていることも予想される。



II-4-2 図 T-S 平面図・プロファイル図

### ② 前室

プロファイル図の距離 13.0 ~ 15.0m にかけての部分で前室に相当すると推察される。床面の反射は深度 1.6m 付近に確認され、さらに深い深度において非常に強い反射が認められる。GPR 探査時はこの深い深度の反射を埋葬施設の一部と捉えていたが、発掘調査の結果を踏まえ改めて考えると、前庭部同様、版築状の埴丘構築による反射であると判断したい。床面想定ラインより上層においても強い反射が認められるため、天井、側壁の石材が残存している可能性も考えられる。横断面の Y 方向のプロファイル図を見ても天井や側壁を想起させる反射は見られず、むしろ床面の平坦面に重な

るような堆積状況を示していることから、原形は留めていないと推察される。距離 10.0m 付近で認められる強い反射が発掘調査により確認された門柱石に相当すると思われる。このような反射が X = 15.0m 付近にもみられることから、前室と玄室の境にも大きな石材が存在することが示唆される。

#### ⑩玄室

プロファイル図の距離 15.0 ~ 21.0m 付近に確認される反射である。確認される深度が 2.5m 近くになり、電磁波の到達も限界であるため反射もやや弱くなったと判断する。玄室が想定される部分であるが、距離 15.0 ~ 23.0m、深度 2.0m にかけて大きく掘削されていると考えられ、盗掘にあっていていると判断した。天井、側壁、床面のいずれの反射の単位も小さく、石室構造の埋葬施設としては石材の反射も小さく、少ないように感じられる。

#### 平成 30 年実施調査について

平成 30 年②-1 の GPR 探査では、①の GPR 探査及び発掘調査の結果を受け、玄室周辺の様子をさらに探るために実施した。誘電率の調整不具合により深度が約 2.0m までしか届かず、玄室の床面の状況から規模を把握するという目的は果たせなかったものの、一度掘削している 14 号トレンチを明瞭に認識することができ、また、天井石とも考えられる石材の反射を捉えるなど一定の成果を上げることができた。

②-2 の GPR 探査についても誘電率の調整不具合により浅い深度の反射を観測するのみであったが、1.3 ~ 1.5m と想定より浅い深度に遺構と思われる反射が確認された。この反射は比較的整然としていると推察され、遺構の存在を示唆させるものであるが、直接、埋葬施設との関連を結びつけるのは困難である。今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。

#### まとめ

山王塚古墳の埋葬施設について非破壊調査である GPR 探査の手法を用いて埋葬施設の存在、構造について探った。①の調査では上円下方墳であるこの古墳が府中市武藏府中熊野古墳と異なり、葺石で覆われていない古墳である可能性、複室構造の主体部を持つ埋葬施設の可能性、また調査前で判然としない部分もあったが羨道・前庭部が約 10m の長さで存在することを指摘した。これらの探査結果はその後の 12 号トレンチ、14 号トレンチの発掘調査の際の手助けとなったと同時に、それぞれの反射と遺構との関係が検証されることで一定の成果を上げたと考えられる。

推定した遺構プランについては GPR 探査の手法による性格上、時期や性格といった考古学的情報を得ることは困難である。今回のように発掘調査の結果を踏まえ、探査結果をさらに踏み込んで検証することで、GPR 解析技術の向上が図れ、埋葬施設構造を知る上でより詳細な遺構の推定につながることが明らかとなった。今後は複合的な解析をしてくことが課題となるだろう。

なお、紙幅の都合上、GPR 探査の方法、調査地点等をはじめ、測線図、結果図についても大きく割愛している。詳細は川越市が保管する報告書に記している。

## 第5節 発掘調査成果のまとめ

平成24年度から4次にわたる発掘調査で山王塚古墳の墳丘盛土の構築手順、規模、石室の構造を考察する材料が得られた。ここではまず、発掘調査で明らかとなった山王塚古墳の特徴を概観し、墳丘と石室の形成過程について、明らかになった事実を整理する。そして、前章の山王脇遺跡の発掘調査成果を参照し、山王塚古墳の周溝の規模と形状に関する情報を明らかにする。最後に、山王塚古墳の石室構造や使用石材についてまとめる。

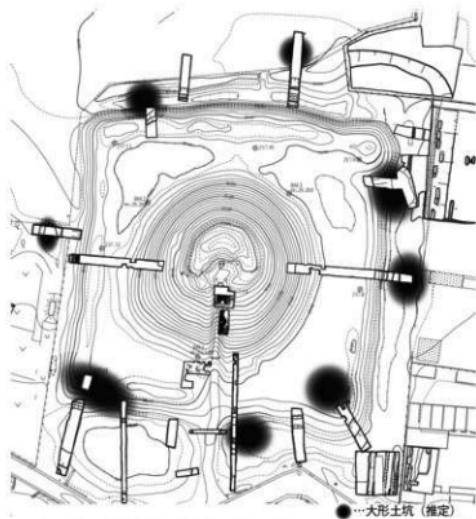
### ・墳丘形態の特徴

平面形で一段目が方形の墳丘の上に、二段目の円形の墳丘を乗せる、二段築成の上円下方墳である。下方部は縁辺部を廻る土手状盛土と、土手状盛土と上円部の間にあたる水平盛土からなる。葺石や貼石、縁石、埴輪などの外部表装は伴わない。主体部は上円部の南側に開口する横穴式石室である。主軸は南北軸より5°程度東へ傾く。墳丘の周囲には、緩やかで浅い幅広の周溝が廻る。石室開口部の延長上に周溝を掘り残した土橋が設けられており、現在は山王社への参道として引き継がれている。

### ・墳丘の構築過程と大形土坑

上円部から水平盛土を断ち割った1・4・5号トレンチの土層断面から、上円部墳丘盛土は下方部の水平盛土に先行して構築されたと判断できる。また、土手状盛土から水平盛土にかけてを断ち割った4・5号トレンチの土層断面から、土手状盛土は水平盛土に先行して構築された。上円部墳丘盛土と土手状盛土との先後関係を直接示す材料はないが、土手状盛土が大形土坑を埋め戻した上に積み上げられた点に注目したい。

大形土坑は、1・2・4・6・9・11号トレンチ、S59-T1・3、山王脇遺跡第1次調査区西側において、周溝の底面から下方部の土手状盛土付近にかけての直下に掘り込まれていると判断される。トレンチ調査のため平面形の全体を捉えてはいないが、底面を確認した1・9号トレンチ、S59-T3、山王脇遺跡第1次調査(D-D'土層断面)から、大形土坑は現況地表面から2~3mの掘削深度である。この大形土坑を掘削した後に埋め戻し、その上に墳丘盛土や周溝底面の成形を行っている。大形土坑の



II-5-1図 大形土坑分布状況 (S=1/1000)

掘削の結果として、大量のローム土（ハードローム）が掘り出されたことになる。墳丘の「芯材」や石室を支えた基壇状盛土は夾雜物の少ないローム土が用いられるが、このローム土は大形土坑から掘り出されたものと考えるのが合理的である。すなわち、この大形土坑は上円部の墳丘盛土や石室を支える基壇状盛土の構築のための、ローム土の採掘坑と考えておきたい。もちろん、周溝の掘削に際して発生する黒色土やローム土も墳丘の構築材となったはずである。芯材のローム土の上には黒色土、暗褐色土、小礫を混ぜた土層が被覆する。

この上円部墳丘盛土のためのローム土採掘坑を埋め戻した上に土手状盛土が築かれたことを考えると、まず上円部の墳丘盛土を先行して積み上げたことになる。その後に下方部外縁の土手状盛土を積み上げ墳丘の外縁区画を確定させ、最後に上円部と下方部の土手状盛土の間を埋めるように下方部の水平盛土を行った。

上円部の構築状況も一様ではない。1・4・5号トレンチでは、上円部の裾側の墳丘盛土は旧地表面に積み上げられたことを示している。一方で、14号トレンチでは、石室直下は黒色土及び関東ローム層上面のソフトロームまでが深度50cm前後に渡り取り除かれ、その上にハードロームを180cmの厚さまで叩き締めながら積み上げたことが解る。つまり、ローム土を旧地表面よりも130cm程度高く基壇状に積み上げた上に石室を設けている。4・5号トレンチで確認した上円部裾部の墳丘盛土と比較すると、基壇状盛土はローム土に微量の黒色土の混入もない。このことから、両者は工程的に区分される。つまり、まず地表面を取り除いて基壇状盛土を先行して積み上げたか、あるいは上円部墳丘盛土を旧地表面上にある程度まで積み上げたのちに石室構築場所の墳丘盛土と、旧地表面を切り取るよう掘り込んでから基壇状盛土を積み上げたかのいずれかが考えられる。

また、基壇状盛土の直上では、角閃石安山岩の碎片を大量に含んだ厚さ2cmの土層を確認した。角閃石安山岩は石室の側壁に用いられた石材であり、これは石材加工時に発生する残滓の調整剝片や碎片に由来すると考えられる。このことから、基壇状盛土を積み上げたのちに、その上に石室を構築するために、その場で石室石材の加工に着手したものと考えられる。それゆえ、石室直下の基壇状盛土および墳丘の芯材のローム土を除いた、それ以降に積み上げられた墳丘盛土や周溝覆土からは大量に緑泥片岩や角閃石安山岩の剥片が出土しているものと考えられる。

この基壇状盛土の上に石室を構築することで、墳丘内における石室の位置は相対的に上へ持ち上がる。大形の墳丘構築を前提とし、掛かる土圧を少しでも軽減するための措置であろうか。

#### ・墳丘の規模

山王脇遺跡第1、5、13次調査の成果を補足情報として、計測および推定した結果、山王塚古墳の規模は以下のとおりである。

上円部 直径 37m

下方部 一辺およそ 69m（東西69.1m、南北推定70m）

周溝外範囲 一辺およそ 90m（東西推定88m、南北推定94m）

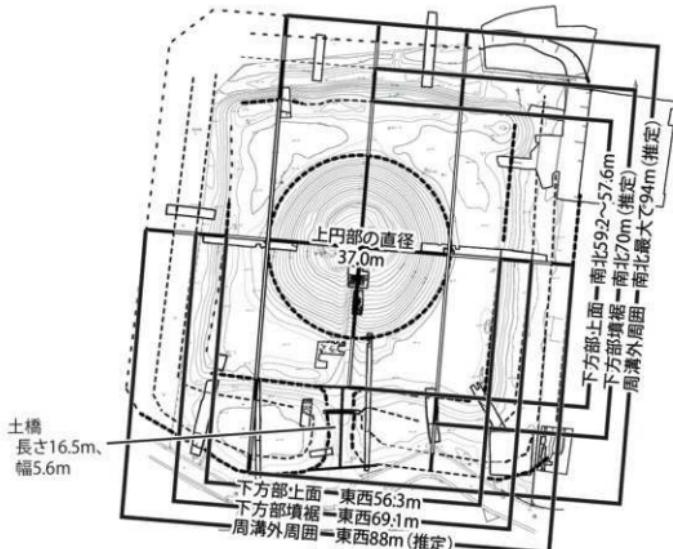
上円部の直径は4号トレンチ、5号トレンチの成果を基に、37.0mと計測する。上円部基底の裾

部に下方部の水平盛土が0.9～1.2m程度乗り上げるように積み上げられているが、下方部水平盛土から上円部埴丘盛土が立ち上がる点を計測点とした(図: II-2-10、-13図)。なお、下方部水平盛土に覆われた上円部の基底部の径は39.2mである。

下方部は東西軸では4号トレンチ、5号トレンチ、S59-T3の成果を基に一辺69.1mである。計測値は、下方部から周溝にかけての墳裾までの法面を含めたものである。すなわち、周溝の内縁側立ち上がりまでを含める。南北軸では、北側周溝の内縁側立ち上がりを確実に抑えたトレンチがないため、正確な値は計測できないが1・6・8・9号トレンチ、S59-T1・2の成果から、70mと推定する。

下方部平坦面の外周部分には土手状盛土が廻る。下方部上面の規模は、下方部の法面と土手状盛土の頂部外縁の境に囲まれた範囲である。なお、埴丘南側は土手状盛土が顕著ではないため、下方部の法面と下方部平坦面の接続部を計測点とする。東西で56.3mである。南北は埴丘北西側の形状が重むため、おおむね59.2～57.6mとなる。なお、土手状盛土は4号トレンチで幅4.0m、旧地表面からの高さ0.6m、水平盛土上面との比高差は0.3mである。土手状盛土と上円部埴丘盛土の間は、下方部水平盛土が間を埋めており、現況面での土手状盛土と水平盛土との比高差は最大で0.8mである。この水平盛土の範囲は平坦な空間となる。上円部立ち上がりと下方部法面との間は埴丘東側の4号トレンチで10.6m、埴丘西側の5号トレンチでは8.7mである。西側の埴丘縁辺はやや抉れており、盛土が流出したことが予想される。

周溝幅はおおむね15mである。東側で4号トレンチと山王脇遺跡第1次調査・第13次調査の成果から、上幅14.9m、底面幅4.0mである。南側では、6号トレンチから最大19.5mである。北側



II-5-2図 山王塚古墳埴丘寸法 (S=1/1000)

は山王脇遺跡第5次調査の成果を参考し、16.3mと推定する。

周溝外周囲は、幅広の周溝を持つ南北軸では最大で94mと推定する。東西軸は、西側の周溝の外縁側立ち上がりをはっきりと捉えていないが、東側と同じ規模と想定すると、東西88mと推定される。

土橋は、幅5.6m、長さ16.5mである。

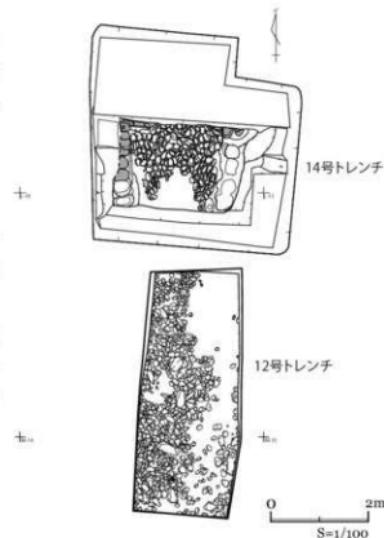
上円部墳頂は中心部が窪んでおり等高線は馬蹄形を描く。現況での高さは標高33.5m、旧地表面は28.3～28.5mであるから、少なくとも5mの墳丘盛土を積み上げたことになる。現況墳頂部と周溝底面との比高差は、およそ6.5m～7mである。周溝底面と一段目である下方部上面（水平盛土）の比高差はおよそ2m、下方部上面と墳頂部の比高差はおよそ4.5mである。

#### ・石室の構造

石室はレーダー探査の成果から、複室構造の横穴式石室で、奥から玄室・前室・羨道で構成されると推定される。発掘調査の成果はこれと矛盾なく対応する。12号トレンチでは前庭部の礫床を確認した。14号トレンチでは、羨道を検出した。床は礫床である。側壁は角閃石安山岩を小口積みにする。両壁は直線的に平行し、持ち送り構造と考えられる。前室との間には緑泥片岩製の門柱石が立てられた。樋石はない。羨道の幅は1.9mである。サブトレンチ南端で確認した床下の角閃石安山岩の石材を、玄門を支える基礎構造物と捉えると、羨道の幅と奥行きはほぼ同じ大きさとなり平面形は矩形となる。

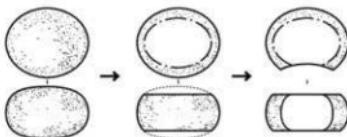
羨道の天井の高さは1m程度と推測される。12号トレンチでは羨道の側壁の延長線上に前庭部の側壁を確認できなかったことから、前庭部はハの字形に聞くものと予想される。

側壁の裏込めは良質のローム土と砂砾を互層状に突き固めている。

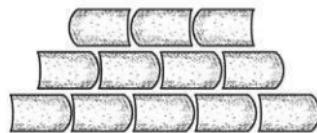
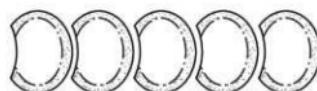


II-5-3図 主体部検出状況

側壁に用いられた角閃石安山岩の石材加工模式図



側壁の小口平積復元模式図

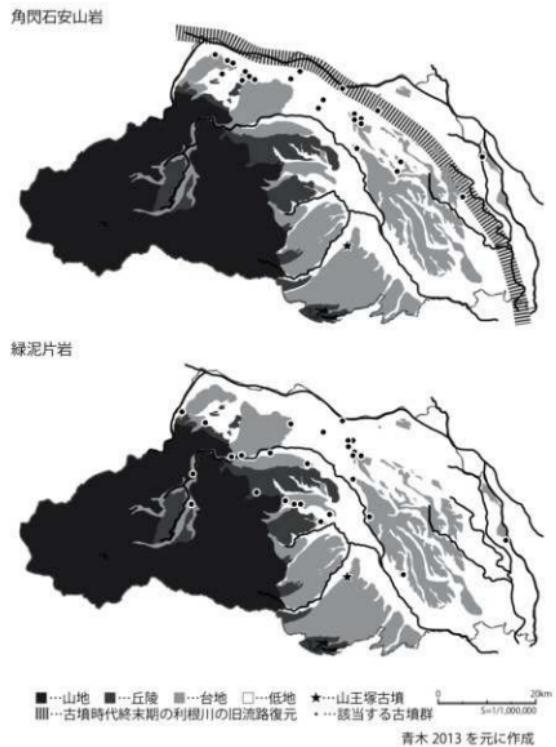


II-5-4図 側壁石材加工状況模式図

角閃石安山岩の側壁石材は、長径 30cm の転礫の上下を扁平に削り、側面の一片を抉るように加工して平積みしている。したがって、石室内の壁面は転礫面である。横穴式石室の壁面に角閃石安山岩が用いられる場合、壁面側を平坦に加工する事例が多い。白山古墳（行田市）では横穴式石室の構造は不明であるものの、石室石材に緑泥片岩と角閃石安山岩が用いられたことが解っている（小久保ほか 1988）。墳丘で採集された角閃石安山岩製の石材は、加工状況や大きさともに山王塚古墳出土の壁材と酷似しており、山王塚古墳の羨道の側壁と共に考えられる。

#### ・角閃石安山岩および緑泥片岩の石材について

角閃石安山岩は群馬県榛名山の二ツ岳を給源とする火山噴出物である。古代における二ツ岳の火山活動の主なものとしては 6 世紀初頭の噴火で降下した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）と 6 世紀中葉の噴火で堆積した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）が挙げられる。榛名二ツ岳伊香保テフラ噴出の際には、角閃石安山岩を含む火山噴出物が二ツ岳から北東方向を中心として大量に降下し利根川



II -5-5 図 横穴式石室に用いられた石材の分布図

まで達したとされる。その結果、旧利根川水系へ角閃石安山岩の転礫が流入した。

利根川は江戸時代初期の東遷事業により銚子河口から太平洋に接続されたが、それ以前は東京湾へ注いでいた。およそ 1500 年前、利根川は、渡良瀬川による沖積低地から大宮台地の東側にかけて幾筋かの網状の流路に分かれしており、当時の流路は自然堤防の分布や（柴田 2005）、旧河道や氾濫原における角閃石安山岩の分布踏査（秋池 2000）から復原されている。換言すれば、旧利根川河道は角閃石安山岩の採取可能地であり、角閃石安山岩を横穴式石室の石室石材に用いた古墳は旧利根川流域からそれほど離れていない場所に分布する（Ⅱ-5-5 図）。

山王塚古墳で使用された長径 30cm 超の転礫は、礫面の稜線はほぼ滑らかになっていることからも、本庄市から深谷市付近にかけての沖積低地が採集地として考えられる（秋池前掲※）。その場合、採集地から山王塚古墳までは直線距離でおよそ 30km 離れていることになる。

緑泥片岩は三波川帯の変成岩中から採取される岩石で、板状に割れる性質から、古くから石材として用いられている。埼玉県内では、小川町下里の櫻川流域や荒川上流の長瀬町野上下郷は中世の武藏型板碑の石材採掘遺跡として知られる。古墳の横穴式石室の石材としても用いられており、荒川水系の上流域に広く分布しているが、山王塚古墳は北武藏における分布の南限と考えられる（北武藏産出と考えられる緑泥片岩の遠方での搬入例としては多摩川流域の神奈川県川崎市第六天古墳や東京湾を挟んで対岸である千葉県木更津市の金鈴塚古墳などが知られている）。

なお、比企丘陵を中心に北武藏において横穴式石室の石材として多用される岩殿丘陵、比企丘陵産出の凝灰岩は、碎片も含めて山王塚古墳では確認されていない。

※秋池氏には資料を実見していただき、御助言を賜った。

#### 主要引用参考文献

- 秋池武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩の分布と歴史的意義—榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩—」『群馬県立歴史博物館紀要』21 群馬県立歴史博物館
- 小川町編 2003 『小川の歴史 通史編上巻』小川町
- 小泉功 1984 「川越市南大塚古墳群の山王塚について」『紀要』21 埼玉県立川越高等学校
- 小泉功 1997 『山王塚脇遺跡』川越市埋蔵文化財発掘調査報告 20 川越市教育委員会
- 小久保徹、杉崎茂樹、若松良一、田中正夫 1988 「行田市高山古墳、白山古墳及び花園町黒田古墳群の測量調査」『調査研究報告』1 埼玉県立さきたま資料館
- 柴田徹 2005 「利根川の流路の変遷」『江戸川の社会史』 同成社

